



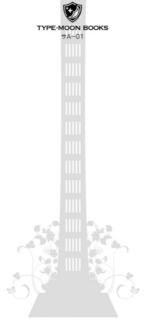




ロード・エルメロイⅡ世の事件簿



「case.剥離城アドラ」



Lord El-Melloi

II

Case Files

ロード・ エルメロイ II 世の 事件簿

・ 「case.剥離城アドラ」

目次 Contents

『序章』 005

『第一章』 015

『第二章』 085

『第三章』 173

『第四章』 235

『第五章』 323

『終章』 393

『解説・あとがき』 408

ロード・エルメロイII世の

事件簿

1 「case.剥離城アドラ」

角川文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信すること、あるいはウェブサイトへの転載等を禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時 に予告なく変更される場合があります。

本作品の内容は、底本発行時の取材・執筆内容にもとづきます。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは関係がございません。

目次 Contents

序章

第一章

第二章

第三章

第四章

第五章

終章

解説・あとがき



「一あなたの師匠は、最悪の魔術師ですわ」

ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトは、あまりにも憎々しげ に、あまりにも苛いら立だたしげに、その言葉をぶちまけた。

当然の評価と思っていたので、反論する気は起こらなかった。 もっとも、起こったところで、口にはできなかったと思う。それだ けの敵意が彼女の声音には籠もっていたし、敵意以上の魔力がその 腕を循環していたからだ。ある種の紋様のごとく流れている魔力 は、今にも牙を剝かんと吼え猛っている。

ああ、もちろん、さすがの自分でも知っているのだ。

それは、魔術刻印と呼ばれる紋様であった。

魔術師に付与される、人工的な臓器のようなものだとも、教えられている。

彼女のような、古い魔術師の家がその歴史とともに受け継いできた、ある意味で最大の家宝であり――最大の呪いでもある――子相伝の、固定化された神秘そのもの。

さらに言えば、この少女が得意としているのは、ガンド撃ちと呼ばれる魔術だった。

本来は指さした相手を病に陥れるという軽微な呪いなのだが、彼女が魔術刻印を通して発動させた場合は、その秘奥──心臓を止めて即死させるという〈フィンの一撃〉に達している。ゆるりと人差し指を動かすだけで、抵抗力皆無の自分などあっさり絶命するに違いない。

それでも、不思議と恐れはなかった。

「あなたの師匠は、最悪の人間ですわ」

もう一度、念を押すように少女が言う。

もっともだと思う。

完全無欠に賛成だ、と両手をあげたいぐらいだった。

ただ、この場でそうしても、この美しい少女はきっと納得すまい。むしろ静かに激するだけだと、短いつきあいでも思い知らされていた。

「......否定は、しません」

なるだけ曖昧に逃れようとすると、

「じゃあ、なぜ黙って、あの師匠についていますの?」

と、畳みかけられた。

もう一度いい加減な答えをすれば、今度こそガンドが飛んできそうだった。彼女の魔力であれば、物質的にも煉れん瓦が程度はたやすく貫通するだろう。

「師匠は.....」

と、言いかけて。

ふと、ある記憶が脳裏をよぎった。

答えになるかは分からなかったが、そのままのことを自分の口は 滑り出させていた。

「……以前、師匠が猫と喧嘩してました」

「猫? それっていい話のつもり?」

「かもしれません。散歩道をねぐらにしてる野良猫で、しょっちゅう悪さをするらしく、通行人からは嫌われてました。師匠もお気に入りのブーツに嚙かみつかれて、ぎりぎりと歯ぎしりしては復ふく讐しゅう用の魔術を調べていたぐらいです。その野良猫がある日、トラックか何かに撥はねられました」

撥ねられたのは多分深夜で、発見されたのは朝のことだった。

「顔は半分潰れて、前足と後ろ足が一本ずつちぎれていました。もともと見てくれのよい猫ではなかったのですが、そうなると血みどろの肉塊としか映りませんでした。通行人は誰も近寄ろうとしませんでしたし、師匠に至ってはこんなところで撥ねられるな馬鹿、野良なら野良らしくせめて死ぬときぐらい人間様の迷惑を考えると思

いつく限りの罵倒を繰り返して、周りの眉をひそめさせていました。

「は? 何よ、それ―っ」

少女の気配が、怒りを混じらせる。

ロンドンに慣れてない自分にとっては、そうした通行人の反応が どれぐらい妥当なのかも分からなかった。師匠がろくでもないのは 予想がついたが、ろくでもなさの程度についてはまったく見当がつ かない。

「ただ、師匠はその猫を拾い上げた後、ずっと抱いていました」

Г......

「痛み止めの薬草だけ口に含ませて、書斎についてからも、多分半日近くは抱いていたと思います。普段は服の汚れとか気にする方で、ちょっとスープが跳ねただけでも機嫌が悪いのに、このときだけは血みどろのまま、猫が完全に息を引き取った後、土に埋めてしまうまで放置していました。いつもの葉巻にも火をつけず、泥まみれの手でずっと面白くなさそうに墓を見つめてました」

「.....やっぱり、いい話じゃない」

可か憐れんな唇を尖とがらせて、ぼそりと言ったのが聞こえてしまったが、流しておく。

実際、自分はいい話だとは思ってないのだ。長らく死と付き合いすぎた自分にとって、師匠の行動は感傷的すぎる。土の上を歩いていることと、土の下で眠っていることに、大した違いなどありはしないのに。

違いがあるとしたら、眠ったはずなのに歩いているものだけだ。

そう。

分からない、と師匠に言ったのだ。

「そう言うと、師匠は分からなくていい、と答えました」

「分からなくていい?」

「ええ」

小さく、うなずく。

「いわく―こんなのは気の迷いなんだ、と。魔道へ邁進するつもりなら、こんなことにとられている時間はない。生徒の誰に訊きかれたってそう答えるだろう。だいたい私が優秀な魔術師だったら、この程度の怪け我がはあっさり治すことだってできたはずだ。いつだって間に合わなくて、必要な力もないのが私なんだろう」

諦めているようで、どこかそれは違っていた。

受け容れているようで、やはりそれも異なっていた。

師匠という人格がどうやって構築されたのか、自分には分からない。 諦念と受容との間の何かこそが、師匠の核になっていることは間違いないけれど、その正体はどうしてもはかりしれなかった。

魔術師として、それは確かに最悪なのかもしれないけれど。

人外として、それは確かに論外なのかもしれないけれど。

「だいたい、何かを救って得られる満足感など、脳の誤認でしかない。誰かを助けても自分が救われるわけじゃないし、自分が助けたと思っても本当に相手が救われたかどうかなんてしれたものじゃない。誤解で勘違いですれ違いで思い違いで、ひたすら滑稽なだけの繰り返しが、私たちが生きている世界だよ」

誤認だと、当時の師匠は言い切った。

自己満足ですらない─人体の欠陥なのだと。

「それでも、私たちはその誤認の世界で生きている」

目の前の少女が、ぴくりと眉を動かした。

宝石のような琥珀色の瞳には、自分の姿が映り込んでいる。

自分の瞳にも、彼女の美しい姿が映り込んでいることだろう。

だけど、きっと鏡でそれぞれが認識している姿とは、やっぱり 違っているはずだ。脳の規格が完全に同一でない以上、入力される 情報が等しくても、出力される認識は一致しない。同じものを見ていても、同じ色を見ていても、同じ話をしていても、同じように感じているとは限らない。

世の中のことはすべてそうだ。

魔術に限らない。人かい外ぶつに限らない。常識あたりまえの世界ですら、皆が知っていること。

誤解と、誤認と、すれ違いと、思い違いでつながっているのだと─。

「誤認こそが我々だ。誤解こそが我々の世界だ。私たちが触れられるのは多種多様な事実であって、たったひとつの真実じゃない。どれだけの賢者がどれだけの歳月を捧げても、そこに辿たどり着いたりはしない。いや、本来の魔術師とはそれを拒絶し続ける生物なのかもしれないが」

自嘲めいて、当時の師匠は唇をつりあげていた。

魔術師が追い求めるらしい『根源の渦』とかいう目標と、その言葉が反していることにようやく気づいたのかもしれない。

同時に……ここまで師匠の言葉を鸚おう鵡む返がえしにして、 やっと自分はこの言葉を想起したきっかけを悟った。

「それを忘れて、無闇に真実だけを求めようとするならば──レディ、それこそ本当に最悪なのだと覚えておきたまえ」

彼の言いぐさが正しいのかどうかは、分からない。それを判断するには、自分は師匠に近すぎるし、日常とも魔術師とも遠すぎる。

ただ、それはきっとあの城でもそうだった。

誤認と誤解。

すれちがいと思い違い。

そんな滑稽な繰り返しが、自分たちをあの城につなぎとめてい た。

ずっとずっと昔から、あるべくしてあるように、自分たちをひと

つのカタチへと押し込めていた。存在しない『服』に自らを合わせるかのような、馬鹿馬鹿しい寓ぐう話わのごとき在り方を誰もが強 制されていた。

一だから。

せめて、物語ろう。

たとえばそうだ。ロンドンはベーカー街に住んでいた探偵の事件 簿のように。

自分は医師でもないし、小説家でもないのだから、そんなうまく はいかないだろうけれど。

それでも、それだけがあの城で起きた出来事に対する、唯一の抵抗なのだから。



秋の朝早く、師匠に呼ばれた。

ロンドンに来ておよそ二ヶ月だったが、呼び出されるのは初めてだったので、少し驚いた後、管理人のクリシュナに告げて寮を後にする。世話好きのクリシュナはついてきたそうだったけど、さすがに申し訳ないので辞退した。

敷地を出ると、途端に目眩めまいがする。

石畳を歩む人々の、群れ。

あるいは脂っこいフィッシュ&チップスの匂いだったり、はたまた名物の二階建てバスが吐き出す排気煙だったり。めいめいに歩いていくトレンチコート姿の紳士やマフラーだかショールだかを巻いた女性、騒々しく喋しゃべりながらバスに乗り込む子供たち.....。

人が、多すぎる。

ロンドンの人口は約八百万人ということだが、そもそも百人以上の数を自分は理解できない。想像を絶した数はただひたすらに重いだけだ。……あえていえば、墓地に似ている。ずっとずっと昔から積み重なった死者の列だけが、かろうじて自分の中でこの街と比するだけの重みを持っていた。

(……いや)

と、思い直す。

この都市自体が、墓地に似ているのではないか。死を思わせるというのではなく、多くの人々が群れ集い茶色や灰色の建物に入って一日の大部分を捧げていく光景は、まるで星の終着点のようだ。地獄や煉獄の情報が神学によって整備されてしまうまでの、古い陰よ府みの世界はこうだったんじゃないかと、なんとなく思いを巡らせてしまう。

一ああ、もちろん。

こんなのは、田舎者の感傷だ。

ちょっと人が多い場所なら、きっと当たり前の風景なのだろう。 理屈で分かってはいても、悲しいかな、十数年も暮らしてきた田舎 での生じょう活しきが自分の思考を縛りつけている。肉体と精神は 不可分で、いまでも時間があけば小屋の鶏や教会の掃除が気になっ て、そわそわしてしまうのだ。師匠の来訪がなければ、あの土地で 死ぬまで過ごしていたことだろう。それが幸せだったかどうかは、 また別の話だ。

つらつらと考えながら、それでも足は動いていく。

テムズ川を見渡しながら、ロンドン橋へと踏みいった。

エリザベス二世がつくりあげた現代のロンドン橋を南に渡ると、街の雰囲気は大きく変わる。観光客らしき姿はほとんど見なくなり、代わりにさまざまな人種がいりまじった下町風の雰囲気が──といえば聞こえはいいが、一言にすれば治安が悪くなる。かつては盗品を売りさばいたともいうバーモンジーマーケットの逸話なんかが有名だろう。

しかし、それも一時のことだ。

汚れた煉瓦を積み上げた高架下から、ドルイド・ストリートへと 入り、とある横道にふいと逸それた途端、ぱたりと人の気配が絶え てしまう。

結界、と師匠は言っていた。

といっても、寮のように超自然的な力が働いているわけではない。

師匠の言葉によれば、結界に魔術は不要らしい。異能の介在とは 関係なく、自然とそうなってしまう場所こそが最上の結界なのだと か。まあ結界はブッディズムの用語なのだがとか、そもそも人を遠 ざけるという概念は魔術よりも日常の脳機能に分類すべき事柄だと か、さまざまに脱線しつつ続いていたが、そのあたりはよく覚えて ない。

(.....本当は、覚えなきゃいけないんだろうけど)

残念ながら、自分はあまり頭が良くないのだ。

これも、この二ヶ月ほどで痛感したことだった。師匠の推薦もあって、時計塔と呼ばれる学院に入学したはいいが、その授業の大半を自分は理解していない。その筋では随一とされる場所らしく、見るものが見れば、自分は黄金に埋もれたままぽかんと口を開いているような間抜けなのだろう。

悔しいので、もう一言だけ加えると、そもそも師匠は腕が悪い。

まともに魔術を使えばそれこそ下の下の仕事になりかねないので、こういう場所を選んだのではないかと、ひそかに自分は邪推している。

そこまで考えたところで、赤茶けた建物が目に入った。

秋の朝、師匠の住むアパートが、今日も不機嫌そうに佇たたずんでいた。

*

イギリスでは、集合住宅はフラットと呼ぶのがほとんどだ。

では自分がアパートというのがなぜかというと師匠の口癖が移ったためで、師匠がどこでそういう口癖になったかは分からない。

ともあれ、師匠が住んでいるアパートは、いつもながらに凄まじかった。

幾重にも絡みついた蔦つたや突き出た雑草はまだ微ほほ笑えましい。赤茶けた煉瓦壁や煙突などあちこちひびがはいっていて、風が吹くたびにぱらぱらと破片をこぼすほどだ。ヨーロッパには古い住居が多いが、これは格別だった。少なく見積もっても百年は超えるだろう。

それこそ産業革命を経てきたと言っても信じられるというか、 ちょっと小突いただけで連鎖的に倒壊してしまうのではないかと、 そんな想像を禁じ得ない。 自分がきっかけとなってしまわぬよう祈りつつ、おっかなびっくり玄関の扉を開く。

びくん、と肩が上下した。

比較的広いロビーにまで怒鳴り声がこだまして、こちらの顔を叩 たたいたからだった。

「ふざけるな!」

びりびりと、ロビーに響きわたる声だった。

吹き抜けになったロビーは中央に螺ら旋せん階段が配されており、一階、二階、三階のそれぞれの扉の向こうが貸部屋となっている寸法だ。

今の怒声は住人たちにも届いているはずなのだが、誰ひとり反応した様子はない。防音ができているとは思えないので、もうみんな慣れきっているということだろうか。ロビーの隣には管理人用のスペースがあって、小窓から老婆の姿も見えるのだが、はたしてロッキングチェアに座ったままうつらうつらと舟をこいでいるのであった。

「.....にあ」

老婆の膝に座った猫が、小さく鳴き声をあげたきり、再び瞼まぶたを閉じて眠りにつく。

自分もそうしたい、と切実に思った。

が、師匠の命とあっては帰ってしまうわけにもいかず、二階へと 踏み出す。

階段をのぼると、ますますはっきりと話し声が聞こえた。

「お前もあの城が厄介なことは分かってるだろうが! しかも遺言だと! どうして、そんな案件に手をあげた!」

苛立った声は、露骨な棘とげを生やしていた。

ますます会いたくない。師匠のグチを考えれば、たった今回れ右 して逃げ出したい。 しかし、

「これでも真剣に考えた結果なのだよ」

と、相手は応じた。

まだ年若い、女性の声だった。

穏やかだが、からかっている風なのは否めない。弾んだ声音を隠しきれてないというか、そもそも隠すつもりがあるのかどうか。

「真剣に考えて、どうしてこんな結論になるんだ」

「それはもちろん、兄上の希望に応じたからさ」

「私の希望だと」

怪け訝げんそうな師匠の声に、にやりと笑う気配があった。

もしも扉がなかったなら、かかった、と会心の笑みが見られたに 違いない。

「たとえばだよ。この案件がうまく片付いたなら、君が『どうしても極東へ行きたい』とか言っていたのにも間に合うんじゃないかな? 例の戦争とやら、もう時計塔は人員の選抜にはいってるんだろう? 君が名乗りをあげて割り込むためには、残された時間はわずかだと思うんだが」

鮮やかなカウンターが決まったらしく、対する男の返事は唸り声へと変じた。

ぎりぎりと歯ぎしりを鳴らし、呪いのごとく漏らす。

「お前は悪魔か」

「君の愛しい愛しい義妹いもうとだとも」

語り部べの得意顔が見えるようだった。

うなずく気配とともに、今度は懐柔するように少しトーンを落と して、こう囁ささやいたのである。

「なあ、我が兄よ。これでも私は気を遣ってるつもりなのだよ」

「どのあたりがだ」

「たとえば、君が我が屋敷ではなく、わざわざアパートに住みたいとかいうのを認めたりさ。だいたい、ここはエルメロイ家の所有するアパートなんだから、わざわざ家賃を払って住むなんて無駄にもほどがあるだろう」

「逆だ。私の家賃がそのままエルメロイの借金返済に使えるんだから、これ以上効率的なことはない」

即答した師匠へ、相手の声音が苦笑を交じらせる。

「ふむ。その考え方は美しいが、砂漠から毎月一握りの砂を持ち去って砂漠を消し去ろうというぐらいには無為じゃないか?」

「気分の問題だ。とにかくエルメロイの資産に頼るつもりはない」

「資産に頼るつもりはないが、借金だけは返すというのも、ずいぶんひねくれた思考のように思えるがね」

まぜっかえしつつも、扉越しに伝わる気配はどこか楽しそうだった。

お気に入りの猫が毛を逆立てて睨にらんでくるのを、大喜びで観察している意地の悪い飼い主を思わせた。人間の上下関係とは年の差ではなく、生まれ持った何かで決まるのだと納得せざるを得ない。

はたして、しばらく唸り声は続いたが、

「条件がある」

と、師匠は切り出したのだ。

「ほう」

「この件は、ひとまず私だけで預かる。……レディ、君の介入は認めない」

頑とした声音には、これ以上はけして折れないという決意表明が こもっていた。 「ここが落としどころか」

苦笑交じりに、相手が喉を鳴らす。

長居するにはちょっとつつきすぎたかな、とでも言うように、 あっさりとその気配が立ち上がった。

「了解了解。では我が兄よ。後はよろしく」

「.....わ」

つい聞き耳をたててしまっていた自分は、あわててその場を取り 繕うべく、せめて扉から身を離した。本当なら物陰にでも隠れてし まいたいところだが、まっすぐ向かってくる気配はそれを許すほど 悠長ではなかった。

数秒で、扉から鮮やかな金髪が広がった。

続いて、磁器人形ビスクドールを思わせる白い肌が現れ、優美そのものの仕草でスカートをさばいた。しかし、何よりも印象的なのは、あまりにも強い意志のこもった焰ほむら色の瞳だ。自分とさして変わらない―まだ十五ほどの年齢と見えるのに、どのような人生を送れば、このような瞳になるのだろう。

ライネス・エルメロイ・アーチゾルテ。

師匠の義妹にして、師匠を君主ロードという立場に封じた女性だった。

後ろには少し変わった姿のメイドがついている。

変わったというのは、肌の色だ。白人でも黒人でも黄色人種でもなく、まず人間にはあるまじき色──銀色に輝いたのである。トリムマウという名前をつけられたその水銀メイドは、この業界でも屈指の自動人形オートマタであるらしい。なんでも、人体模造の魔術概念はすでに衰退しているがこの自動人形オートマタは本質をそこに持たないことで回避している、とか聞かされたのだけど、これも自分の脳味噌ではあまりよく理解できてない。

ちら、とライネスがこちらに視線を送った。

「ほう。君も来てたんだ?」

「.....はい」

どう返事したものか困って視線を落とすと、少女はくす、と可憐な唇に笑みを湛たたえた。

桃色の花弁が、露を含んだようでもあった。

悪戯いたずらっぽい笑みのままに、金髪の少女は再度口を開く。

「どうかな、弟子生活は。陰険師匠にいびられてないか?」

「……その、田舎での生活に比べたら、ずっと楽です」

おどおどと言った自分を覗のぞき込むようにして、少女は何度か うなずいてみせた。

「ほうほう、それはよかった。いや我が兄ときたら徒弟はそれなり にいる癖に、家事の面倒を見させるような内弟子を迎え入れるのは ほとんどなくてね。ある意味で君が最終防衛ラインなんだよ。う ん、責任は重大だよ?」

「……努力、します」

何を言ったらいいか分からなくて、とりあえず神妙に視線を落とす。

すると、ライネスはすっと白い指を伸ばした。

「そのフードを外せばもっと可か愛わいいのに」

ちょん、とこちらのフード付きマントに触れ、颯さっ爽そうと螺 旋階段を下りていった。

本当に、格好いい人だと思う。血はつながってなくても兄妹きょうだいなのだから、師匠にもああいう部分が少しぐらい受け継がれていたらいいのに、と思わざるを得ない。

しかし、現実は非情である。

ため息を心の中だけでついて、自分も決心した。

「……失礼します」

扉を開く。

途端、むわっと埃ほこりが舞って、咳せき込んでしまった。

内装は安アパートそのもので、それなりの広さこそあるものの、 その面積を台無しにするレベルの散らかり放題である。品々もおよ そ統一性がなく、大量の書籍や年代物らしき机から黴かびたパンの 欠片かけら、なぜか使い込まれた感じの家庭用ゲーム機複数台ま で、所狭しと置かれている。

聞けばそれなりに貴重な物品もあるらしいのだが、ここの主には 頓着する様子もない。もっとも、たまに「あれが見つからないこれ が見つからない」と騒いでいるあたりからすれば、頓着しないので はなく片付けられないだけかもしれない。

以前、自分が片付けようかと申し出たこともあったが、それは即座に却下された。

ひとりの休日を邪魔してほしくないということだったが、師匠がこの部屋でどんな休日を過ごしているのか、実のところよく分かってない。

床のパンやら本やらを踏まないよう慎重に──ライネスとあの水銀メイドはどうやってこの部屋を渡っていったのだろうとちょっとだけ考えながら──奥のテーブルへと歩いていく。

師匠は、その近くのソファに倒れていた。

「あの、師匠」

返事はない。

ソファにぐでんと横たわって、とにかく現実はすべて拒絶するとでも言うように瞼を閉じていた。矜きょう恃じさえ許すなら、両手で耳を塞いであーあーあーあーとがなりたてているに違いない。我が師匠ながら、なんと器の小さいことだろう。

「弟子の、グレイですが」

念のためもう一度声をかけたが、やっぱり返事がない。

諦めて、自分はテーブルへと目を落とした。何もかもがひっくり

かえっている部屋の中で、そこだけが一応片付けられており、すっかりぬるくなってしまった紅茶のカップのほか、何枚かの写真と書類が置かれていた。読もうとしたわけではないのだが、そのうちの一枚に視線が引きつけられてしまう。

あまりにも、奇怪だったからだ。

どうやらもとは宗教画の一部らしい。

神聖さと厳かさに満たされた天空の景色なのに、その写真で焦点を合わされていたのは、いかにも不釣り合いな──燃えさかる車輪だったのだ。まるで天空の門番であるかのように、その車輪は堂々と空中に浮遊しており、しかも外側には無数の眼球がへばりつき、こちらをじろりと睨ねめつけていたのである。

「……車輪の怪物……?」

「......詩的にしろとは言わないが、もう少しマシな形容はないのかね」

首を傾げた自分に、ひどく疲れた感じの声がかかった。

「あ、師匠」

なんとも面倒臭そうに、師匠はがりがりと頭を搔かいて上半身を 持ち上げていた。

外見は、おおよそ三十かそこら。この生活に長髪はいかにも見苦しくなりそうなのだが、師匠の場合は意外と清潔感を保っている。 身だしなみにも不思議な品があって、偏屈さが卑しさとはなっていないあたり、もとはそれなりのおぼっちゃん育ちだったのかもしれない。それか、家族に大切に育ててもらったかだ。

「仮にも魔術師の弟子なら、それを安直に怪物とか言わないでほしい。 い。典型的な天使のひとつだよ」

もう一度言って、とんとんと師匠は写真の隅をつついた。

「天使って……でも、これのどこがです?」

「人間の姿で翼が生えてってイメージが絵画として定着したのは、 四世紀頃、ギリシャ神話における勝利の女神二ケから大きく影響を 受けたものだがね。天使には別の系統もある。この場合、後から天 使として解釈されたものというべきか」

顎を撫なでながら、ぶつぶつと師匠が言葉を紡ぐ。

「もとは神話上の生き物だったものが天使として再解釈されたパターン。はたまた主の権能だったものが天使として独立したパターン。いくつも仮説はあるが、君が見ている座天使スローンは前者に近いかな。主の御力をその身に受けて運ぶという天使だ」

「運ぶから、車輪なんですか?」

「というより、車輪だったから主の力を運ぶと解釈されたんだ。聖書を読んでみるといい。エゼキエルという預言者の幻視では『緑柱石のように輝いていて車輪の一面に目がつけられている』って記述でね。変わったところでは、実は未確認飛行物体UFOだったんではないか、なんて説もあるぞ」

「天使が、UFO?」

突拍子もない話題の転換に、思わず瞬まばたきしてしまう。

すると、師匠がにまにまと笑っているのにかちあってしまった。 あっさり機嫌を回復させたのは、どうも興味の範はん疇ちゅうに ヒットしてしまったらしい。

「二十世紀にはなんでもUFOに結びつけようとする一派があってね。キリストの洗礼でもエジプトの壁画でも、片端からUFOが発見されたものさ。さしたる意味があるわけでもないが、空飛ぶ車輪ってのはいろいろロマンや想像力をかきたてられるんだろう。もっとも、彼らの一部はヒッピーたちと一緒に幻覚性の麻薬をやって、実際に精神こころを飛ばしていたわけだが。……どうしてうんざりした顔をしてる?」

「いえ、師匠と同じような方が、世界にたくさんいらっしゃるのだなと思って」

「一緒にするな。時に強引な推理は必要だが、主観だけのつぎはぎで魔術が紡げるか。だいたい、この程度は魔術師どうこうじゃなくて、一般教養の問題だ」

さっきは仮にも魔術師の弟子なら、とか言ってたくせにあっさり

と前言を撤回して、鼻を鳴らす師匠であった。

どこか得意げな顔には、意地悪さと子供っぽさが肘をつっつきあいながら同居している。

その名は、エルメロイII世。

時計塔にもわずか十二家しかいないという、君主ロードの階級を 叙された名門・エルメロイ家の当主であった。 今更だが、師匠は魔術師である。

魔術とは、世界の基盤に訴えかけ、小才源ドだか大マ源ナだかを 原動力としてこの世界でありえる限りの事象を起こす秘儀……らし い。小才源ドとは個人の生命力で、大マ源ナとは世界に満ちた魔力 のことだとか言われたが、このあたりもきちんと実感できたことは ない。

分かっているのは、彼らのほとんどが世界から背を向けるようにして、ひたすら自分たちの実験に閉じこもっているという事実だけだ。魔術にとっては隠されていることそのものが重要なのだとも聞いているが、実際のところ、みんな引きこもっているのが大好きなのではないかと、自分はひそかに疑っている。

で、

「……天使の話は分かりました」

ついつい表情に感情が滲にじんでしまうのを堪こらえながら、とりあえず頭を下げた。

これでも師匠である。

ひょっとすると現代社会では違うのかもしれないが、自分の故郷では目上の者には敬意を払うという理念がいまだに浸透したままだ。いけすかない師匠であったとしても、きちんとした態度を取らなければならない。

「......そういえば、ライネスさんの屋敷に住むつもりはないんです?」

「あんな悪魔と一緒に住めるか。三日で私の胃が壊れる。いや壊れ た」

ソファにもたれかかったまま腹部をさすり、渋い顔の師匠であっ

たが、少ししてなんともしんどそうにため息をついた。

「とはいえ引き受けると言ったからには、最低限の措置はとらないとな」

「.....はあ」

こちらとしては、ライネスと師匠がどのような話をしていたかは 知らないので、適当な相づちを打つしかない。

ふむ、と片目を閉じて呟つぶやいた後、何か気がついたように師 匠が視線をあげた。

「そういえば、君は天使をどう思う?」

「……また天使の話ですか?」

正直、嫌気がさしていたのは顔に出ていたと思う。

魔術に限らず、そもそも自分は長い話が得意ではないのだ。真実なんてたいした数はないのに、生きている人間はあまりに喋りすぎると思う。都会の人間はなおさらだ。

「……ええと、主の恵みを人間に届けるための御つかい、ですか? 昔、地元の教会でよく神父様が仰おっしゃってました」

「いや、そういう一般的な話ではなく、魔術的な意見を問うている のだが」

「イッヒヒヒ。そんなこと言ったって、こいつに分かるわけないだろ?! 頭悪いんだからさ!」

突然、陽気な声が湧いた。

無論、この場には自分と師匠のふたりしかいない。

だから、これは姿なき三人目の声だ。自分も師匠もその正体は分かっているので、今更不思議がることもない。ついでに言えば相手をしても無駄だと分かっているので、なるべくスマートに無視しつ

つ、ぼそぼそと釈明する。

「.....拙せつが頭悪いのは、嘘うそじゃないですけど」

「そういう問題ではない。私の弟子である以上、たとえ身内である うが目の前で侮辱することは許さん。重々覚えておいてもらおう」

ぴしゃり、と言ってのける。

これまでと打って変わった語調のせいか、第三の声もそれきり沈 黙した。

そのまま、師匠はテーブルに手を伸ばす。金属のシガーケースから葉巻を取り出し、ナイフで吸い口を切り落とした。マッチで炙あぶるようにして火をつけて、ことのほかゆっくりと吸い込む。

そのまま、膝の上で指を組み合わせ、

「では、改めて講義しよう」

と、ゆるやかに話し始めたのである。

「まず、君が言ったような、主の恵みを届ける御つかいとしての天使。それも間違えてない。というより、魔術師として扱う場合の天使も、おおもとはここから発生している。主の恵みを与うという天使の性能こそが、近世以降──とりわけ近現代の魔術師にとって天使を再発明する際のきっかけになったのだから」

同じような説明ではあっても、今度のそれはするりと頭の中に入ってきた。

違いの理由は、明らかだ。

さきほどまでは個人の趣味としての解説、今は時計塔の講師としての解説だったからだ。だらりとしていた表情さえも打ってかわって、テーブルの向こう側からこちらを鋭く見据えている。

.....そうだ。

師匠の、魔術師としての腕は大したことがない。

これはもう謙遜とか慎みとか過小評価ではなく、本当に毒にも薬

にもならない平凡さなのだ。仮にも時計塔の重鎮でありながら、いまだ第四階位にとどまっているというのはかなり前代未聞とのことで、この二ヶ月の間も何度となく周囲から聞かされた。

それでいて、師匠の評価はけして低くはない。

講師として彼が培ってきた実績には目を見張るものがあるらしく、それこそ内弟子として迎えられた自分が、多くの生徒たちからつっかかられたぐらいだ。あのロード・エルメロイII世に直接教えを受けられるなんて……と、正直羨せん望ぼうの視線が痛かった。

たとえるならば、ボクサーとセコンド。アスリートとコーチの関係。

理想的なフォームを頭に浮かべながら、それを実行する能力スペックのない自らについて、師匠がどう思っているかは分からない。ただ、魔術師としては奇異なその在り方は時計塔において、さまざまなあだ名で表現されているらしかった。

いわく、プロフェッサー・カリスマ。

いわく、マスター・V。

もういくつかのあだ名は──やや不名誉な響きを帯びているので、 ここでは秘しておこう。

ともあれ、自分はさきほどの言葉についての疑問を口にする。

「再発明? 天使がですか?」

「ああ。四大元素については知ってるだろう」

葉巻の煙を味わいつつ、師匠が四本の指を立てた。

地、水、火、風、と言いながらその指を折っていく。四大元素とかいわれるそれらが、魔術の基礎であるぐらいは、自分も知っている。

「古代ギリシャにおける、アルケーより生じる四大」

と、師匠は口にした。

アルケーとは確か、万物のはじまり......というほどの意味だった ろうか。

「錬金術における四大と根本は同じだ。今でも、そうして扱われることがほとんどだろう。黄こう道どう十二星座や東洋の陰いん陽よう五行あたりとも変わらない、世界の万物を区分けしていくための便利なシステムさ。—もっとも時計塔なんかで扱われる属性だと、これに空や架空元素を加えるし、実践的な色合いが強いから、だいぶ話が変わってくるのだけどね」

「ええと、拙せつは地だと言われました」

「ああ。この場合の属性は、おおよそ才能の向き不向きぐらいの話だ。結果として、二重属性や五大元素アベレージ・ワンなんてバケモノもいるわけだが、とりあえず話を元に戻すとしよう。

つまるところ、もとは便利な分類法だった要素エレメントだが、これが十九世紀末あたりから近代魔術の台頭によって変わってくる。天使という概念との融合によって、新たな意味を付与されるんだ」

「新たな意味?」

「そうだ」

ゆっくりと、こちらの理解度を値踏みしながら、師匠が話を続ける。

「多くの人々が信じる、『力の器』だ」

テーブルの上で、神聖な杯さかずきでも支えるかのようにして、 小さくうなずいた。

しん、と沈黙が落ちた。

師匠が丸くこさえた手の平に、葉巻の重い煙がたまっていく。その煙がまるで浄きよめられた水のように思えた。天使と呼ばれているのは、その水か、はたまた手の平のカタチか。

「魔術は秘されねばならないものだが、その一方、概念は多くの 人々の信仰によってその在り方を安定させる。同じオカルト思想に かぶれたボードレールやアルチュール・ランボー、W□B□イエイ ツといった詩人たちの筆もそれに拍車をかけただろう」

アパートの部屋に、師匠の声が重く響く。

今度は、師匠が手でつくった器から、何かの波が広がっていくようだった。

いや、本当にそうなのかもしれない。自分はこの手の現象に鈍感だが、魔術師は目に見えない『力』を操ることこそが本義だったはずだ。今も連鎖する波は、この部屋に置いてある鏡や呪具ではねかえって、こちらを取り囲んでしまう。

今、この部屋こそが神殿に変わったかのごとく―

「神殿のようだ、とでも思ったか?」

「.....つ」

言い当てられて、どきりとした。

「驚くことじゃない。そもそも、そう思わせるように誘導したし、 君の判断は極めて正しい。今、私はこの部屋を神殿に変えてるんだ から」

「え?」

言ってる意味が分からなくて、目をぱちくりさせてしまう。

その表情がおかしかったのか、師匠はくつくつと肩を震わせた。 あまりに愉たのしそうな態度のせいで、罠にはめられた気分にな る。

「ちょっと変わった雰囲気に感じただろう? それが神殿だよ。ラテン語だとtemplumだが、この場合は神様が一時的に存在する場所とだけ考えればいい」

天使なら教会じゃないのか、と言いかけたが、今の説明でなんとなく納得してしまった。

「つまり、それは信者が礼拝する場所としてじゃなくて、神様のいる場所という方が大事だから、神殿なんですか」

「うん、その通りだ。今は杯の象徴性シンボリズムやこの部屋の 品々を使ってそれっぽくしてみたわけだが実際はもっと本格的にや る。聖別された場所で儀式を行うのは、たいていの魔術で共通だろ う。ブッディズムの結界とも似たところのある技法なんだが、この 場合天使とセットというのが肝だ」

Г......

師匠が一拍おいたので、こちらも考え込んでしまう。

神殿というのは、神が一時的に存在するための場所だという。

また、天使は『力の器』だともいう。

つまり、この場合、ふたつの関係は─

「ええと……ひょっとして、曖昧な魔力に天使という名前を与えることで、魔術に利用しているんですか」

「正解」

ソファにうずもれたまま、師匠はさめた紅茶のカップを持ち上げ、唇を湿らせた。

「さきほど、概念は多くの人に信じられることによって安定すると言ったろう。だったら、この世界に広まった天使という概念は、魔術を安定させるのにもってこいなのではないか、と考える者がいてもおかしくあるまい。実際いくつかの魔術結社にとって、これらの考え方は大層魅力的に映ったらしくてね」

カップを下ろしてから、師匠は二本の指を立てた。

十字を切り、我が前にラファエル、我が後ろにガブリエル、など と呟いて空中に五ご芒ぼう星せいを描いていく。

「今のは、小五芒星儀礼なんて言う術式だ。四大天使と地水火風を 照応させて、儀式場の聖別やさまざまな魔術の導入に使う。まあ、 こんなお祈りがそこらで売ってる雑誌にのっかるぐらいでね。──も ちろん、世間で流通しているような術式はほぼすべてダミーだった りデタラメだったり観念上のみの代物だったりだから、時計塔も放 置してるんだが」 したり顔で言って、窓へ視線をやった。

カーテンの隙間から、薄ぼんやりと陽光が射し込んでいる。隙間 というのが、なんとなく自分たちにふさわしかった。世界と自分た ちとの距離。光にあふれた場所と自分たちとの間で、かろうじて許 された交流の隙間。

天使のような、淡い光。

「だけど、概念の変化は魔術に影響を与える」

と、師匠は囁いた。

テーブルに置いたままのカップの中で、紅茶の表面がさざ波をつくった。さきほどの師匠の術式が、少し遅れて現実に影響をもたらしたかのようでもあった。

「もとは、単なる思いつきだったかもしれない。主の名のもとに悪魔を縛るといった術式は、昔からごまんとある。もちろん魔術師なのだから皆が敬けい虔けんなキリスト教信者だったわけじゃない。主の名のもとに万物を支配するという、普遍化した概念を利用しただけだ。現代だとインターネットのプロトコルと―といっても君にはかえって分かりにくいかもしれないが―大して変わらないよ。同じ方法論で、天使を利用するようになるのも必然のなりゆきだったろう。主の名に比べれば、ずっと扱いやすい概念だからね」

それは分かる。

主という概念は、あまりに『色』がついている。信仰と言い換えてもいい。それに対して、もともと堕天使や守護天使などさまざまな派生バリエーションのある天使は、遥かに様々な術式で利用できるのだろう。

だからこそ、再発明と師匠は呼んだのだ。

「いまや、欧米における新しい魔術は、ほぼ必ず天使の影響を受けているといってもいいぐらいだ。いや、新しい魔術に限らない。微細ではあるけれど、天使という概念をどこかに使っている魔術なら、影響は禁じ得ないからだ。現代の魔術師ならば、その影響を利用するにせよ排除するにせよ、何らかのカタチで天使の変化を意識しているだろう」

師匠が瞼を閉じる。

ゆっくりと、ため息のように吐き出した。

「……ある意味で、現代の魔術師とは、天使を蒐しゅう集しゅうする職業だといってもいい」

Г......

その響きは、歌にも似て、感性貧弱な自分にもしみいった。

詩的というか、本質をくりぬいた言葉だったからだと思う。師匠にとってもそれなりの思い入れはあったようで、今度の沈黙は前より長く続いた。

「で、問題はこの城だ」

と、師匠が指を動かした。

テーブルの上の、封筒からこぼれた写真の一枚だった。僻へき地ちの山奥と思おぼしい場所に、ねじくれた尖せん塔とうと歪ゆがんだ城壁を持つ、灰色の城が佇んでいたのである。

「あı

そうだ。

もともとは、ライネスが持ってきた依頼の話だったのだ。講義に気を取られていて、すっかり忘れてしまっていた。かあっと顔が熱くなるのをごまかすようにしながら、自分はぐっとうつむいて口にする。

「えと、その城が何か?」

「先も言ったが、今言ったような事柄は、魔術の中でも表向き──つまりはそこそこ一般に膾かい炙しゃした事柄だ。本来、我々の扱う魔術はその先にある。天使の変化がこちらに影響を与えるのは間違いじゃないが、それは枝葉末節の事柄であって本質じゃない。神秘主義やオカルティズムは我々の領域とかぶってはいるが、けしてイコールではないのと同じだ」

師匠の表情は、なんとも沈鬱だった。

義妹ライネスからは、いつも不条理な依頼ばかり押しつけられている、というのが本人の弁だ。なのに断れないのは膨大な借金がどうのこうのと言っていたが、詳しいところは知らされていない。唯一分かっているのは、だから師匠がロード・エルメロイII世をさせられている、ということだけだ。

苦々しい口調で、師匠が言う。

「だが、君主ロードに手が届きかけたほどの魔術師にも、この思想 に心を奪われた者がいてね。こともあろうに、その思想から自らの 領地の城をつくりかえるほどの傾倒ぶりだった」

もう一度、城の写真を見下ろす。

よくよく観察すれば、それはずいぶんと変わった形をしていた。

撮影時の天候によるものかもしれないが、陽光を斜めから浴びた城は、翼を広げるような奇怪な影をつくりあげていたのである。ちょうど、首と腕を失った翼神──師匠が最初に話していたサモトラケの二ケを彷ほう彿ふつとさせるデザイン。ただの偶然にしては、これまでの話と一致しすぎていることが、背筋をぞくりと冷えさせた。

まるで、城自体がひとつの生き物のようにさえ見える。

そう。

この城こそが、天使であるかのような―

「一剝離城アドラ」

と、師匠が告げた。

「かつての主はそう呼んでいたらしい。この主が、エルメロイの先代といささかの交流を持っていたらしくてね。まったく、先代が今の私を見ればさぞ大喜びするだろう。人のものを持ち出した結果がこれだと、ねちねち数時間は虐いじめてくれそうだ」

エルメロイの先代。

これもたまに話に出るが、どんな人物だったのかはほとんど謎の ままだ。師匠など比較にならない天才だった、とだけ聞かされてい る。話の切れ端だけを集めると、苦労性であったような気はするの だが真実かどうかは分からない。

それと、もうひとつ。

後から気づいたことだが、おそらく早朝の時点で、師匠はライネスの申し出を受けるつもりだったのだろう。先に根回しされていたのか、情報を集めていたのかは不明だが、おそらくここまでの展開は折り込み済みというか諦め済みで、さぞや胃を痛めていたに違いない。

なぜならば、しばらく思い悩んだ後、

「……そのなんだ。すまないレディ。明日には出かけるんだが、君もついてきてもらえないだろうか」

師匠──ロード・エルメロイII世は、なんとも苦々しい顔で、拙せつに切り出したのであった。

英国は植生に乏しい、などとよく言われる。

もともと北部が氷に覆われていた上、産業革命期の伐採によって 多数の森林が消滅したためである。かてて加えて、最も高いベン・ ネビス山でさえわずか一三四四メートルという有様なので、環境の 多様化という言葉がほど遠いことは知れるだろう。

といっても。

自分ひとりが見る分には、十分世界は広く、さまざまな生命に満ちている。

登山口あたりでワラビの藪やぶを越えると、ナナカマドと楢オークの入り交じった複層林となり、ほんのり足に疲れを覚えるぐらいの坂道がだらだらと続いていた。

もっとも疲れの方は、ここまで十四時間の間何度も乗り換えながら列車に揺られ、宿に泊まった後はバスに三時間、さらに徒歩でもう五時間ほど歩いているのも大きかったろう。

つまるところが、人里離れた山地であった。

九月半ばの風は涼やかで、さまざまな臭いが登山路に入り交じっ ている。

ブーツで踏みつけるたび掘り起こされる、湿った土の臭い。遠慮深げなハーブの香りは野生のヘザーだろう。蒸れた緑に濃密な樹液、うぞうぞと集まる虫の臭い、はたまた腐った朽ち木や小動物の糞ふんが放つそれも、自分にとっては馴染み深いものだった。

─生きているのだから、まるで汚いとは思えない。

この場合、死んでいるのだから綺麗だとは思えない、というのもセットだろうか。

自分がロンドンに対して抱いている思いが、どうしても脳裏をよぎってしまう。故郷の数万倍も人がいるのに、そのほとんどが『死』に奉仕しているのではないかと思える場所。あれほどに清潔で整った街なのに、何度鳥肌を立ててしまったことか。きっと二ヶ月の滞在が二十年になったところで、自分はあの土地を受け容れられないし、あの土地は自分を受け容れてくれない。

今だって、思い返しただけでこんなにも恐ろしくて──

「.....ま、待て.....!」

r——э! 」

肩に触れた手の、ゾンビさながらの震え方に、思わず身をすくめてしまう。メデューサの瞳にでも魅入られてしまったかのように、がちがちと強こわばった身体からだでかろうじて背後を振り向く。

「っ、師匠……!」

無論、背後から伸びてきたその手は、汗みずくになって青息吐息な状態の師匠のものであった。

「......も、もう少し、ペースを落としてくれないかレディ」

喘ぜん鳴めい交じりで頼み込んでくる。

幸いというか何というか、こちらの変化に気づいた様子は皆無であった。もっともそんな余裕があれば、こんな無様をさらすこともなかったろうけど。

自分も硬直したままの頰をこっそり指で揉もんで、何食わぬ顔で切り返した。

「しかし師匠、このままでは招待状の時間に遅れそうですが」

「……なら十分、いや五分でいい。座らせてくれ」

ひいひいと喉からひきつった音をたてつつ、五本の指を立てる。

「.....三分で」

と、妥協案を示して、自分は近くの楢に背中をもたせかけた。

淡く火ほ照てった身体に、楢の木のひんやりとした樹皮が心地よかった。本当は樹より石の方が、石よりも土の方が好みなのだけど、このあたりはあまり理解されない。瞼を閉じて眠ってしまえば、なにもかも夢になるかもしれない。

だが、目覚めてあの故郷に戻ったところで、それが何になるだろう。

ちり、と右手が痛んだ。

「いひひひひひひひ! いくら魔術師だからって身体が弱くていいってことはないんじゃねえの! どこぞの大成した魔術師なんざ、詩人でボクサーで登山家で K 2 も無酸素踏破したって聞くぜ!」

また、師匠でも自分でもない──姿なき三人目の声がした。

厳密に言えば自分の右手あたりでした声なのだが、師匠は早速地面にへたばって「私は都会育ちなんだ」とあまり言い訳になってない主張をするばかりだ。

この三人目は基本的に毒舌と罵倒しか吐かない。

自分が物心ついた頃から一緒にいる相手ではあるが、この性質の 悪さには一向に改善が見られなかった。もっとも、これと話す相手 自体、十数年で自分を含めて五人といなかったわけだけど。

(.....拙も、たいして変わらないか)

ぼんやり、思う。

つい二ヶ月前まで、自分がまともに話した相手の数など、これの 倍にもならなかった。めまぐるしいまでに環境は変化したが、これ は何ひとつ変わらず、自分はただ取り残されている。故郷を出ると きの決意はどこへやらで、こんな半端な自分よりは、これの方がよ ほどマシというものだろう。

自分だけが、ふわふわと海月くらげみたいに揺らめいている。

悪態をつきながら足を揉んでいる師匠も、右手のこれも、少なくとも自分の在り方だけはハッキリさせているというのに。

どうして、こんなに無様なんだろう。

「……どうして、こんなに馬鹿なんだろう」

呪いのように、囁いた。

それから、何度も師匠の休憩と文句とを挟みつつ、ようやっと開けた場所まで着いたときだった。

「おいおい、なんだありゃ」

と、右手の声が呆あきれた呻うめきをあげた。

自分の眉もまた、かすかに寄った。

岩である。

大の男が三人がかりで手をつないでやっと抱えられるかどうかという、ごつごつした巨大な岩だった。

その岩に、とある人影が寝そべっていたのである。なかなか器用なもので、亀の甲羅みたいに起伏のついた上面で半睡したままバランスを取りつつ、ごろごろと転がっている。

今にも落ちそうに見えて、なかなかそうならない。

子供の頃に眺めていた水飲み鳥みたいに、止まりそうで止まらない。岩の縁でぐらぐらと逞たくましい身体が揺れて、ほんの一押しすれば墜落してしまいそうなそんな瀬戸際で──不意に、その顔が持ち上がってこちらを見やったのだ。

「──お、やっと来たか!」

悠然とあぐらを搔いて起きあがり、手まで振ってきた。

汚れた分厚い手だった。何ヶ月も手入れしてないと思しい、伸び 放題の髭ひげ面づらでもあった。垢あかと埃で肌が黒ずんでおり、 人種をはかりかねるほどだ。 遊牧民か何かを思わせるゆったりした衣服なのだが、それでも隠しきれないほどの筋肉質な身体つきだった。腕も足も、首も驚くほどに太く、鍛え込んだ形跡があった。身長は師匠よりも幾分か上といった程度だが、体重は倍近くにもなるのではないか。

「へえ、変わった組み合わせだな。兄ちゃんの方はいかにもなのに、こっちの娘さんはそれっぽい匂いがしない。おっと、ひょっとして誘拐してる最中じゃないよな?」

ハハハと笑うと、思いがけないほど白い歯が覗く。

綺麗な目をしていた。

黒い目だ。

ただし、内側には剣けん吞のんさも秘めている。

子供のようなあどけなさと、老人のような狡こう猾かつさをあわせもった瞳だった。

「……あ、あの」

「......君は誰だ?」

自分の代わりに、疲れ果てた師匠が口を開いた。

あまりに疲れていて、本当は口をきくのも面倒くさいという感じでもあった。

「フリュー」

と、男は言った。

「俺の名前だよ」

「……ごついわりに、可愛い名前だな」

「いや、実はフリューガーつうんだが、あまり気に入ってねえんだよ。フリューで止めておけば、ほら、そよ風みたいな心地よい名前だろうが」

そんなことを、つらつらと言ってのけた。

この男に似合いそうなのは、むしろ砂漠でぎらぎら光る太陽とか レスリング大会のスポットライトの類だが、不思議と爽やかさだけ は言う通りなあたりが、師匠にはむかつくようである。

ぱちぱちと、自分も瞬きしていた。

かつての事件でも、あまり見かけないタイプだったからだ。

(──ひひ、お前の師匠が瘦せぎす狐なら、こっちは寝ぼけた駱らく 駝だってところだな)

右手のあたりから、また声がした。

今度は、自分にだけ聞こえるぐらいの囁き声だった。

 $\lceil h h h h \rceil$

男─フリューが、こちらへ視線をよこす。

今のが聞こえたとは思えない。しかし、じろじろと楽しげに上から下までを睨めつけてくる。不ぶ躾しつけではあってもけして野卑ではない視線がまるで自分の内側までを見透かすかのようで、戸惑っているうちに男は一本の指を立てた。

「なんで、あんた、そんな灰色のフード被ってるんだ? 結構な別べっ嬪ぴんさんだし、隠れてるところに傷があるってわけでもなさそうだが」

「それ、は……」

「人の弟子を、あまり脅かさないでもらえるかな」

口ごもった自分と男の間に、師匠が割って入った。

「ああ、やっぱり弟子と先生でいいのか。あんたがさ、あんまりに 先生って顔をしてるもんだから、かえって悩んじまったよ.....」

「どんな顔だ」

「神経質そうで、そのくせ妙に面倒見の良さそうなあたりか? 昔のモノクロ映画の執事とかがよくそんな顔してたぜ」

がりがりと、申し訳なさそうにフリューが頭を掻く。

「魔術師としては、ちっと真っ当過ぎるかね?」

無論、師匠も自分も、こんな山奥で偶然出会ったなどとは思っていなかった。

ひとつ息をついて、師匠の方が尋ねたのである。

「君も招待状をもらったクチか」

「おお、イエス!」

フリューが、腰掛けていた岩から降りる。

がさがさと懐を漁って、民族衣装の内側からそれだけは汚れのない封筒を取り出した。上質の紙に、薄く透かしの入っている封筒であった。封ふう蠟ろうに押された印章とその透かしが、同じ天使の羽をモチーフにしたシンボルなのは、見なくても分かっていた。

つまり、自分たちも持っているものだからだ。

「どうして、それがこんなところで昼寝してた?」

「いや、ひとりで歩くのが寂しくなってしまってさ」

と、おかしなことを言い出した。

封筒をひらひらと振って、人なつっこい感じに笑う。

「どうせ、こういうことなら、もうひとりぐらいは来るだろうと 思ったんだ。ほれ、バッチリ当たったろ!」

「お言葉だが、自分が最後であるという可能性は考えなかったのか な?」

「そのときはそのときさ。遅刻しないぐらいのところで、半べそかいて走っていくよ。これでも足は結構速いんだぜ」

逞しい腕を交互に動かして、不器用にアピールして見せる。

なんだか、ライオンが一生懸命尻尾を振っているみたいだった。 汗と砂で汚れた髭面とは妙に似合っていて、ユーモラスな印象を醸成している。 ある種、人徳かもしれない。

「……あの……じゃあ、一緒に行きます?」

余計なことを言うなよと顔に書いていた師匠をおいて、つい自分は訊いてしまったのである。理由は正直分からない。余計な人付き合いを好まない性分は自分も師匠も同じはずで、誘った自分の側がつい羞恥に顔の赤らむのを感じてしまうほどだった。

「本当か!」

ぱちぱちと瞬きして、男が快活に笑った。

人によっては、その笑顔だけで、バーの酒ぐらいはおごってしまいそうであった。

「よし! 二言はなしな! いやあ助かった。やっぱりひとりは退屈でさ」

Г......

苦虫を嚙みつぶしたかのような師匠に、手を伸ばす。

「フリューだ! 改めてよろしくな!」

「……ロード・エルメロイII世だ。こちらは弟子のグレイ」

握手はしなかったが、仕方なく師匠が名前を告げると、フリューは大いに感心して口笛を吹いた。

「エルメロイ。そうかそうか。あんたが時計塔で噂うわさの! 鉱石科から現代魔術科に飛ばされた君主ロードだっけか!」

「ああ、それで合ってるよ」

今度こそと、もぎ離すように師匠が視線を切る。

「お、そうだ。ついでに酒とか持ってないか。切らしちまってさ」

「酒を持ち歩く趣味はない。葉巻は絶対に分けてやらん」

「ちぇ」

にべもなく言われると、子供がべそをかいたみたいに、ちぇ、 ちぇ、ちぇ、とフリューは舌打ちしたのであった。

「さっさと行くぞグレイ! 遅れたら置いていくからな!」

砂を蹴散らし、コートの裾をさばいて師匠が坂道を登っていく。

もっとも、三十分後に一番遅れて弱音を吐きまくっていたのは、 おおかたの予想通り師匠その人だったのだけれど。

一やがて。

その先で、剝離城は姿を見せた。

*

いや、それを城というべきかどうか。

背後に広がる静せい謐ひつな湖と、こちらに下ろされた頑強な跳ね橋は、確かにその形式にかなっている。森林と湖と大理石が織りなす美しい風景は、おとぎ話にでも出てきそうな荘厳さだ。単なる優劣を比べるなら、英国に多々ある名城と比べても何の遜色もない。

しかし。

傾斜のついた尖塔は、まるで苦く悶もんする背骨のごとくねじまがっているではないか。

積み上げられた大理石のひとつずつが、人の不安を誘うための緻密な計算から成り立っているようでもあった。積み上げられたはずなのに最初からそのカタチであったかのような──山の内側で眠っていたものを掘り起こしでもしたかのような、ありえない錯覚を引き起こす舞台だった。

- ―半ば崩れた城門は、折れた肋ろっ骨こつ。
- ──歪んで連なった城壁は、大地を鷲わし摑づかみにする腕か。
- ──城壁の向こう側から覗いた館の本体は、今も脈動する心臓を想起させた。

まるで巨人の身体を内臓ごと裏返しにして肌と肉を引き剝がした かのような、そんな情景が、見る者の脳内に喚起させられるので あった。

^г...... あ ı

ぶるり、と身体が震えた。

写真で見ていた姿より、遥かに禍まが々まがしく――いっそ神々しくさえあった。

剝離城アドラ。

「……天使の子は巨人だったか」

と、眉を顰ひそめたままの師匠が呟いた。

「天使の、子?」

「聖書の異本。第一エノク書の記述に従えば、天使と人間の子供は最大三千キュビトの身長だったらしい。現代の単位なら千三百メートル強。この城ぐらいの大きさは楽勝だろう」

「へええー、よくもぺらぺらと出てくるのな」

振り返ったフリューに、ますます師匠が顔をしかめる。

「君も魔術師ならこの程度は知ってるだろう」

「一応知ってるのと、咄とっ嗟さに関連づけて出てくるのは別物だっつの。それに、あんたの場合、単に見た目と知識だけで語ってるわけじゃないだろ?」

「この城の創造主について思うところがあるから、そういう話になったんじゃねえの?」

「それこそ、君はどうなのかね?」

フリューの問いかけに、師匠は視線だけをやった。

ひどく、鋭い視線だった。

「この剝離城アドラの創造主が──アッシュボーンの魔術師がどういう存在だったか、知らずに来たわけではあるまい」

「わちゃちゃちゃ。やぶ蛇か」

剽ひょう軽きんに言ったフリューに、師匠がさらに問いかけたのである。

「君の正体、まだ聞いてなかったな」

と、口にした。

今度こそ言い逃れできないと思ったのか、肩をすくめて、フ リューは民族衣装の袖をつまんだ。

「傭よう兵へいだよ。だいたい中近東あたりをメインに、魔術がら みのトラブルに首を突っ込ませてもらってる。時計塔とも、たまに お付き合いさせてもらってるんだけどな」

「魔術使い、というわけか」

「ハハ、申し訳ない」

これは、あまり申し訳なくなさそうに、フリューが自分の頭を撫 でる。

自分も聞いたことはあった。

魔術師とは、魔術の真理―仮に『根源の渦』などと呼ばれる―を求めて、何代も何代もかけて、ありとあらゆる資産と能力をつぎ込み続ける存在なのだという。その過程でいかなる能力を得たところで、それは副産物に過ぎず、真理に至る手段以上の意味は持たないのだと。

しかしその一方で、真理とやらにはまるで興味を持たず、魔術を 便利な道具としか見ていない者も時折存在する。これを魔術使いと 呼んで、通常の魔術師は蛇だ蝎かつのごとく忌み嫌っているのだ と、そのようなことを自分も時計塔で聞かされていた。

「言うと、一緒に来るのも嫌がるかと思ったんだが……バラバラに 入るか?」

ちょっと寂しそうに、フリューが城門へ続く跳ね橋を指した。

数秒ほど、間があった。

「……今更だ」

と吐き捨てた師匠が跳ね橋へと足を踏み入れたのだ。

こちらを見たフリューがはにかんだように笑い、自分とふたり揃 そろって、ついていく。

開いた城門の内側は、質素ながら広い前庭になっていた。自然の風景を取り込んだ英国式庭園──というよりは、単に主の興味が薄いらしく、最低限の体裁だけを整えた印象が強い。ただ、そんな中でも師匠の興味を惹ひいたものはあるらしく、城門の裏や茨の陰へ二、三度視線を投げていた。

薔ば薇らの香りが、鼻についた。花にはあまり詳しくないので、 実際に薔薇だったかどうかは怪しい。ただ、べったりと鼻孔の粘膜 に残るような香りではあった。

主郭キープとなる館の玄関に、痩せたスーツの男がたたずんでいた。

どうやら、執事らしかった。

「お待ちしておりました。ロード・エルメロイII世様ならびにフリューガー様」

慇いん懃ぎんに頭を下げ、扉を開く。

驚くほどに、ロビーは広かった。

そして、

「.....あぁ ı

と、思わず息をのんでしまったのだ。

そこは、天使に満ちていた。

ずらりと並んだのは、天使の像。

カタチも材質もさまざまに、石も鉄も、はたまた水晶とおぼしき 彫像もあった。

さらにはステンドグラスへ描かれた弓矢持つ幼ク天ピ使ド、勇ましく剣を携えた大天使アークエンジェルの絵画や権威の笏しゃくを掲げた主天使ドミニオンの壁画、天井にさがった豪奢なシャンデリアにも天使の翼や光輪ホロウといったモチーフがふんだんにつかわれている。

有名な天使ばかりではない。

先に師匠に見せられたような──応ロンドンを発たつまでに少しは勉強したのだ──神聖さこそ感じるものの、一般に言われる天使とはほど遠い怪物もあちこちに配されていた。四つの顔と四つの翼持つ異形は智ケ天ル使ブ、六つの翼を持つ蛇は熾セ天ラ使フだろう。

さまざまな芸術や在り方で、軽く数百を超える天使が主郭キープ の各所に刻まれていたのである。

(.....)

見るうちに、ひどくいがらっぽいものが喉に貼りついてきた。

蒐集された天使たちが、単なるコレクションとは到底思えなかったからだ。いいや、ただの芸術品のコレクションであってすら、十分な年月と強度を具えたそれは得体も知れぬ圧力を蔵してくるものだ。特定の人間が、存分に贅ぜいと嗜し好こうを傾けた驚異の部屋ヴンダーカンマーに立ち入ることは、その相手の脳内に入り込むにも等しいのだから。

だとすれば、ここは--

(.....まるで、脳のう漿しょうだ)

どろりと粘っこい室内の空気に思う。

思わずよろけて手をついた石床にまで、天使の彫刻は及んでいた。

ひどく、息苦しい。この城を見たときに感じた悪寒はますますひどくなっている。ずぶずぶと生ぬるい沼に沈んでいくようだ。その沼には無数の眼球が浮かび上がり、溺れていく自分たちを観察しているようにすら思われた。観察から逃れることなどかなわない。永遠にも等しい時間、自分はひたすら天使の脳に墜落していく。

「錯覚だよ」

声が、した。

どこからした声かも分からなかった。

「レディ。これは魔術ですらない。君の感受性にこの場の『色』が呼応しただけだ。君自身の機能が君を追い詰めている。なんでもいいから方向性を自分でつくりたまえ。瞑想メディテーションの基礎は習っただろう」

瞑想?

そんなものは分からない。だいたい自分がどこにいるかも分からないのだ。

だけど、独特の香りが鼻についた。

頭の裏を引っ掻くような──確かに記憶しているその香りを嗅ぐうちに、足下には石畳が戻ってきた。空気はただ粘っこいだけで、当然眼球など浮いてはいなかった。はあはあと自分の呼吸がうるさくて、肌に嫌な汗が滲んでいるのを感じる。

こちらを見下ろして、いつのまにか師匠が葉巻を吸っていた。

「何を見たかね?」

「……あ、その……こちらを見てる眼球と、脳漿の沼を……」

「なるほど。防性瞑想の訓練は最初にしたつもりだったが、帰ったときの宿題に追加しておこう」

「う」

悔しいが、まったく反論できない。

紫煙をくゆらせたまま、師匠はちらりと視線をロビーの中央にやる。

「当然、集められた人間は、こんな過呼吸には陥らないか」

隣で、フリューもそちらを向いた。

すぐに、その眼がぎょっと剝かれた。師匠の視線の延長上──ロビーの螺旋階段付近から、人影が近づいてきたのである。

「うおっと」

フリューが慌てて柱の陰に隠れるのと、真っ直ぐ歩いてきた相手が師匠に向かって一礼したのはほぼ同時だった。

金髪碧へき眼がん。

整った容貌より、目元の清すが々すがしさの印象的な青年である。

年齢はまだ二十代の半ばといったところだろうか。だがその若さにそぐわぬ自信と経験が、堂々とした態度の裏に見てとれる。しみひとつない純白のスーツと貴石のはまったネクタイピンの組み合わせも、落ち着いた彼の態度とあいまって、その男ぶりを数段も引き上げているように思われた。

「お久しぶりです、ロード・エルメロイ様」

「II世をつけてくれ。そのまま背負うには、私の肩には重すぎる名だ」

「ご謙遜を。時計塔での卿の活躍は聞き及んでおります」

けして言葉面だけではない、誠意のこもった声が気持ちよく耳じ 朶だを叩く。

この青年の過ごしてきた年月まで露あらわにするような声音だった。 どこまでも真っ直ぐに、いつだって正面から、彼は人生の障害

と相対してきたのだろう。

「そう、かしこまって言われても困るな。君の方が時計塔のお歴々には覚えがめでたいはずだ。ハイネ・イスタリ──それとも、騎士 ザ・ナイトの方がすわりがいいか」

「女王閣下から称号をいただいたわけではありませんので」

冗談めかした師匠の言葉も、杓子定規に否定する。

どうにか体調が戻ってきたので、自分はこっそりと離れてから、 隠れたフリューへと耳打ちした。

「……ひょっとして、有名人なんです?」

「おい。なんで知らないんだ。エルメロイの従者だろお前」

「......あの人に会ったのも、時計塔に入学したのもつい最近なものでして」

正直に告白すると、フリューはため息をついた。

わざわざ隠れるぐらいだし質問に答える必要もないのだが、律儀に反応してくれるあたり、なんだかんだで人のよい相手なのだと改めて認識する。

「イスタリといえばもともと錬金術の名門だが、ハイネはいわくつきだ。一度は魔術を打ち捨てて、教会の修道士となっていたぐらいだからな」

「教会の?」

この場合、教会とは"普遍的な"意味を持つ一大宗教とは違ってくる。

その裏側に存在する、主に『異端狩り』を目的にする集団のことだ。規模において時計塔を凌りょう駕がする数少ない組織であり、神秘を扱うスタンスが異なることから、しばしば対立している。魔術師によっては口にするのも嫌がるぐらいだ。

──拙せつにとっては、時計塔よりは馴染みのある場所だった。

「え、と、それがなんで魔術師に戻ってるんです?」

「あまりの才能を惜しんで、家が連れ戻したんだよ」

瞬きした自分へ、フリューがかすかに口元を歪めた。

「おかげで教会と時計塔がこじれて、一時は相当剣吞なことになってたよ。だが、それだけの価値はあった。イスタリ家もさぞ誇らしいだろう。女王陛下をわざわざ閣下とか一段下げて呼ぶのだって、表の権威なんて認めてないぞっていうカビの生えた魔術師の言い回しだぞ。まあそつのないこった」

引き戻しにかかった教会の刺客をことごとく倒してのけたのは、 ハイネ・イスタリ自身だったという。

神の摂理を守るため、教会の戦力はいずれもが常識を超えて鍛え抜かれている。十数名からなる手で練だれの暗殺者の襲撃をその魔術で打ち倒したとなれば、なるほど時計塔でも有名になるはずだ。自分もひとくさり聞いただけではとても信じられない――単なる天才の所業ではなく、災禍に近い印象の出来事である。

(.....でも、それは)

と、別のことも自分は思っていた。

ひょっとすると同僚だったかもしれない刺客を、自らの手で倒した青年の―ハイネ・イスタリの気持ちはどうだったのだろう。

そんなことを考えているときに、

「.....お兄様」

螺旋階段の裏に隠れていた、白いワンピースドレスの少女が顔を 出したのだ。

まだ八歳ほどの幼さで、臆病な小鳥を思わせる挙動に、青年は優しく微笑んだ。

「大丈夫だロザリンド。エルメロイII世様は誠実な方だよ」

「.....は、はい」

ぱたぱたぱたと走ってきて、小さく頭をさげる。

「妹のロザリンド・イスタリです。よろしくお願いします」

今にも恥ずかしくて死にそうという感じで、挨拶した。

煙が悪かったのか、軽く咳き込んだのを見て、師匠が慌てて葉巻を口元から離す。そそくさとシガーケースへいれた師匠に、ハイネがすまなそうに会釈した。

「では、そちらは―」

顔をあげて、こちらへ視線を寄越したときだった。

その拍子に、自分と話していたフリューの姿も視界に入ったらしい。

あちゃあ、と片手で髭面を覆ったフリューを見やり、師匠が尋ね たのである。

「フリューのことをご存じで? こちらに来る途中、一緒になった のですが」

「.....ええ」

と、青年はうなずいた。

これまでの爽やかな態度とは打って変わった、酷薄さの滲んだ声音であった。

「……ええ。魔術使いにして〈師父殺し〉の占星術師アストロロ ジャーフリューガーの名なら、いささかは」 ロビーでの対峙は、ほんの数秒のことだった。

「失礼。このような私情を持ち込む場ではありませんでした」 青年の方が謝罪して、すっぱりと退いたのである。

(─へえ! 頭でっかちの騎士様ってだけじゃないのな!)

右手で、いつもの声がした。

フリューの側はいやいやいやと苦笑して、手を何度か振ったきりだった。

「すまないねロザリンド。怖がらせたかい?」

「う、ううん」

少女が、健気にかぶりを振る。

もちろん強がりは混じっていたのだけど、そこは触れぬようにしつつ、ハイネは妹の頭を撫でた。多分いい兄なのだろう。魔術師たちの世界でそれがどのような意味を持つかは、自分にもはかりしれない。あるいはそれは、敵視し合ってること以上に残酷な予感もしたのだけれど。

「ところで、卿も招待されたのですね」

師匠に向かって、ハイネが尋ねた。

「ああ、世間のしがらみでね。先代と付き合いのあった家はほとんど離れていったんだが、ここの城主は数少ない例外だったらしい」

「では、やはりあの件で」

「ああ」

と、師匠がうなずく。

「この剝離城アドラの城主──ゲリュオン・アッシュボーンが、先月 亡くなった件だ」

ぞく、と隣で聞く自分の背筋に、冷たいものがたどった。

さきほど天使たちの蒐集に垣間見た──こびりつくような執念が、 再び頭蓋骨の裏側をずぶずぶ浸していくようだった。 蒐集家が死ん でいるというのであればなおさら、今の光景は冥界の花園のごと く、現実にはありえぬ美しさと禍々しさを孕はらむかと思われた。

「大丈夫か」

「.....はい」

と、自分はかろうじてうなずいた。

「アレは……見ませんでしたから」

「そうか」

薄情なぐらいあっさりと興味を失って、師匠は自分のジャケット の内側から一枚の封筒を取り出した。

さきほどフリューが見せたのと同じ、招待状であった。

「郵送されてきたのは一週間前のことだ」

「ええ、こちらも同じですね」

ハイネがうなずく。

「では、遺産についてもかね?」

「はい」

もう一度、ハイネはうなずいた。

「剝離城にて遺産に関する遺言を公開すると聞きました。アッシュボーンには直接の血縁がないため、ゆかりのある家に声をかけてい

るとのことですが、これだけの魔術師が集まるのは異例ですね」

「なんとも、古い魔術師好みではあるな」

うんざりした感じで、師匠がかぶりを振る。

「自分の死さえも、ひとつのゲームのようだ」

「……ほう。それが気に入らないわけかね。新しい君主ロードよ」

これは、ロビーの奥から聞こえたのだ。先にハイネとロザリンドが佇んでいた螺旋階段とは別の、もうひとつの螺旋階段のすぐ近くから気配が寄ってきたのである。

きい、と金属のこすれる音がした。

車椅子の車輪によるものと気づくのに、少し時間がかかった。

「ミスター・オルロック・シザームンド」

師匠の表情に、ただならぬ緊張がよぎる。

車椅子に座った白髪の老人だった。どうやら助手か何かとおぼしい少年が背後から車椅子を押しているのだが、彼は視線を合わせようともしなかった。

深い皺しわに皺を重ねたその姿は、魔術師というよりも木ミ乃イ伊ラに近しい。少なく見積もっても八十は越えているだろう。枯れ枝のごとき十本の指にはそれぞれ別の指輪がはめられており、それらの指輪の美しさが、なおさら老人の身体に降り積もった時間を際だたせるようにも見えた。

この剝離城の在りようにも匹敵するほどの、魔術師らしすぎる生物。

人でありながら、もはや別のカタチに踏み出しつつあるような―

「.....こちら、は?」

「オルロック・シザームンド殿だ。蝶魔術パピリオ・マギアの重鎮 でな。時折、時計塔の会合で話をさせていただいてる」

「〈〈、〈〈〈、〈〈〈〈

さらなる説明を求めようとした自分より先に、オルロックと呼ばれた老人は低く笑った。

笑うというより、肺の空気を吐き出しただけにも聞こえる。干ひ 涸からびた洞窟に吹く風がたまさかそんな音を立てているだけのよ うな、そんな印象を催させた。

蝶魔術パピリオ・マギア、と師匠は言った。

師匠いわく、それは芋虫が蛹さなぎを経て、一度自らの躰からだをどろどろに溶かしきってから蝶ちょうに変わるプロセスに神秘性を見出した魔術らしかった。

優美な名前と裏腹に、老人の姿から発散される気配はただただ 禍々しい。黒い泥にも似たその気配は、じわじわと石畳へ垂れてい く。

「ロード・エルメロイII世」

と、老人は呟いた。

「ロード・エルメロイII世、ロード・エルメロイII世、ロード・エルメロイII世か。仮にも君主ロードでありながらいまだ祭位フェスより昇れぬ身で、よくも人前に顔を出せるものだ。まして、わしの畏友であったゲリュオンの城までな」

祭位フェス。

師匠の時計塔での等級──第四階位のことだ。

くくく、ともう一度笑って、車椅子の革の肘掛けを老人は撫で た。それが老人の癖でもあるのか、何度となく同じ場所を擦さすら れた肘掛けは、年月を経た飴あめ色に変じている。

師匠は一言も返さなかった。もとより師匠の腕が悪いことは自分でも知っている事実だ。

それでも他人に指摘されれば、胃の底に消化し切れぬわだかまりが生まれる。

師匠は、ジャケットの胸元に手をおいて一礼した。

「未熟の身は承知しております。事情ゆえ一時的に預かっている名前なれば、どうぞオルロック殿にもご寛かん恕じょいただきたい」

「……ふん。君主ロードがたやすく頭を下げるな。歴史が濁る」

車椅子の肘掛けで指を持ち上げ、つまらなそうに老人が指摘する。

それから、

「一応紹介しておこう」

と、視線だけで背後を示した。

「一おお、これは美人さんやがな!」

すると、ロザリンドと自分に向かって、奇怪な衣装の若者が飛び出してきたのである。

年頃はハイネと同じ二十代半ばほどで、右目には眼帯をしている。

もっとも奇怪というのは眼帯のことではない。頭にくくりつけられた小さな多角形の匣はこや、真っ白な麻の法衣、さらには首から下げられた大きな法ほ螺ら貝がいのことである。

それが修験道と呼ばれる、極東の宗教形態に根ざした服装である ことを、後になってから自分は知らされた。

「山伏の時とき任とう次じ郎ろう坊ぼう清せい玄げんや。よろしく な!」

やたらに訛なまった陽気な英語で、そんな風に挨拶したのである。

この国では奇妙とも思われる衣装なのに、不思議と城に馴染んで 見えるのは、同じ魔術師という生物ゆえかもしれない。

「確か、その頭の箱は兜と巾きんというのだったか。ユダヤ教の聖 句箱テフィリンと同じようないわれだったと記憶しているが」 「へえ、物知りな御仁やな。大陸の魔術ならまだしも、こちとら日本でもマイナーな習俗なんやけど」

感心した風に、若者が口笛を吹く。

もっとも、視線と身体はこちらとロザリンドに向いたままだっ た。

「どや? そこでお茶でもせえへん? 執事さんの言うことには極上の茶葉用意してるんやって」

Г.....

腰をかがめて揉み手をしているのだが、対するロザリンドは黙ってハイネの背中にくっついたままだ。そうしていると、本当にフランス人形か何かに見える。

......自分も、いろいろ思うところはあるものの、師匠を盾にして 隠れさせてもらっていた。こういうとき、師匠の背丈がやや高めな のはほんの少しありがたい。

淡く、師匠が眉をひそめたように見えた。

「山伏ということは、形はどうあれ神に仕える身ではないのかな。それに、確か日本の修験道は女をケガレとみなしているはずだが」

「ははは、信仰と自分の趣味は別やて。それにお山ならともかく、 外国で般はん若にゃ湯とうを遠慮する必要もないやろ。―そういう わけで、ふたりとももうちょっと親交を深めましょ。な、ええや ろ?」

「.....いえ、その」

自分が恐縮して引き下がったところに、

「申し訳ありませんが、妹が怯おびえてるようですので」

ハイネが割って入った。

その口調には、妹を害する者はけして許さないという頑とした決意が満ちている。

「ん、お兄ちゃんがあまりガード堅いのはあかんよ。妹に嫌われる で」

「あいにくですが、ロザリンドが私を嫌うなどありえません」

「うっわ、スゴい自信やな! マジメか!」

そそくさと引き下がり、清玄が片手を背中側にやった。

その手から、ひゅん、と何かが飛んだ。目の前のハイネの死角を つき、それは物理的にありえない複雑怪奇な弧を描いて、青年の背 後から襲いかかったのである。

音はなく、しかし猛獣をも打ち倒す勢いで迫る影。

「お兄様!」

ロザリンドの叫びに、突然、ハイネの手が持ち上がった。

「―今のは、修験道の飛ひ鉢はつ法ほうですか?」

無表情でハイネが言った。

手の平からたらりと赤いものが流れた。

すんでのところで受け止め、摑まれているのは、およそ手の平大 の金属の鉢であった。

「はは、ご賢察や。開祖の泰たい澄ちょうっておっさんが得意やったそうでな。日本やと役えんの小お角づぬはんの次ぐらいには有名なんやけどな。托たく鉢はつの際に一発見せたら、拍手喝采でお布施が集まったそうやで」

托鉢というのは、自分も聞いたことがある。

確か、出家者が信者から食料や金銭を受け取る修行だったはずだ。だったら、あの鉢が時任次郎坊清玄にとっての呪具ということなのだろう。ならば飛鉢法とはその鉢を思い通りに動かす神通力のことか。

「ええ、よいものを見せていただきました」

うなずいたハイネに、眼帯の山伏がへらへらと笑って頭を掻く。

「勘弁してえな。ちょっと遊んだだけやろ」

「遊びなら、返礼は必要でしょう」

ハイネの指がネクタイピンの貴石に触れた。

「Convert流転せよ」

囁きとともに。

ブーツの爪先が、石畳に触れた。

刹那、石畳から無数の鋭い刃やいばが噴き上がったのである。

刃が石畳を貫いたのではない。石畳自体が刃と化しているのだ。 ハイネの爪先が立てた音は波紋のごとく広がり、さあと絨じゅう毯 たんがめくれあがるように夥おびただしい刃となって清玄を追っ た。

「うお!」

清玄が跳ねる。

ほとんど重力を無視して、その身体は不自然に数メートルも飛翔 した。

後で師匠に知らされたことだが、これも修験道の有名な験げん力りき―役小角の伝承にも残された鳥からす飛びとも天狗飛び切りの術とも呼ばれる魔術であった。窮めれば魔法一歩手前、空間移動にも近しい『力』を発揮するという術式をもって、清玄は悠々とシャンデリアに飛び乗った。

「うははははは、どや!」

得意満面、眼帯の山伏が腕を組む。

しかし、ハイネはそっと山伏の胸を指さしたのである。

「そちらにお返ししました。あなたの神の信者ではありませんが、

よいものを見せていただきましたので」

「へ?」

慌てて視線を落とすと、清玄の組んだ腕にひらりと石の刃が舞ったのだ。

石刃の欠片。

いや、花弁だった。石の刃がその百倍もの花びらとなり剝離城の ロビーを飾ったのである。誰もが瞬きし、息を吞むような光景はほ んの数秒のこと。次の瞬間には清玄の腕の中にさきほどの鉢が載せ られていた。

鉢の中には石の薔薇と十ポンド札までも収められていた。

「ほう、これは」

「へえ」

オルロックとフリューも、自らの手元を見下ろす。

老魔術師の肘掛けとフリューの指先にも、可憐な石薔薇が咲いていたからだ。

「.....あ」

と、拙せつも声をあげてしまった。

師匠のジャケットと自分のマントにも、石の薔薇は挟み込まれていた。魔術というよりも一流のマジシャンのごとき手際だった。あまりに薄く滑らかに形作られた石の薔薇は、こうして手で触れていても本当に息づいているとしか思えない。

生きていないのに生きているという矛盾は、自分の胸と記憶を強く疼うずかせた。

(.....)

死者よりも死者らしく。

生者よりも生者らしく。

故郷で、自分がいくつもいくつも見てきた光景。

不条理で、不合理で、生きても死んでもいないもの。

──『お前が滅ぼすべきはアレだ。アレだ。アレだ。アレだけだ』

ここではない土と石の臭いを思い出して、酸っぱい嫌悪感と拒絶 感で口の中がいっぱいになる。指先まで強ばって、脳髄まで泥酔し そうになるのを耐える。この記憶は今と関係ない。この記憶はここ とは関係ない。呪文のように頭の中で唱える。

「……これが、イスタリ家の錬金術か」

石薔薇をつまんで、師匠が呟いた。

自分も、深呼吸する。

「……錬金術って……前に言ってたアトラス院の、ですか?」

魔術師の世界では、錬金術といえばアトラス院だと聞いたことがあった。

なんでも時計塔に匹敵する魔術協会の三部門のひとつで、あらゆる面で外部と隔離された『生きた奈落』だとかなんだとか。正直言葉の意味はよく分かってないのだが、

「アトラス院のそれとは系統が別だ。魔術の祖をもってなるアトラス院と違って、時計塔は中世期に西洋へ流入して以降の錬金術を採用している。とりわけイスタリ家秘蔵の〈生きている石〉は下手な英霊の武具にも匹敵するというが、なるほど大した才能だ」

ほんの少し、師匠の瞳が細められた。

才能という言葉や概念を口にするとき、師匠はよく皮肉げな感情をこぼす。

けして届かない──しかし、いつも夜空に輝いている星でも語るような、そんな熱っぽい心のひだが見え隠れした。

そして、

「っとわあ!」

つるん、とシャンデリアの清玄が滑ったのだ。

派手な落下音がロビーにこだまする。幸い、石畳の刃はすでに消え去っており、ただの打撲だけですんだようだった。

「.....痛いつつつつつ......」

呻きつつ尻をさすった清玄が、困ったように手を上げた。

「降参降参。こらあかんわ。験比べじゃ勝ち目あらへん」

剽軽で、憎めない顔ではあった。

ハイネもふわりと笑って、手を差し出す。

「ロザリンドはダメですが、私でよければお茶のご相伴にあずかりましょう」

「男は趣味やないんやけどなあ。まあ、兄さんぐらいの美形ならえ えか」

にへらと笑って、清玄がその手を握った。

どちらの口調も和気を帯びているのが、自分には意外だった。戦い合って成立する友情とかまるで分からない。男たちがそういう生き物だとしたら、人類の半分に対して隔絶感を持ってしまいそうだ。いや、自分が親近感を覚えるような相手は、ついぞ出会ったことがないのだけれど。

(─おい、グレイ!)

突然、右手のあたりで声がした。

自分にだけ聞こえるひそやかさで、しかしそれは緊急の響きをこめていた。

その方向に振り向く。

さきほど自分たちが入ってきた、玄関の方だった。

「─私が、最後かしら?」

と、後ろに従僕たちを控えさせて、優美な人影が口にした。

目の覚めるような蒼あおいドレスは青空を思わせた。同じ色のリボンで金髪の縦ロールをまとめ、手にしていたのは象牙の握りの日傘である。しゅるりと仕舞われた絢けん爛らん張ばりの材質までは判然としないが、おそらくはその日傘一本で車の一台や二台は買えるのではあるまいか。

何よりも、天工が魂を注ぎ込んだとしか思えぬその美貌。

ふおおお、と清玄が歓声をあげる。

いや、今回ばかりは彼だけではなかった。ハイネやフリューはも ちろん、自分やロザリンドといった同性でさえも見惚れずにいられ ぬほど、少女の在り方は鮮烈だった。

たった十七、八の少女に、この場の誰もが眼を奪われた。

「……やはり来おったわ。煌きらびやかな宝物の香りにつられたかよ」

と、忌々しそうに車椅子の老人が漏らす。

その言葉を聞きとがめて、

「何か問題でも? ご老体」

と、華やかな声は応対した。

歩み寄る姿は、自らこそこの城の主とでも言うようだった。

老人の喉は、ぐつぐつと地獄の溶岩のごとく笑った。

「……おうおう、おぬしの卑しい血について言うたのさ。ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルト」

「光栄ですわね」

蒼きドレスの少女─ルヴィアゼリッタもまた、その言葉に微笑して応えたのであった。



─ひどく、困っていた。

救いようもなく、どうしようもなく、絶望的なほどに困り果 てていた。

「ど、どどどど、どうしてあなたがたが私の部屋に入ってくるので すか!」

白磁のごとき頰を朱色に染めて嚙みついてくるのは、まさしくルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトその人だったからだ。

なお師匠は、銅製の扉を開けたところで見事に硬直している。

できたらそのまま扉を閉めて何も見なかったふりをしたかったの だろうが、師匠のひ弱な腕に扉は重すぎたし、何より相手の剣幕が 現実逃避を許してくれそうになかった。

就寝前だったのか、少女は白いネグリジェに着替えていた。

こちらも上質の滑らかな絹で、きっと目が飛び出るような値段なのだろうが、とにかく可愛らしい。滅めっ多た矢や鱈たらにフリルが多くて、それでいて少女のすらりとした肢体を損なわないデザイン。……ところで扉を開いた直後、凄まじい速度で枕の陰に隠したのは犬のぬいぐるみではなかったろうか。

確かキッズ向け番組で、料理好きの擬人化された犬がいざというときは身を挺ていして守ってくれる騎士になるとかいう、実に少女の夢を体現した代物だったはずだ。なおこんなことを知っているのは、ロンドンに来てすぐたまたま寮のテレビで見かけたからなのだが……もちろん当時の自分が欲しかったわけではないし、毎週その時間を空けるようにしてるわけでもないと、それだけは念を押しておきたい。

「どうしたんですか! 言い訳があるなら早く仰ってくださいませ!」

涙ぐましいぐらいの努力で、むしろ涙目で、ぬいぐるみが見えないよう毅き然ぜんと胸を張っている。

そんなことをしなくても多分師匠は気づいてないと思うのだが、 フォローをいれればもっと大事なものが崩壊してしまいそうだ。

(.....どうしよう)

と、本気で自分は思っていた。これほど切実に思い詰めるのは、 ロンドンに来てから初めてのことだった。

初対面と印象が違いすぎる。

というか別人だ。

つい数時間前、ほとんど怪物のごとき老魔術師と正面から渡り 合っていたのは誰だったのだろう。

「……いやその、待ってくれレディ」

頭痛をこらえるように眉間を揉んで、師匠が話しかける。

「ええ待ちますとも。待ちましょうとも、ロード・エルメロイII世様! まさか淑女の部屋に無断で押し掛けるような君主ロードがいるとは、時計塔の名も地に墜ちましたわね!」

ぎゅるぎゅると、凄まじい魔術の圧がルヴィアの周辺に集中する。

(.....あ、これダメ)

直感する。

少女が本当に別人だとしても、この魔術は本物だ。おそらく師匠では抵抗もできまい。落ちこぼれとは言わないまでも、師匠の二流ぶりはよく分かっている。真の一流と激突したら、はたして燃え滓かすも残るかどうか。

「ち、違う。単に〈天使名〉で泊まる部屋が指定されただけ

で.....」

封筒を掲げて、師匠は必死に言いつのる。

その表面に、Mihaelミハエルという単語が浮かび上がっている。 薄ぼんやりとした文字は、なんだかこの剝離城と同じように禍々し くて──頼りない。

「……本当ですわね」

眇すがめになって、ルヴィアが師匠の封筒を確認した。

「ですが、こちらの部屋の〈天使名〉はMichaelミカエルのはずで すが」

「**は**?」

師匠が改めて、扉の近くにかかったプレートを確認する。

そこには、ルヴィアの指摘と同じ文字―Michaelが刻んであった。分かりやすくいうと、Cが入っているかいないかだ。ちなみに、プレートを見つけたとき「ここみたいです」と師匠に声をかけたのは自分である。

「......うむ。これは」

「す、すいません。拙せつが、間違えた、みたいです」

ごめんなさい師匠、あなたの命はここで終わりみたいです。できたら自分を恨まずに逝ってください。

「.....やはり、覚悟はよろしいですわね?」

少女の腕に圧力が凝集していく。周囲の空気さえも変質させながら、螺旋状に加速する。

その圧が解放される寸前、師匠が叫んだのである。

「ま、待ちたまえ! これはシェムハムフォラエだ!」

ГПППП? ,

一瞬迷って、ルヴィアは小さくうなずいた。

「ああ、なるほど。私の〈天使名〉だけでは分かりませんでしたが、なるほどそういうことでしたの。つまり、この剝離城の魔術はカバラを基盤としてますのね」

(.....シェムハムフォラエ?)

なんだかいろいろ納得してるようだが、自分にはさっぱり分からない。

カバラは確か、魔術でも有名な系統のひとつだ。もともとはユダヤ教に基づく思想のひとつであり、必ずしも神秘的要素を内包するわけではないらしいが、魔術師が口にする場合はほぼ魔術としてのそれを指す。時計塔の階位もこれを基にしているとも聞く。

しかし、シェムハムフォラエとやらが何なのか、今のやりとりで どうしてそんな結論に至るのかはさっぱり謎のままだ。

「お詫びとはならないが、今の情報に免じてひとまずは許してもら えないだろうか」

Г......

師匠の申し出に、ルヴィアは少し考え込んでから、口を開いた。

「……ギリギリ、及第点ですわね」

「赤点でないなら幸いだ。この年になって採点される側とは思わなかったが」

冷や汗をそっとハンカチで拭きながら、師匠が話す。

実にぎこちなく、操り人形のような仕草で一歩退いたところで、 ルヴィアがふわりと白い指を突き出した。

「Call目覚めよ」

光が、見えた。

いや、見えたと思った。

次の瞬間、音もなく師匠のジャケットの袖元に黒々とした穴が空いていたのである。熱によるものではない。凝集された呪いが起こした結果が、あたかも熱線にも似た効果を引き起こしていたのだった。

「いいですわね? もしも今度狼ろう藉ぜきをなされたときは、心臓が同じ呪いに灼やき焦がされると思ってくださいませ」

にっこりと笑う。

そのまま、ばたん、と重そうな扉が勢いよく閉じられた。

どうやら、単純な腕力でも少女の方が師匠を上回るらしい。この 場合少女を賞賛するべきか、師匠を責めるべきかは悩むところだ が。

ともあれ自分たちだけが廊下に取り残されたところで、師匠がこちらを振り返った。

「どうした、グレイ」

「......その、ちょっと......いろいろ考えてしまって」

「ふん。魔術師同士の軋あつ轢れきなど茶飯事だ。いちいちかまってられるか」

正直、最初のあれは魔術師同士というにはニュアンスが異なる気がするのだが……それはつっこまないことにする。師匠にそうした 機微が分かるとも思えない。

「それより、ノートに書き加えておけ。この剝離城の大ざっぱな地図に、エーデルフェルトの〈天使名〉だ」

「あ.....はい」

幸い、頭は悪いが地形の把握は苦手じゃない。

渡されていたノートに、これまでの情報を書き込んでいく。シェムハムフォラエのスペルでつまずいたところで、

「一それはShemamphoraeだ」

と、師匠が紙面を指でなぞった。

少し、目を細める。

「ついでに、少し状況を整理しようか」

何かしらを考えながら、そう口にした。

数時間前あのロビーで起きたことから、師匠はもう一度語り始めたのであった。

*

一時間は、さかのぼる。

「……おうおう、おぬしの卑しい血について言うたのさ。ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルト」

「光栄ですわね」

オルロックとルヴィアは、互いに微笑を交わし合っていた。

この場合の笑顔とは、騎士の決闘フェーデで投げつけあう手袋に も似ている。美しく汚れひとつないからこそ相手の誇りを決定的に 傷つけるに足る、そんな代物だ。

۲.....

正直、自分の頭はパンクしそうだった。

以前にも言ったが、つい二ヶ月前まで自分がまともに話した人物 は両手の指の数に満たない。それが突然、これほど個性豊かな人物 ばかりと巡り会っては脳細胞が悲鳴をあげるのも当然だろう。

フリュー。

ハイネ・イスタリ。

オルロック・シザームンド。

時任次郎坊清玄。

いずれも忘れがたい特質を具えた魔術師ばかりであったが、新た に現れた少女は一際鮮烈であった。

「ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルト……これはまた、とびきり のが来たな」

と師匠が呻いた。

「ご存じなんですか」

「フィンランドに居を構える宝石魔術の大家だよ。先代が半ば引退して、娘の方があちこちに顔を出しているとは聞いていたが.....あれがそうか」

「おうおう、未熟な君主ロードでも知っておるか」

師匠の言葉を聞きつけて、車椅子の老魔術師も愉快そうに嗤わらう。

「そうとも。地上で最も優美なハイエナ……たかがルネサンス期の成り上がりが、恥知らずにも世界中の争いに好き好んで介入し、魔術の至宝だけを齧かじりとろうとするゆえに付いたあだ名さ」

対して。

値踏みしあう魔術師たちに、美しい少女はちらとだけ視線をやった。

背後に控えた数人の従僕にうなずき、剝離城のロビー深くへと単身踏み込んでくる。

「一シザームンドのご老体」

と、囁いた。

その響きを耳にするだけで打ち震える芸術家もいるだろう。単に 外見だけではなく、少女には常人に得難い美質が具わっていた。 オーラといっても聖霊といってもよい。古来、多くの批評家たちが 芸術を表現する際、どうしても言葉にしきれぬ何かをそう呼んでき たのだった。

まだ十七か八。

学生の年頃であろうに、どうしてそんな在り方に至ったのだろう。

「ご評価いただけて嬉しいですわ。――つまり、それだけエーデルフェルトの家系を恐れながら、私たちが果実を口にするのをどなたも止められなかったということですもの。あえていえば、ハイエナよりは狩人ハンターの方が好みの響きですが。ああ、フランス語のル・シャスールでもよいですわね」

高慢そのものの台詞せりふがまるでかんに障らない。むしろ当然 とうなずいてしまうほどの威厳が、少女には宿っている。エーデル フェルト家や魔術の派閥など知らない自分でさえ、びりびりと肌が 痺しびれるほどに伝わってくる。

たとえば美しい宝石が、その価値を知らぬ者にも、権威の象徴と して通じるように。

「ですが、わざわざこちらに来られたというのは、魔術刻印に何か不備でも?」

「……は。死骸漁りが何をくだらぬことを」

「そうですか?」

と、少女は首を傾げた。

「もちろんシザームンド家に歴史ではかないませんが、あまりに古すぎると刻印にもかびが生えるなどと聞いたことがありますわ。ええ、魔術の血を育てるのに長い時間は必要ですが、千年を超えてしまうのも問題ですわね? よほど出来のいいワインだって耐えられるのはせいぜい百年と少しですわよ?」

くすくすと、蒼いリボンの少女は笑みを唇に含ませる。

常識外の魔術師たちの中にあってすら、なおバケモノと言ってよい時計塔の重鎮相手に一歩とて譲らない。

「だからこそ、修復師のゲリュオン・アッシュボーンを頼ったのではないんですの?」

ぞわ、とただならぬざわめきが剝離城のロビーをよぎった。

先ほどあれほど鮮やかな魔術を見せたハイネすら片眉をあげ、か すかな慄おののきを露わにしのである。

「......修復師?」

「この剝離城アドラの主はね。確かに高位の魔術師ではあったが、 いささか別の面も持っていたのさ」

鸚鵡返しに呟いた自分へ、師匠が耳打ちした。

「別の面、ですか?」

「ああ。魔術刻印の話はしたことがあったな」

もちろん、知っている。

魔術とはすなわち神秘である。

しかし西暦以降、人類の歴史は神秘をことごとく駆逐していった。科学の光が広がるのと比例するようにして神秘の闇は衰退していく。いかに魔術師たちが干渉しようがこの摂理自体は曲げようがない。神しん代だいの神秘は遥か彼方に遠ざかり、現代では一時的に存在することすら至難の業だ。

魔術刻印は、こうした時間の流れに打ち勝つため、魔術師がつく りあげた『固定化された神秘』なのだった。

「本来、魔術刻印というのは何百年もの間醸造してつくられる新しい臓器のようなものだ。臓器であるゆえ血族のもの以外にはまず適合しないし他人が干渉する余地も薄い。魔術師の古い家がはばをきかせているのも、こうした魔術刻印の存在が大きいな」

師匠の言葉は時計塔の講義のように、心地よいリズムで届く。

これほどに切迫した状況でさえ、師匠のそうした性質までは変えられぬようだった。

「しかし、例外はいる」

と、師匠は口にした。

「それが、ここの主だ。けして表沙汰にはしていないが、アッシュボーン家は損傷した魔術刻印を修復することが可能だと言われ、ひそやかに修復師という名で呼ばれ続けてきた。さすがにエーデルフェルト、そちらの歴史も承知していたか」

言って、師匠がふたりの対峙を見やる。

苛立たしげに、老魔術師の人差し指が車椅子の肘掛けを叩いた。 ずりずりと枯れた指先で革をこじるようにして、オルロックが視線 をあげる。

「……なら、エーデルフェルトはどうだ? わざわざアッシュボーンの遺産に絡んできたということは、自らの不備にも思い当たる節があるのではないか」

「あら、失礼ですわね。魔術刻印を傷つけるような未熟者に見えま して?」

唇の端をつりあげ、少女はドレスのスカートをつまむ。

やはり、お辞儀カーテシーというよりも騎士の剣礼のようだった。

「ですが、そのように貴重な技術なら無為に失われるのも残酷。私 のコレクションの末席に加えてさしあげようと、ここにまかりこし た次第ですわ」

これほど傲慢な物言いもあるまい。

彼女はその技術が必要とすら言ってないのだ。単に、貴重なものならば自らの蔵に収まっているのが当然と、頑是無い子供のごとき理を掲げてのける。そうした性質をして、地上で最も優美なハイエナなどというあだ名をつけられたのだろうか。

このままであれば、ふたりは本当に決闘にもつれこんだかもしれない。

少なくとも、ルヴィアはそういうつもりだったろうし、老魔術師

の方にも否やという空気はなかった。ここまでの経緯からすれば、 魔術師同士が殺し合うことなどさして珍しくはないのだと、自分に も十分分かっている。

しかし。

招待客は──あるいは招待客以外は──ルヴィアが最後ではなかったのである。

「おお?」

最初に振り仰いだのは、フリューだった。

吹き抜けのロビーの二階側である。イングリッシュオークの手すりに白い指を滑らせ、その女はこちらを見つめていた。

女は、眼鏡をかけていた。

黒髪である。ルヴィアよりもずっと長く、夜の闇をくしけずったようなその髪は踝くるぶしまで流れている。だが、その髪と麗貌にも劣らず彼女の姿を美しく飾っているのが、異様に袖が長く色鮮やかな花々の描かれた衣装であった。

(.....民族衣装?)

「友禅の振り袖、だったかな」

師匠が顎に手をおいて呟いた。

東洋の響きのある単語だ。後で知らされたのだが、それはさきほどの時任次郎坊清玄と同じ、日本という国に端を発するものらしかった。つくづく自分はあの国に縁があるらしい―とは、後で師匠がこぼした台詞であった。

「……お待たせしましたわね」

す、と眼鏡のつるに指をかけて持ち上げる。

さきほど主郭キープの玄関で待っていた執事も、女の隣に移動していた。

「ゲリュオン・アッシュボーンの遺産管理人に指定され、時計塔の

法政科よりまかり越しました、化あだし野の菱ひし理りと申します」

もう一度、魔術師たちがざわめきたつ。

法政科、という言葉は彼らにとってそれだけの意味を持つものだった。師匠の気配も先ほどまでとは異なる独特の緊張を孕んだのが感じられた。

彼らを見下ろしたまま、菱理は一枚の書状を取り出した。

師匠たちに渡された招待状とよく似た──しかし、アッシュボーン家の印章の隣に、時計塔は法政科の印章も押された書状であった。

「では」

と、女が告げた。

「ゲリュオン・アッシュボーン氏の遺言を、公開いたしましょう」



時計塔には、十二の学部が存在する。

十二の君主ロードが管理する十二の深淵。

たいていの魔術師が最初に学ぶ全体基礎―魔術全体の共通常識と 地脈とマナ学を範囲とする―をはじめとして、個体基礎、降霊、鉱 石、動物、伝承、植物、天体、創造、呪じゅ詛そ、考古学、現代魔 術論と続く、十二の研究方針だ。

これらはカタチや方向性こそ違えども、すべて神秘を追究しようとする学問である。師匠いわく、魔術師とは『根源の渦』を追い求めようとする生き物なのだから、これは当然の構造でもあった。

しかし。

ひとつだけ、時計塔には神秘と直接の関係を持たぬ科がある。それは時計塔の魔術と権力をもっていかにして現実社会へ介入するかという、あるいは時計塔の内部での均衡をどう調整するかという、極めて卑俗で不可欠な集団だった。

法政科。

それは法律と政治を学ぶのではなく──司つかさどる科。『根源の 渦』に迫ろうとする魔術師たちの本能さえも無視して、ただ時計塔 の安定と発展のためにのみ存在する、本来は異端の派閥であった。

太極図における陽中の陰、はたまた陰中の陽だよとは師匠の弁だ。

自分も初めて目にしたが、その法政科の魔術師がロビーの二階からこちらを見下ろしていたのだった。

「……ともあれ、法政科が出てきた以上は、あっちの仕切りが絶対 となるな」 小さく師匠が呟いた。

もとより、そのための専門組織である。先月亡くなったというゲリュオン・アッシュボーンの指名でもあるならば、この場の誰も否といえるはずがない。

ましてや、この女の在り方の異質さときたら。

見つめるだけで、身体中の血液が逆流するように感じた。オルロック・シザームンドの滴るような禍々しさとも、ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトの猛たけ々だけしいまでの優美さとも異なる、吸い込まれてしまうほどの冷たさと優しさが女の微笑には同居していた。

身体の内側から背骨を優しく撫でられる、そんな錯覚を想起させる女だった。

(.....蛇だ)

直感的に思った。

異種の生物と向かい合ったかのような、爬は虫ちゅう類るい的な冷たさと光沢。振り袖と呼ばれた不思議な衣装もその感覚を累乗し、何度となく脱皮する蛇をイメージさせる。

「……おいおい。よりにもよって法政科かよ」

「……手段と目的を取り違えた脱落者どもが」

フリューとオルロックが、それぞれに呟く。

このふたりも到底意見の一致しなそうな組み合わせだが、法政科という『時計塔の異端』を相手取ってはつい足並みを揃えてしまうらしい。

対して、化野菱理は気にする風もない。

書状を開き、

「遺言状にあるのは、三つだけです」

と、口を開く。

続けて、その中身を読みだした。

「一天使の名を問う」

かすかに口調が変わっていた。

かつての剝離城アドラの主──ゲリュオン・アッシュボーンその人を想起させた。自分が出会ったことはないし、この女が生前に出会っていたかも分からないのに、ひどく神経質でベッドから上半身だけを起こした老人の姿が目に浮かんだ。

「問われて答えられなかったものは、すべからく天使を剝ぎ取られ ねばならぬ」

当然のこととして、天使を剥がされる。

そんな奇妙な言葉が、剝離城のロビーをざりざりと引っ搔いてい く。

ざりざり、ざりざり、ざりざり、ざりざりとその音が聞こえる。 かほどに天使を集めた魔術師の言葉は、それ自体が呪文となって城 を目覚めさせるようだった。床からも壁からも天井からも、目には 見えない天使が泡のように浮かび上がらんとする錯覚が、どうして も消えてくれなかった。

「私の天使をつかまえたものを、遺産の相続者とする」

それきりで、声は止まった。

「.....それだけかい?」

と、尋ねたのはフリューだった。

垢じみた手で無精髭の生えた顎先を擦り、二階側にいる振り袖の 女──化野菱理へと尋ねる。

「ええ。特に期間も設けられていません」

うなずいて、菱理は書状を畳む。

振り袖もあいまって、そうすると遥か極東で交わされる詩文のようだった。恋文を詩にして送りあう風習を本か何かで読んだ気がするが、果たしてその衣装の国で合っているかは分からない。

「なお、ヒントはすでに皆様の手に与えられているそうです。招待 状をご覧ください」

「招待状?」

手にしていた招待状を、師匠が持ち上げる。

ついさっきまではなかったはずの金色の文字が、その招待状には 浮かび上がっていた。どうやら、それぞれの魔術師の書状にも同じ ような現象が起きているらしく、他人には見られぬよう確認してい た。

「それが皆様の〈天使名〉となります」

と、女が囁いた。

「……なるほど。この土地の魔力の波長に合わせて浮かび上がってるというわけか。シンプルだが応用の利きそうな術式だな」

感心したように、師匠が口にする。

好奇心が触発されたのだろう。こんなとき猫じゃらしを与えられた猫みたいな表情になることを、はたして本人が自覚しているのかどうか。封筒の文字を何度もなぞりつつ、かすかに目を細める。

「〈天使名〉か。ふむ、〈魔術名マジカル・モットー〉と似たようなものか」

一部の結社では、魔術師が世俗とは別の名前を持つことがある。

魔術と向き合う際、それ専用の名前を持った方がより純粋に臨めるとおおよそはそんな理由だそうだ。必ずしも自分自身の名前としてではなく、信じる摂理や座右の銘のようなものとして使うこともあると、講義では教えられていた。

これらの名前を、総じて〈魔術名マジカル・モットー〉というら しい。

もっとも、時計塔に関係するような魔術師の家ではその多くが生まれたときから魔術に身を捧げることが決まっているわけで、あまり一般的ポピュラーな事例ではないらしかった。

「また、この書状とは別に、皆様の〈天使名〉と同じ名前の部屋 を、宿泊に使うよう言付かっております。部屋にプレートがつけら れていますので、確認してお使いください。宿泊の間の食事などゲ リュオン家の従僕が用意してくれるそうです」

先の執事が一礼する。

ゲリュオン氏が死んだ後も従僕は残っているらしい。深い忠誠心のゆえか、単に契約が残っているのかは分からないが、それも自分には背筋に氷をあてがわれた心地しかしなかった。

「──相続者が決まるまでは、私もこの城に泊まらせていただく予定です。どうぞよろしくお願いします」

ゆるりと、化野菱理は頭を下げた。

途と轍てつもなく重い城門が、背後で閉じたような気がした。

*

――そして、時間は今に至る。

室内である。

薄ぼんやりと蠟ろう燭そくの灯がともり、やはり天使尽くしの室内を照らしあげていた。壁にかかった絵画もクローゼットの彫刻も棚に置かれた磁器人形ビスクドールも、果てはランプの硝子ガラスカバーさえ天使の姿をしている。亡くなったゲリュオン・アッシュボーン氏の天使趣味はなるほど徹底していたらしい。

自分は、そんな部屋のベッドに腰かけていた。

あれから数時間ほど城を散策した後、さきほどルヴィアと激突した廊下から、やっと正しく自分たちの〈天使名〉──Mihaelのプレートがかかった部屋を発見して、一息ついていたところだった。

「―私の天使をつかまえたものを、遺産の相続者とする、か」

と、ソファに座った師匠が改めて呟く。

コートとジャケットを脱ぎ、よほど足が疲れたのか太ふと股ももを揉みながら、シガーケースから取り出した葉巻をくわえている。 貴重な調度も何も知ったものかと、独特の香りのする煙が部屋を蹂 じゅう躙りんしていく。

多分怒るべきところなのだろうが、自分はほっとしてしまった。

その香りのせいで、いつもの師匠のアパートに戻ってきたような 気がしたからだった。

内心を悟られないようにゆっくりと息をして、ぱちんと自分の頰を叩く。その音で師匠が振り返ってから、自分は口を開いた。

「……師匠には、その言葉の意味、分かります?」

「さて、今のところだと候補が多すぎるな。なにしろこれだけ天使 に溢あふれかえっている」

師匠の言葉ももっともだ。

ロビーやこの部屋もそうだが、途中の廊下や階段にも天使は所せましと並んでいた。真面目に数え上げていけば、簡単に百を超えて

しまうだろう。剝離城全体となればどれだけの天使がいるのか、 ちょっと想像もできなかった。

「そうでなくとも、天使なんて題材自体用いられた歴史と地域が広すぎるんだ。これだけ象徴シンボルを集めれば、むしろ焦点がぶれそうなものだがね。はたして、どこからどこまでが魔術に関与して、どこからどこまでが単なる趣味なのか判別が難しい」

「──イッヒヒヒヒ! そうやって適当にうんちく垂れてれば、自分の無能を誤魔化せるもんな!」

右手のあたりから、声がする。

今度は師匠も放っておかなかった。

「グレイ、そろそろアッドを出してやってくれないか」

「はい」

その申し出に、第三の声は大きく狼狽うろたえたのである。

「ちょ、ちょっと待てよグレイ! 俺を売る気か!」

反論は聞かず、自分は右手を打ち振った。

がちんと固フ定ッ具クの外れる音がして、フード付きマントから ごろりと床に転がったのは、鳥かごのごとき長細い『檻おり』だっ た。

その『檻』の中に、いくつものパーツが組み合わさった直方体の 匣が入っていたのだ。ロンドンに来て知ったのだが、ルービック キューブというパズルに似ている。しかし、あれよりも遥かに精緻 で複雑に絡み合った匣で、表面には一際派手な目と口が彫刻されて いた。

その目がぎょろりと動いた。

「お、おまえ! 仮にも十年以上一緒に過ごしてきた友達をなんだと思ってるんだ! 友達少ないんだから、もうちょっとぐらい庇かばうとか、いやせめて躊ちゅう躇ちょぐらいはするのが人情ってもんだろうが! いや今からでも遅くない反省しながら俺を匿かくまえ匿ってくれ匿ってください!」

と、口までが忙しく動く。

これが、やたらと口を挟んでいた第三の声の正体だった。

一アッド。

自分が故郷で受け継いだ、一種の魔術礼装である。

一種のというのはかなりの変わり種だからだ。自分はさほど多く の魔術礼装を見てきたわけではないのだが、自分で考えて喋る礼装 というのはほとんど類例がないらしい。

生き物のようにというよりも、ロンドンに来てから知った3Dアニメのようだ。自分からすれば生まれてすぐ目にした相手で──あ、認めるのは癪しゃくなのだが確かに最初の友達なので──まったく奇妙さを覚えないのだが、初めて目にしたときの師匠はひどく驚いたあげく、危うく分解しかねない勢いでわなわなとアッドに向かい合ったものだった。

今は、こうだ。

むんずと『檻』の上面をつかむや、カクテルのシェイカーさなが ら上下に思い切り揺さぶったのである。

「あぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃ!」

振り回されて、『檻』の内側に何度もぶち当たり、アッドが悲鳴 をあげる。

直方体の匣がぐるぐると目を回し、十分に懲らしめられたと判断 したところで、師匠はこちらへと放り投げた。

「よろしい。まあ、城の細かいところは私と君で調査しつつ埋めて いくことにしよう」

「……拙せつも一緒に、ですか?」

「君がいないと私の護衛はどうするんだ。言っておくが、あの中の

どの魔術師と戦うはめになっても死ぬのは私ひとりだぞ」

胸を張って、無力ぶりをアピールする。確かにこちらの戦力分析でもそうなのだが、少しぐらいは誤魔化して欲しい。

顔にそんな内心が出ていたのか、

「余計な見栄を張って失敗するのは若者のうちだけで十分だ」

と、師匠が口にした。

一若者のうち。

それは、師匠にとっていつのことだろう。青春という言葉は拙せつにはまるで実感できないが、師匠にはそんな時代があったのだろうか。ゆるゆると葉巻の煙を吐き出している師匠の姿からすると、最初からそう生まれたとしか思えなくて、なんだか悔しいような心持ちさえした。

だから、なのかは分からないけれど。

ふと、訊いてみる気になった。

「師匠は、どうしてこの剝離城の遺産が欲しいんですか? エルメロイの家には多くの借財があると聞きましたが、その返済のためですか?」

「はっきり聞くな」

苦笑して、師匠が片眉をあげる。

短くなった葉巻を指でなぞり、かすかに目を細める。

「もちろん返済のためにも欲しい。だが、ここの遺産が噂通り魔術 刻印に関わるものならば、私とライネスにとってはもっと重要な意 味を持つことになるな」

「ライネスさんに?」

ここで、あの義妹の名前が出るとは思わなかったので、少し大きな声が出てしまった。

しかし、もとを辿れば、彼女が依頼したからこそ師匠はこの城に

来ることになったのではないか。多くの魔術師との避かい逅こうや 遺産騒動のせいですっかり忘れてしまっていたが、突然話題が舞い 戻ってきて、目を白黒させてしまった。

「つまるところは、こんな私がエルメロイの名を継ぐことになった 理由だよ」

師匠が葉巻を灰皿に置く。

役目を果たし終えた細い葉巻から名残のような煙がこぼれて、すぐに消えた。今の話もひとまずはそれで終わりということらしかった。

「一さあ、まずは寝よう。いささか今日は疲れすぎた」

こりこりと肩を回し、そのままソファに横たわる。

「師匠?」

「レディ。君はベッドを使いたまえ。従僕用の部屋に行かれても困るし、私はソファの方が落ち着く」

言って、返事を待たずに師匠は瞼を閉じた。

シャワーも浴びず、ジャケットを脱いだだけの姿である。それこ そさっきの義妹ライネスが見たら目に殺意を宿しそうなだらしない 光景だが、自分はもっと別の気持ちで声をかけていた。

「でも、師匠」

言いかけて、やめた。

そのときには、もう師匠は寝息をたてていたのである。

案外ソファの方が落ち着くというのは嘘でないのかもしれない。 研究室やアパートでしょっちゅうソファで寝ころんでいる姿は自分 も発見している。アパートに至っては携帯ゲーム機を手にしたまま 寝落ちしていることもあり、そのたび自分を呆れさせたものだ。

でも、今は一

Г......

少しだけ黙ったまま、師匠の横顔を見下ろした。

いつも顰めているせいか、眉間には浅く皺が刻まれている。今の年でそうなのだから、もっと時間を経ればまるで傷みたいに深く抉えぐられるに違いない。年をとるとは傷ついていくことなのだろうか。

身体も、もっと見えないところも。

手を伸ばして、頰に触れる直前で止めた。

ほんの数センチの距離を残して、どうしても触れることができなかった。

「ひひ! どうしたグレイ! そんな横顔ばっかり見つめて惚れでもしたか!」

Г......

答える必要は感じなかった。

片手で檻を握って、思い切りでたらめに振り回す。

「はぎゃああああああああああああああああああああああり」」

哀れな悲鳴を聞いて、やっとすっとした。

「……感謝します」

と、ソファへ素直に頭を下げる。

それからベッドに潜って毛布を引っ張ると、かすかに葉巻の香りがついていた。けして嫌いな香りではなかった。

意識が暖かな暗闇にひたされるまで、数分とかからなかった。

朝になって、自分は師匠より少しだけ早く起きた。

着替えてからカーテンを開け、朝日を浴びる。太陽は好きではないが、こういう環境では数少ない日常の象徴でもあった。陽光を身体に取り入れるようにゆっくりと呼吸をした後、鏡台に置いていたアッドを持ち上げた。

こちらはくるりと回して、右手の袖へと引っ込める。おおよそマントの内側──右手の肩から肘のあたりの固定具に塡はめているのだけど、見かけではまず分かるまい。デリンジャーか何かの隠し持ちみたいだなと、よく分からない感心を師匠から受けたこともあった。

振り向くと、ソファに横たわった師匠の手がうにうにと動いていた。

もう一度、少しだけ呼吸を整えてから、

「……師匠、起きましたか?」

「うあ」

「……着替え置いときますので」

これも、いつものやりとりだった。とはいえ同じ場所で寝ていたことは少ないので、やっぱり少しだけ照れくさい。

動いてる手のあたりにスーツケースから出した衣服だけおくと、ソファに横たわって目をつぶったままもそもそ着替えはじめた。多分ろくに意識もないのだろう。特に気にせず視線だけを外してほかの準備をすませておく。葉巻の管理だけは自分でしたがるので、こういう場合の仕事は精々ハンカチや小物の持ち運びぐらいだ。「小学校プライマリースクールの子供かよ」とはアッドの弁だが、拙せつも同じように思う。

おおよそ終わったところで、声がかかった。

「おはよう。レディ」

ようやっと目が覚めたらしい。

いかにもまだ眠そうな様子で師匠が上半身をもたげ、目をこすっていた。

「……襟が曲がってます」

寝ぼけた師匠のシャツの襟元を直し、長い髪をブラッシングしてから、部屋を出る。

自分たちに提供された客室は、剝離城二階の通路に並んだ部屋の中央に位置していた。

構造はさほどややこしくないのだが、通路の幅にしろひとつひとつの部屋にしろとにかく広いので、こちらのサイズ感が狂わされる。しかも壁画やら彫像やら相変わらずの天使ずくめであった。この城に来て以来、天使の概念は師匠が言うところのゲシュタルト崩壊を起こしており、無限にループしているような錯覚にさえ襲われる。

アッシュボーン家の従僕に言われていた通り、二階の広間近くへ 移動するとアッドがぶるりと震えた。

「おお、なんだこの美う味まそうな匂い!」

匣には鼻はなかったはずなのだが、一体どこで匂いを感知しているのだろう。

だが、確かにいい匂いがしていた。ぐうとこちらの胃が鳴ってしまうような食欲をそそる香りだ。それもけして単調ではなく、さまざまな香気が渾こん然ぜん一体となったオーケストラのようなそれであった。

扉を開くと、すぐに正体は分かった。

「──ごきげんよう。ロード・エルメロイII世様」

広間の中央を、二十人は席に着けそうな巨大な花か崗こう岩がん

のテーブルが陣取っている。

そのすぐ側で佇んでいた化野菱理が、こちらを見つけてゆるりと 会釈したのである。

「昨日はきちんとしたご挨拶もできず、申し訳ありません」

「いえ、お気になさらず。一おはようございます。ミス化野」

ぴしりと、神経質的なほどの一礼を師匠が返す。

菱理は朱唇をほころばせた。

「菱理と呼んでくださってかまわないのに」

その微笑だけで、どれだけの男が魂までも捧げるだろうか。極東 由来のミステリアスな風貌は、男性のみならず女性の興味も搔き立 てる。極彩色の折り紙を重ねたような美しい振り袖も、女の甘い秘 密をさらに幾重にも隠すかに見えた。

よくよく見れば、どうもその振り袖の意匠は手描きのようで、なおさら妖しくこちらの胸を騒がせる。日本という国は紙と木で家をつくるような変態国家だと師匠は言っていたが、ひょっとすると魔術師以上の神秘に満ちているのではあるまいか。たとえばニンジャとか。

「あいにく臆病者でして。美しい女性は苦手なんですよ」

「あら、可愛らしい従者をお連れなのに」

ちら、とこちらに視線をくれた。

思わず萎縮して、フードを引き下げてしまう。もちろん自分は美しい女性が苦手なのではなくて、知らない相手がすべて苦手なのだけど。

「ひょっとして、室内なのにフードを被らせてるのは、この可愛らしい顔を隠すため?」

「その通りですよ。私が見たくないんです」

この返事は想像しなかったのか、おかしそうに菱理は笑い出し

た。

「本当に飽きない人。時計塔に戻ってからもゆっくり話してみたい わ」

「ご勘弁を。法政科と仲良くしていたら、ますます肩身が狭くなり ます」

「あなたならそんな評判は気にしないでしょう。幾多の新世代 ニューエイジを率いる、時計塔の寵児だもの」

「ただ厄介払いされてるだけですよ。でなければ現代魔術科なんて 任されるものですか」

小さく、師匠が咳せき払いする。

時計塔での師匠の立場を、いろいろな意味であらわすやりとりで はあった。

それから、テーブルを確認する。

菱理の前に置かれたのは、陶磁器の皿に漆塗りの碗と箸チョップスティックだ。

皿には何かのソース出汁で煮たと思しい魚が載り、碗には炊かれ たばかりのご飯がよそわれ─いわゆる和食が揃っていたのである。

「どうやら、私たちの席はあちららしいな」

師匠がディナーテーブルの向こう側へと視線をやる。

エルメロイの家紋が刺し繡しゅうされたナプキンの前に、焼き上げられたばかりのトースト、品よく殻を剝かれて銀食器におさまったゆで卵、豚の血を練り込んだ黒ソーセージにベイクドビーンズが配置されている。

つまるところは、伝統的なイングリッシュ・ブレックファストである。

さきほどの香りの正体が、これらだった。

ほかにも数々の食事が席ごとに用意されており、どうやら招待客

それぞれの好みや出身に合わせたものらしい。

英国料理が評判を落としたのは、十九世紀末から中産階級に雇用された万能メイドメイド・オブ・オールワーク――つまり田舎からかき集められた娘たちが至極当然ながら料理の腕までは吟味されず、結果として国民全体の料理のハードルが下がってしまったことに端を発しているそうだが、さすがアッシュボーン家の従僕はそんな枷かせと無関係のようだった。

「ずいぶん、こちらのことを研究しているものだな」

ぐるりとテーブルを回りながら、師匠がこぼす。

好みや出身に合わせているというのは、もちろん相手を知らねばできぬことだ。死ぬ前のゲリュオン・アッシュボーンはこちらのことをどこまで把握していたのだろう。

何を考えて、あんな招待状や〈天使名〉を送ったのだろう。

そんな感想を抱いているうちに、

「一ほう。これは見事ですね」

「──おお精進料理やんか! 炒いりなめこにすり豆腐までありよる! ワラビはこのへんでも取れるけど、うどやタケノコまでよく集めよったなあ!」

次々と、別の招待客もやってきた。

「ハイネ兄さん! こっちで一緒に飲もうや!」

さっさと入ってきて、自前の酒瓶を持ち上げたのは時任次郎坊清 玄である。眼帯に極東の法衣というエキセントリックな組み合わせ も、二度目だとなんだか馴染んで見えた。

というか、ハイネやロザリンドも一緒に来たあたり、知らないうちにずいぶん仲良くなっていたらしい。

「と、申しましても朝から酒類は」

「いやいや、わいは兄さんが気に入ったんや。ほれ一杯」

「……まあ、約束しましたしね」

微苦笑して、ハイネが受け取る。

ぐいと一口で呷あおった青年に、眼帯の山伏は顔を輝かせた。

「お、いける口やな。妹さんは……般若湯とはいかんな。ちょっとお手伝いさん、この子に紅茶を」

近くで待機していた従僕を呼び、紅茶を淹いれさせる。

「.....ありがとう」

受け取ったドレスの少女が、小さく会釈した。

くぴくぴと飲んで、ほんの少し眉を寄せた妹に、兄のハイネは優しく笑った。

「ロザリンドにはまだ早かったかな」

「の、飲めます!」

ぎゅっとティーカップを握りしめて主張する。

「分かってるとも。だから少しミルクを足させてくれないかな? その方が淑女レディらしい飲み方だからね」

「.....本当?」

ロザリンドが首を傾げる。そうすると純白の小鳥のように映る。

そのまま、なぜかこちらを見上げてきたのだった。

「ロード・エルメロイII世様。本当ですか?」

「つ?!」

まさかの質問に、師匠が胸を叩く。

むせかえりそうになったのをなんとかこらえ、咳払いで取り繕ってから、居住まいを正してうなずいたのである。

「本当だともレディ。お兄様の言う通りだ。ミルクティーは紳士と

淑女の飲み物だから、安心していれたまえ。なるだけたっぷりと入れるといいぞ!

「うん! ありがとう!」

にっこりと笑って、ロザリンドがミルクを入れられたカップを受け取る。

今度は表情を曇らせず、実に美お味いしそうに味わっていた。

そんな様子に、自分もちらと感想を口にした。

「……時々思うのですが、師匠は子供に甘いですよね」

「……ノーコメントだ」

視線をそらして、師匠が言う。

ほんのわずかだが耳が赤らんでいた。分かりにくい照れを指摘することはせず、入り口へと振り返る。

「お、酒じゃねえか。それも上物の匂いがするぞ」

ひくひくと獅し子し鼻ばなをうごめかせ、フリューが入ってきたのであった。

「やらへんで! 日本から持ってきた貴重品なんやから!」

「あーあー、だったら占ってやるから寄越せ」

腰に巻いていたベルトを外した途端、食卓にぎょっとした空気が よぎった。

そのベルトには十数本ものナイフが並んでいたのである。いかに も使い込まれたという感じで木製のグリップは色褪せており、反面 するりと抜いた刃は恐ろしいほどに磨き抜かれていた。

「なるほど、専門は占星術だったな」

と、師匠が呟いた。

その柄に刻まれているのが占星術の記号であると指摘したのだ。 勉強不足の自分でも、さすがに黄道十二宮の記号ぐらいはなんとか 分かる。

「そうともさ。普段なら大枚積まれても数ヶ月は待ってもらうが、 今日このときは大安売りだ。涙流して感謝しとけ」

カードのように、ナイフがさばかれていく。

ジャグリングというよりも、それはタロットを交ぜて運R命OのT 輪Aを回す占い師の姿を想起させた。

「さてお客様。名前と生年月日を……ってこいつは魔術師同士じゃ御法度だな。星と刃にすべてを任せて、まずは運命さだめをごろうじろ!」

四本のナイフが跳ね上がった。

まるで星座を象かたどるような、自然ではありえない配置で中空から反転。しかし、それは花崗岩のテーブルに落ちてくるより先に、ことごとく別のものへと突き刺さったのだ。

鉢である。

先にハイネを襲った清玄の飛鉢法が、今度はナイフの行き先を阻 んだのだ。

顔をしかめた眼帯の山伏は、恨めしそうに酒瓶をつきだした。

「勝手に占われるんは堪忍や。酒なら分けたるから、放っといてく れ」

「へへ、こいつはありがたい」

拝むようにして、フリューが自分の席のグラスで酒を受け取る。

とくとくと注がれる白濁した液体はあまりワイングラスと似合わないが、野卑で芳ほう醇じゅんな香りは確かに食欲をそそるものだった。嬉しそうに口にしたフリューがぐいと顎元を擦こすりあげて、ぷはあと息を吐き出す。さらには酒瓶をとりあげて自分のグラスに入れ始めるにあたり、さしもの清玄が眉をつりあげた。

「ちょ! お前どんだけ飲むつもりなんや!」

「ケチケチすんなよ。若いのに禿はげるぞ」

「禿はげと関係あるかい! ええから返せ!」

またまたくだらない争いを始めたふたりをよそに、

「……まったく野蛮ですわね」

との感想が、背後からこぼれた。

菱理の妖美な声音とは異なる、開きかけの蕾つぼみにも似た可憐 さと優美さを兼ね備えた響きであった。

その名を、師匠が呼んだ。

「ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルト」

「お隣、よろしいかしら」

「……どうぞ」

すいと席を指さされたのに、師匠が渋々うなずく。そちらのナプキンにエーデルフェルトの家紋が記されていては断りようもない。

少女の後ろには、初めて見るモヒカンの男が佇んでいた。

身長は二メートル近く、肩幅もその半分ほどありそうだった。あまりにも目立つ髪型とサングラスのあげく、上下もびしりと黒のフォーマルで決めており、これで機関銃か何かを持てばマフィア映画も裸足はだしで逃げ出しそうな迫力を醸し出している。

その視線に気づいたのか、ルヴィアが紹介した。

「こちらの従僕はひとりだけ……ということでしたので。仕方なく ほかのは帰して、第二従僕のクラウンだけを連れてきましたの」

「道化クラウン? あまり似合わない名前だな」

「自分では名前は決められませんもの」

さらりと言って、ルヴィアは髪をかきあげた。

......まあ、彼女ひとりではあの縦ロールをセットするのも難しい

だろう。

案外、ルヴィアほどの魔術師なら、それも魔術でどうにかしてしまうのかもしれないが。

それから、師匠はもう一度広間の入り口へ目をやった。

「オルロック老は、来られないか」

一組だけ、オルロック・シザームンドと助手の少年だけは朝食の場に来ていなかった。彼らの分の食事もテーブルには用意されてない。先にアッシュボーン家の従僕へ言って、自分の部屋で食事を摂とっているということだろう。

自分もそうだが、師匠もあの老人は苦手にしていたものか、少しだけ肩の荷が下りたような顔でナイフを手に取った。

切り取った料理を口に運び、ぱちぱちと瞬きする。黒ソーセージといいベイクドビーンズといい塩加減も火の通し方も絶妙で、思わず唸らされるほどの出来映えであった。クリシュナもかなりの腕だが、さすがにこれは食材の面で差がつきすぎている。ほろほろと舌の上で崩れる挽ひき肉には胡こ椒しょうの辛味がぴたりと似合い、ベイクドビーンズに添えられた芋がまたほくほくとしてたまらないのだ。

堅めに焼かれたパンとかすかに甘いバターもそれらの組み合わせ を祝福するかのようで、ほとんど無意識のうちに手が伸びてしま う。グラスの水には炭酸が立ち上っていて、なおさらに食欲を刺激 した。あまりの多幸感で、師匠の頰さえほころんでしまうほどだっ た。

しかし、そんな時間もせいぜい十分足らずのこと。

誰もがそれなり以上に満足して食事を進めていたとき、

「―ひとつ、よろしいかしら」

と、ルヴィアがいきなり切り出したのだ。

魔術師たちの視線が、少女へと吸い寄せられた。居並ぶ熟練の魔術師たちの中、この少女は不可視の引力でも発しているようだった。

「私たちの〈天使名〉についての示唆を、昨夜ロード・エルメロイII世様からご教授いただきましたの」

「っー!」

ぎょっと目を剝いた師匠へ優美に微笑み、ルヴィアは続けてこう口にしたのだ。

「シェムハムフォラエによるものだと、言ってましたわね」

その言葉に、何人かが息を止め、何人かはやはりと言った感じで うなずいた。

ちら、と少女の視線が師匠の方へ動く。これで貸し借りゼロです わよ、とその目が告げていた。

ため息をついた師匠へ、こっそりと尋ねた。

「......あの、師匠。シェムハムフォラエというのは一体何なんです?」

さすがにたまりかねて口にしたのだが、黙ったままの師匠の代わりに、別の方向から助け船が出された。

「……カバラの伝承でな。おおよそは、名の集合シェムハムフォラエって意味だ」

ぞりぞりと無精髭をさすって、ちょうど近くに座っていたフリューが答えてくれたのだ。

「名前の、集合?」

「つまるところは七十二の天使さ。もともとは出エジプト記。旧約 聖書でモーゼが海を開いたときの文章さ。確か十九節から二十一節 だったかの三文がもとのヘブライ語だと全部七十二文字でできてい てな。一節から一文字ずつ、全部で三文字組み合わせることで、全 部で七十二の天使の略称を見出したんだ。まあ語呂合わせみたいな もんだが、もともとカバラは語ノ呂夕合リわコせンや数字遊びゲマ トリアに長けているし、この段落はモーゼ最大の奇蹟を記述した部 分なんでな。いろんな意味で特別扱いされてるわけだ」 「……七十二の、天使」

どうやら、そこまでは魔術師たちには周知の事実らしい。

シェムハムフォラエという名前を与えられただけで、場の全員が おおよその理解に辿り着いたらしかった。

「……大天使ミカエルは多くの伝承に出てくるが、ミハエルは珍しい。これがセットとなるとシェムハムフォラエぐらいしか思い当たらなかったんでな」

これは自分だけに聞こえる囁き声で、師匠が付け足した。

視線をあげ、しんと静まりかえった食卓で、仕方なさそうに続けたのである。

「アッシュボーンの遺言状で問うている天使というのは、おそらくこの城のどこかに隠されているんだろう。私たちの〈天使名〉にシェムハムフォラエを使ったということはこの名前自体が何らかのヒントになっている可能性が高い。シェムハムフォラエの天使は黄道十二宮やソロモン七十二の悪霊にも応用が利く。もともとがカバラなのだから暗号や謎かけにはもってこいだ」

「……ちぇ。そこまでは辿り着いとったんか」

耳をほじりながら、清玄が口を開く。

実際にこの山伏が同じ推理をしていたかは分からない。しかし、 眼帯の若者は続けてこんな提案を切り出した。

「じゃあ、みんなの〈天使名〉を公開といかへんか?」

じわ、と緊張が空気に混じった。

さも、そんな雰囲気には気づかぬように、胸元の法螺貝をのんき にいじりながら清玄はにっこりと笑う。

「現状やとヒントが少なすぎるやろ。情報公開した方がスムーズに進むんと違ちゃう? どうせ〈天使名〉なんて部屋のプレートにかかってるんやから隠す意味もほとんどないやろ」

沈黙は、場にいる者たちの葛藤をあらわしていた。

確かに情報は欲しい。清玄の言う通り、部屋のプレートを調べれば〈天使名〉などすぐ判明するのだから──自分と師匠がそれで大変な目にあったわけだから──さして隠しておく情報とも思えない。

だが、一方で議論は別だ。

先のシェムハムフォラエもそうだが、迂う闊かつに思いつきを口にすれば、遺産を獲とられる可能性を上昇させることとなる。逆に自分が遺産を得る可能性もあがるかもしれないが、メリットとデメリットを天秤にかけて、倒れるのはどちらの方か。

現状、師匠と自分に判明している〈天使名〉はふたつ。

ロード・エルメロイII世がMihaelミハエル。

ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトがMichaelミカエル。

ならば、残った魔術師たちは─

「一残念ですが、私は退席させていただきます」

「あ、お兄様」

ハイネが立ち上がり、その後をロザリンドが追ったのである。

「ま、そういうこったな」

「私も馴れ合いはここまでがよろしいかと思います」

フリューとルヴィアも、食事を終えて同じように退席していく。

あちゃあと顔を覆った清玄自身も、やがて諦めて食卓を辞した。 後には、ぞろりと狼たちが牙を剝いたかのような──こちらの芯まで も凍りつかせる敵意だけがいつまでもわだかまっていた。

もう一度、師匠が深くため息をつく。

「仲良くケーキを切り分けようとする者は、さすがにいないか」

「あらあら、残念ですわね」

もうひとりだけ残った菱理が、微笑を湛える。

遺産争いに関係ない管理人の立場のためか、その笑みは透徹した 賢者にも似て、同時に途方もなく淫いん靡びだった。 夜が更けてから、彼は行動に移った。

あれからほとんどの魔術師たちがそうしたように、夕食は部屋に 持ってきてもらって済ませている。同時に、部屋の四方へ防護用の 結界を敷いて乱入者への警戒を怠らない。慎重にそれらの結界の動 作を確かめてから、彼はくるりと振り返った。

「.....お兄様?」

眠そうに目を擦った少女が、ベッドから呼びかけてきたのである。

「ああ、ロザリンド。起こしてしまったかな?」

د له.....

かすかにうなずいた少女に近づき、ハイネはその頭を優しく撫でた。触るか触らないかぐらいの繊細さで柔らかな金髪を梳くしけずる。くすぐったそうに目を閉じた少女に目を細め、青年はできるかぎりの誠意と決意を込めて、身体を引き剝がす。

「少し出かけてくる。後は任せていいかな?」

「分かりました」

こくりとうなずいて、少女はもじもじと口を開いた。

「.....あの」

「ん?」

促すように、青年が視線で示唆した。

「やっぱり、ほかの魔術師の方と戦いになったりするの? あのロード・エルメロイII世様とも?」

その言葉に、淡く青年は唇をほころばせた。

「あの方が気に入ったのか」

「……お、お兄様にはまるで及びませんけれど」

きゅっと唇を引き結んで、ロザリンドがぷいと視線をそらす。

そうすると、やはり小鳥に似ていた。簡単に手た折おれてしまい そうな細い首や肢体、真っ白なドレスは未成熟な翼のようで、あまりにも儚はかない。

だからこそ、誰よりも愛しい妹だった。

「大丈夫だよ。私は飛んできた火の粉を払うことしかしないし、 ロード・エルメロイII世も賢明な方だ。そうそう剣吞なことにはな らないとも」

あくまで穏やかに告げて、ハイネは部屋を出た。

石造りの廊下は静かだった。

外に面しており、時折吹き込む風は初秋にはいささか厳しい冷え 込みだった。単純な温度の問題ではなくて、こちらの魂まで侵食す るかのような異質な分子がそこには混じっていた。

魔術の気配やもしれなかった。

「.....ああ」

と、ハイネは呟き、歩き始めた。

剝離城は基本的には二階建てで、ぐにゃりと歪わい曲きょくした 構造になっている。

上空から俯ふ瞰かんすればあたかも東洋の勾まが玉たまか……あるいは丸まった胎児のように見えるだろう。胎児を守るように城壁が伸びて、その腕のあたりは広い前庭になっていた。

ハイネは、その前庭へと出て、とある方向へと歩を進める。

迷いのない足取りだった。

〈天使名〉を方位に変換したのである。

あの食卓で話題になったシェムハムフォラエ─名の集合とも解釈される七十二の天使は、そのまま黄道十二星座へと変換できる。もともと黄道十二星座は太陽を基準とした方位に換算できるのだが、七十二の天使を使えばさらに細かく、ひとつの天使につき五度刻みの方位を指定できるというわけだ。

シェムハムフォラエ七十二天使、およびその支配宮

No	天使名	支配宮	No	天使名	支配宮
01	ヴェヘイア - Vehuiah(VHV)	獅子宮	37	アニエル - Aniel(ANI)	宝瓶宮
02	イェリエル - Jeliel(YLY)	獅子宮	38	ハアミア - Chaamiah(ChOM)	宝瓶宫
03	シタエル - Sitael(SIT)	獅子宮	39	レハエル - Rechael(RHO)	宝瓶宮
04	エレミア - Elemiah(OoLM)	獅子宮	40	イヒアゼル - Ihiazel(YYZ)	宝瓶宫
05	マハシア - Mahasiah(MHSh)	獅子宮	41	ハハヘル - Hahahel(HHH)	宝瓶宫
06	レハヘル - Lelahel(LLH)	獅子宮	42	ミカエル - Michael(MIK)	宝瓶宫
07	アカイア - Achaiah(AKA)	処女宮	43	ヴェヴァリア - Vevalieh(VVL)	双魚宮
80	カヘテル - Cahetel(KHTh)	処女宮	44	イエラヒア - lelahiah(YLH)	双魚宮
09	ハジエル - Haziel(HZI)	処女宮	45	セアリア - Sealiah(SAL)	双魚宮
10	アラディア - Aladiah(ALD)	処女宮	46	アリエル - Ariel(ORI)	双魚宮
11	ラウヴィア - Laviah(LAV)	処女宮	47	アサリア - Asaliah(OShL)	双魚宮
12	ハハイア - Hahaiah(HHO)	処女宮	48	ミハエル - Mihael(MIH)	双魚宮
13	イェイアゼル - Jeiazel(IZL)	天秤宮	49	ヴェフエル - Vehuel(VHV)	白羊宮
14	メバヘル - Mebahel (MBH)	天秤宮	50	ダニエル - Daniel(DNY)	白羊宮
15	ハリエル - Hariel (HRI)	天秤宮	51	ハハシア - Hachasiah(HChSh)	白羊宮
16	ハカミア - Hakamiah(HQM)	天秤宮	52	イマミア - Imamiah(OMM)	白羊宮
17	レヴィア - Leviah(LAV)	天秤宮	53	ナナエル - Nanael(NNA)	白羊宮
18	カリエル - Caliel(KLI)	天秤宮	54	ニタエル - Nithael(NITh)	白羊宮
19	レウウイア - Leuuiah(LVV)	天蝎宮	55	メハイア - Mebahiah(MBH)	金牛宮
20	パハリア - Pahaliah(PHL)	天蝎宮	56	ポイエル - Poiel(PVI)	金牛宮
21	ネルカエル - Nelchael(NLK)	天蝎宮	57	ネマミア - Nemamiah(NMM)	金牛宮
22	イエイアイエル - Leiaiel (YYY)	天蝎宮	58	イエイアレル - Jeialel (YYL)	金牛宮
23	メラヘル - Melahel(MLH)	天蝎宮	59	ハラヘル - Harachel (HRCh)	金牛宮
24	ハフイア - Chahuiah(ChHV)	天蝎宮	60	ミズラエル - Mizrael(MTzR)	金牛宮
25	ニライハ - Nithhhaiah(NThH)	人馬宮	61	ウマベル - Umabel(VMK)	双児宮
26	ハアイア - Haaiah(HAA)	人馬宮	62	イアヘル - Jahhel (IHH)	双児宮
27	イエラテル - Jerathel(YLTh)	人馬宮	63	アナウエル - Anauel (ONV)	双児宮
28	セエヒア - Seehiah(AhAH)	人馬宮	64	メヘキエル - Mecheiel(MChI)	双児宮
29	レイイエル - Reliel(RYY)	人馬宮	65	ダマヒア - Damabiah(DMB)	双児宮
30	オマエル - Omael(AUM)	人馬宮	66	マナケル - Menkiel (MNQ)	双児宮
31	レカヘル - Lecabel(LKB)	磨羯宮	67	エイアエル - Eiael(AIO)	巨裝宮
32	ヴァサリア - Vasariah(VShR)	磨羯宮	68	ハブイア - Chabulah(ChBV)	巨響宮
33	イエヒア - Jechujah(YChV)	磨羯宮	69	ロケル - Raehel (RAH)	巨餐宮
34	レハヒア - Lehachiah(LHCh)	磨羯宮	70	イァバミア - Jibamiah(IBM)	巨裝宮
35	カヴァキア - Chauakiah(KVQ)	磨羯宮	71	ハイアイエル - Haiaiel(HYY)	巨裝宮
36	メナデル - Monadel(MND)	磨羯宮	72	ムミア - Mumiah(MVM)	巨態宮

剥 アリエルの間 2 (ハイネ) F 離 城 ア K ミハエルの間 2 (エルメロイ) F 見 倉庫 厨房 取 5 义 2F アリエルの間 2 (ハイネ) F 1 ミカエルの間 F (ルヴィア) ミハエルの間 2 (エルメロイ)F 客周 倉庫 大広間 食堂 城門へ→ ミカエルの間から 宝瓶宮の方角 ミハエルの間から 双魚宮の方角 アリエルの間から 双魚宮の方角

そこまで分かれば、自らの部屋から〈天使名〉の方角に歩いてみればいい。

彼の〈天使名〉はArielアリエル。

双そう魚ぎょ宮きゅうに属し、おおよそ明かす者というほどの意味を持つ天使である。カバラのみではなく、たとえばミルトンの『失楽園』などにも姿をあらわす比較的有名な天使である。必ずしも天使としてではなく、シェイクスピアの『テンペスト』では嵐の精霊として登場していたりもする。それゆえ解釈できる幅も多岐にわたり、ロード・エルメロイII世がシェムハムフォラエを持ち出さなければ、方位への変換に気づくまでもう少し時間がかかったろう。

──『ですが、こちらの部屋の〈天使名〉はMichaelミカエルのはずですが』

申し訳ないが、昨夜のルヴィアゼリッタとロード・エルメロイII 世のやりとりも聞かせてもらっていた。ふたつの角度が分かるな ら、後は交点を探せばいいだけだ。

外には、月が出ていた。

満月である。

やがてその月光が鬱うっ蒼そうと茂った木の葉に隠され、前庭は 森に変じた。

ハイネは止まらなかった。低木の枝も気にせず、ただ真っ直ぐ歩を進めていく。イスタリ家で特別にあしらえたスーツはこの程度で傷つくことはない。

さらに数十メートルほど進んだところで、ぶるり、と何かが震えた。

「ここか」

足を止め、ハイネは視線をあげた。

台座が置いてあった。

天使かどうかは分からない。あちこちが台座ごと砕けていて、かろうじてそこにもともとは人間大の彫像があったらしいとしか分からないほど、徹底的に破壊されていた。

「.....ん ı

すぐ、ハイネがスーツの懐へと手を入れる。取り出した招待状が 淡い光を放っていた。昨日〈天使名〉を浮かび上がらせたときと同 じように、そこには新たな文字が現れていたのである。

『天使は獣なり。西にありて天空を睨み、太陽を吞のむ』

「……残念ながら、終点ゴールではないか」

その文字を見つめて、ハイネが呟く。

むしろ始点。当然ここまでは気づくはずだな、と笑う魔術師が見 えたような気がした。

しかし、青年に落胆はなかった。

(獣に西方ということは、候補は限られてくるな)

シェムハムフォラエの七十二天使には、単なる語呂合わせでつくられた天使とほかにも伝承を持つ天使とが混在している。その中で獣や西方といったタームに一致する存在を検索して、この剝離城のほかの手がかりとつきあわせる必要があるだろう。

代わりに、青年は慎重に地面へ触れた。

よく整備された前庭だが、この森の一帯はほとんど放置されているようで―湿った土と草の中に、かすかな凹凸があることをハイネの目は見抜いたのだ。

「.....足跡か?」

招待状をしまい、新たな物品をスーツの懐から取り出す。

その手の平に載っていたのは、まるで子供の玩具おもちゃみたい な、金属の筒を組み合わせた犬だった。

模型の金属犬にゼンマイを組み合わせ、ただ一言ハイネは呟いた。

「Convert流転せよ」

一瞬、指が光ったように見えた。

途端、それは生命を吹き込まれたのだ。ハイネの手の平から飛び降りて、ゼンマイ仕掛けの模型はたちまち本物の犬のように鼻をうごめかしはじめた。人体模造としての自動人形オートマタはすでに廃れた魔術概念だが、逆に言えばそれ以外はいまだに発展途上の領域だ。

とりわけ、この金属犬は特別製である。

イスタリ家から持ち出してきた魔術礼装のひとつなのだった。単に臭いを嗅ぐだけではなく、魔力の波長や残ざん滓しを嗅ぎ分けることも可能としたのが、イスタリの錬金術の成果でもある。

すぐ、ゼンマイ仕掛けの金属犬がとある方向へ歩き始めた。

その後を、ハイネはついていった。

森を抜けると、再び月が青年を照らす。

いくつもの花が咲く前庭で、直に月光を浴びる。

多くの詩人と魔術師が愛する夜であったかもしれない。ハイネは無言で歩いていき、その歩みに月もついてきた。雑草と土を踏むひそやかな音だけが、錬金術の犬と騎士の行く先を示すかのようだった。

いつのまにか、舞台は再び剝離城へと戻っていた。

壁に沿って、ゼンマイ仕掛けの犬とともに剝離城の外周を歩き始めながら、ハイネは別のことを考えていた。

(.....見られている、か)

その気配を感じ取っていたからだ。

より正確に言えば、感じているのはハイネ自身ではない。青年が密かに所持する魔術礼装―いくつかの〈珠〉が反応しているのだ。

──『とりわけイスタリ家秘蔵の〈生きている石〉は下手な英霊の 武具にも匹敵するというが、なるほど大した才能だ』

ロード・エルメロイII世の言葉を思い出す。

時任次郎坊清玄と魔術争いをした際ぽつりと漏らした台詞を、ハイネは聞き取っていたのである。

(.....よく研究している)

とも思う。

〈生きている石〉は隠匿されているわけではないが、外部で記された文献は数少ない。名前ぐらいならともかくそれが武具の類であることはほとんどの魔術師は知らぬはずだった。たとえ本人は納得していなくとも、その知識量は君主ロードと名乗るにふさわしい。

(.....英霊、か)

ロード・エルメロイII世はよくこちらを知っているが、ハイネ側もある程度は承知していた。

十年ほど前、彼が極東の地で魔術師同士の苛烈な戦いに赴いたことは、一部の魔術師たちの間でいまだに語りぐさとなっている。

第四次聖杯戦争。

そんな風に呼ばれる、極東の地での戦いだ。

それは、英霊同士の戦いだったという。聖杯──けしてキリスト教で神聖視されているそれと同一ではないが──によって召喚された英霊同士を戦わせ、最後のひとりになったものが願いをかなえられるとかいう、魔術師にとってさえ荒唐無稽な『儀式』である。

どのような戦いが繰り広げられたのかは、ハイネも知らない。

だが、ロード・エルメロイII世―当時はウェイバー・ベルベットと名乗っていたはずだが―が時計塔に所属していた魔術師としては唯一の生き残りであり、現代の魔術師としては破格の修羅場を越えてきたことは間違いなかった。

(侮れる相手ではない)

と、判断する。

たとえ魔術では自分に劣っていても、あの男にはそれ以上のものがあると、ハイネ・イスタリは確信する。今回のようなケースでは、魔術そのものよりも重大な価値を持つやもしれぬ。

さらに、相手はロード・エルメロイII世だけではなかった。一度 はあしらった清玄にせよ〈師父殺し〉たるフリューにせよ、恐るべ き実力の持ち主だ。ましてやエーデルフェルト家の姫や、シザーム ンドの隠者に至っては化け物と言うしかない。

それでも、今回の自分はどうしても遺産を勝ち取る必要があるの だ。

(.....ロザリンド)

妹の横顔を思い、自らの足に刻まれたそれを意識する。

魔術刻印。

もともと、ハイネはイスタリ家の魔術刻印を受け継ぐつもりではなかった。

青年の明朗闊かっ達たつな性質は魔術が必然的に持つ陰の側面と どうしても相容れず、半ば飛び出すようにして聖堂教会の門を叩い たのである。結果として、後継者を失ったイスタリ家は、第二子で あるロザリンドに目をつけて──悲劇が起こった。 ロザリンドの身体が、魔術刻印に対して異常な反応を示したのである。

異常反応。

魔術刻印とはある種の『臓器』のようなものだ。ごくわずかな例外を除けば血族の人間にしか適合しないし、それだってかなりの拒絶反応を起こすのが当たり前。それゆえ第二次性徴までに少しずつ移植し、定期的に薬を服用したり調律師の力を借りたりして耐性をつくっていくのが基本である。

だが、ハイネに去られた父は焦っていたのだろう。

あるいは、一見ロザリンドの素質が素晴らしく見えたためだろうか。

厳密に言えば、妹のそれは拒絶反応とは異なっていたのだ。

過剰適応というべきだろう。わずか一年で魔術刻印を移植しきったロザリンドは、最初は何の拒絶も起こさなかったように見えて一その実、生命力のほとんどを魔術刻印に奪われてしまっていたのだ。実家から報告を受け、聖堂教会の制止も振り切って舞い戻ったハイネが再移植を受けることになったのだが、すでに時は遅かった。

一度ロザリンドに移植された魔術刻印は、変質を来していたので ある。

ロザリンドの身体こそある程度復調したものの、今度はハイネの生命力が徐々に魔術刻印に吸い取られつつある。ハイネの生命力がより旺盛なためか、魔術刻印は足から身体の内奥まで複雑に食い込み、もはや摘出もかなわなかった。旧知の呪術医ウィッチドクターの見立てではおそらく数年と持たないだろうと言われている。

.....死ぬのはいい。

むしろ死んだ後ならばこの魔術刻印も引きずり出せるだろう。道 半ばで果てるのは惜しいが、魔術師にとってそんな事例はいくらも ある。

だが、自らのせいで兄が死ぬ光景など、ロザリンドに見せたくはなかった。

それだけはどうしても耐えられなかったのだ。

「.....ああ_」

淡く、苦笑する。

通常の調律師では、この魔術刻印の治癒も摘出もかなわない。

だからこそ、魔術刻印を思いのままにしたという〈修復師〉―ゲリュオン・アッシュボーンの秘法こそが、どうしてもハイネ・イスタリには必要なのだった。

*

思索は、そこで途切れた。

城の外周の三分の一ほどで、不意にハイネの身体が緊張する。

刹那、土を踏んでいた犬の身体が引き裂けた。もちろんイスタリ家の魔術礼装たる金属犬は勝手に壊れるような脆もろい品ではあり えぬ。

砕けた身体をにじるように、闇が震えた。

城にさえぎられ、月光も届かぬ陰に、なお深い暗黒がわだかまったのである。

そのカタチは、ハイネにも判然としなかった。まるで死神のごと く密やかな、確かに存在するはずなのに気配の感じられない相手 だった。

ただ暗闇の中、赤い瞳だけが燃えていた。

声は、こう聞こえた。

「一天使の名を、問う」

嗄しわがれた、ともすれば風の掠かすれとしか思えないような 声。しかしその内容にさしものハイネが目を見開いた。 「お前が、問うだと?」

動揺を、すぐさま押し込める。

目の前の相手は、細こま々ごまとした質問に答える気はないようだった。それゆえ慎重に思いを巡らし、最初に告げるべき言葉を検討し、口を開く。

「Arielアリエル」

あの招待状に書かれていた、ハイネ自身の〈天使名〉である。

獣は、ただもう一度同じ言葉を告げた。

「一天使の名を、問う」

(やはり、違うか)

もちろん予想はしていた。

自分の〈天使名〉を告げただけでクリアになるなら、こんな七面倒なルールをつくる意味がない。今すぐは分からなくても、剝離城の主には問うただけの意味があるはずだ。だとすればさきほどのメッセージに関係する名前のはずだが、まだ十以上残る候補からハイネは限定しきれていなかった。

賭けで、それらの候補から言ってみるか?

だが、それは―

「一答えられぬなら、剝がせてもらう」

影が、ぬるりと盛り上がった。

二次元の物体が三次元に盛り上がったかのごとき、異様な現象だった。

はっきりとは見えずとも、今度は獣のごとき四つん這いの姿をハイネは知覚した。ぞろりと持ち上げられた爪の凶暴さは、さきほどの金属犬からしても明らかだ。人間の骨肉など紙切れも同然に八つ 裂きとするだろう。

ハイネも、応じて呪文を詠唱する。

しかし、

「Convert流転せよ―」

呪文の効果より早く、爪が青年の身体を貫いた。

そう見えた。

実際、呪文は外部に何の影響ももたらすことはなく──しかし、硬い音を立てて、妖物の爪が弾き返されたのである。

破けたハイネのスーツの胸元を見よ。

肌のあるべき部位は、紫の輝きを放っていた。

「魔術は身の内に起こるものほど強い……イスタリでは最初に習う理です」

青年の言葉は、自信に溢れていた。

イスタリ家の至宝〈生きている石〉は、ハイネ自身の身体に埋め 込まれているのだ。

その魔力は主たる生物に融合して、呪文ひとつでその中身を造り替えてしまう。石のひとつずつが体表の七%を覆う計算であり、その半分を起動した今、体表の八十四%は紫の装甲に変化する。モース硬度にして蒼玉サファイアに匹敵する魔術の鎧よろいであった。

「剝ぐと言いましたね」

あくまで敬意を忘れず、ハイネが口にした。

その顔すら、半ばは錬金術の合金と同化している。もともと着用していた衣服もイスタリの錬金術で編んだ品だ。〈生きている石〉とは容易に融合してその形状を安定させる効果をもたらす。実際、見る間にスーツの袖は手甲ガントレットとなり、ブーツは臑すねの部位まで一体化した脚甲グリーブと変じた。

今のハイネ・イスタリは、まさしく頑強なる甲冑を纏まとう騎士

ナイトであった。



「あいにく、私の身体にその爪はたたぬようです」

涼しい声音が、夜の城外に響く。

月の光が鎧の表面で砕けて、まるで水晶の破片のようだった。

「では、あなたは私の槍を防げますか?」

鎧と同時に、手には一本の槍が精製されていた。

今の〈生きている石〉を凝集した魔術の槍だ。錬金術によって限界まで強化された〈生きている石〉は、その先端において金剛石ダイヤモンドさえも凌しのぐ。イスタリ家で配合されている仕掛け馬での突撃チャージならば、戦車の複合装甲とて貫ける自信が青年にはあった。

この槍と鎧こそが、ハイネの宿命。

かつて聖堂教会の刺客をことごとく退けた、ハイネ・イスタリの 武装形態だった。

同時に、獣の姿も徐々にはっきりと認識できつつあった。何らかの魔術によるものか、細部は瞭然としないが、おおまかなカタチは猛獣に酷似していた。このような場所に生息するはずもない虎か狼ーいいや、それより一回りも巨大な獣とハイネは感じた。

(獣.....)

さきほどの台座でのメッセージを、ハイネは思い出していた。

「十八世紀のフランスにはジェヴォーダンの獣という伝説もありますね。はたまたこの城にちなめば、楽園の守護聖獣たるケルビム……一体だけならケルブですか?」

公的な記録によれば、一七六四年六月一日フランスはジェヴォーダン地方に現れた謎の獣のことである。百人以上の犠牲者を出した獣の正体はいまだに解き明かされず、突然変異の野獣とも伝説の狼男ルー・ガルーとも噂された。

またケルビムは楽園の東を守る、四つの顔と四つの翼を持つ──ないしは半人半獣ともされる天使の名だ。単数形ではケルブとされ

る。

仮に、これが剝離城と関連ある魔獣だとして、それらの伝承とも何らかのつながりをもつのかどうか。

ゆるりと槍を構える。

体重を傾け、重心の変化でほんのわずかずつ間合いを詰めてい く。回避不能の射程距離まで追い詰めたとき、その槍はいかなる敵 をも貫くはずであった。

刹那、獣が吼えた。

その咆ほう吼こうに呼び覚まされたがごとく、急激にハイネをとりまく空気が変化したのだ。

「つ?!」

熱である。

ハイネの周囲を取り巻いているのは、もはや炎よりも激しい高熱の気流であった。さしもの〈生きている石〉による装甲も断熱性までカバーしているわけではない。

(魔術ではなく、魔獣の特性?!)

咄嗟に、ハイネの手が動いた。

今や装甲と変わったスーツの袖から小さなフラスコを取り出し、 内部の薬品をぶちまけたのである。たちまち蒸発した成分はハイネ の魔オカドとも結合し、科学的にはありえない結果を導き出した。

ごお、と白色の炎が渦巻いたのだ。

ハイネを中心に噴き上がった炎は、ますます周囲を焦熱に陥れるかと見せて─その逆に、数瞬でそそりたつ氷柱つららと化した。

「錬金術が操るのは鉱石だけとでも思いましたか?」

装甲の下で、ハイネが微笑した。

「液体も気体もこの世に存在せぬ概念すらも、錬金術の手の内です。いえ、私からすればこちらの方が得意の分野ですよ」

属性という概念がある。

先にロード・エルメロイII世も語っていたが、ハイネ・イスタリの属性は魔術師の世界にも希まれな火と水の二重属性。火と水は相反すると思われがちだが、けして両立しないわけではない。もちろん二重属性としても希け有うな才能だが、燃える水などを考えれば理解しやすいだろう。

いわばガソリンと逆に、今の液体は炎という現象によって空気中 の熱を一気に奪い去ったのである。

す、とハイネの手が動いた。

槍が閃ひらめいた。

闇の中で迸ほとばしった刃は、一呼吸に七つを数えた。融合した〈生きている石〉は単なる頑強な鎧にあらず。ハイネ自身の筋力も大幅に強化させ、彼の身体能力を常人の遥か上に至らせていたのだ。

手応えはあった。

爪で受けたのは一合きり。二度の魔槍が獣を捉え、しかし獣は怯まずに跳躍した。

さらに数回、後ろ向きに大地を蹴った。

(逃げた?!)

防護と槍のコントロールに最適化していた鎧が今度は追跡用に変 形モーフィングし、遅れをとりつつも急いで追う。

さすがは獣というべきか、逃走速度はハイネに勝った。

途中で大きく横に跳ね、外部に面していた剝離城の廊下へと飛び 移った。

「―城の中?!」

ハイネも、同じく一階の廊下へと乗り込んだ。

石と金属がぶつかりあう、高い音が響き渡った。

深夜とあって照明はことごとく消えている。月光が閉ざされた結果、城の外とは比べものにならぬほど暗く、逃げる獣の気配だけを頼りに駆けていく。

Г.......

嫌な胸騒ぎが、どうしても止まらなかった。脳細胞よりも先に、 脈打つ血と粟あわ立だつ肌が事態の深刻さを理解しようとしてい た。

(まさか.....!)

気配の後を追いつつ、ハイネはとあることに気づきつつあったのだ。

もしも、と思った。

さきほど森の台座を前に、招待状が浮かび上がらせたメッセージ。

もしも、あのメッセージを受け取ったのが自分が初めてでないと したら?

もしも、自分が本日ふたり目の発見者だったとしたら?

もしも、あの獣が問いかけた相手が、もうひとり先にいたとしたら?

一答えは、そこにあった。

天窓から、再び月光が落ちた。

吹き抜けの広間であった。

最初に全員が集まったロビーとは、ちょうど逆方向に在する場所

である。古式ゆかしくも贅を尽くされたこの城で、一際その場は荘厳な空気に満ちていた。近くにピアノとハープが置かれていることからすると、かつてこの場で美しい音楽が奏でられたこともあったのだろう。

獣の気配は、消えている。

Г......

ハイネが見ているのは、場の中央だった。

吹き抜けにつくったのは、この像のためだろう。

巨大な天使の像が剣と秤を掲げていた。おそらくはモン・サン = ミシェルのミカエル像に影響されたのだろうそのシルエットは、ハイネにとっても馴染み深いものだった。その秤で死者の罪を判決し、その剣で蛇サタンを退ける大天使ミカエルは最も有名な天使のひとりに違いない。

「ああ……!」

すでに、青年は気づいていた。

濃密な臭いが、目をそむけることなど許さなかった。

冒ぼう瀆とくといえただろうか。それとも所詮は魔術師の領域な のだから、やはり祝福と呼ぶべきだったろうか。

まさしく天使は信仰の勝利を宣言すべく、高々と聖剣を掲げている。

その剣が貫いていたのは一

*

朝日より早く、拙せつと師匠は呼び起こされた。

寝ぼけていた師匠も状況の異常に気づくや、すぐさま衣服の乱れ を直し、その場へと駆けつける。 広間に踏みいった瞬間、気配が変じた。

ぎりと歯を食いしばり、軋きしるように漏らしたのである。

「化野……菱理……!」

剝離城の構造は、湾曲した凹に似ている。一方の末端が最初に集まったロビーなら、もうひとつの末端がこの広間だ。絵画や壁画はもちろん、ピアノやハープ、柱や細かな調度にまで天使の意匠が施されており、亡くなった主の偏執を感じさせることについてはほかの部屋と変わらない。

だが、今だけはまるで気にかからなかった。

その奥に、彼女がいたからだ。

振り袖は、このためにつくられたかのように美しかった。

彫像の天使にかかった極東の衣装はなおさら神秘的に映っていた。天使の剣を汚した血液でさえもその美しさを損ないはしない。 それが、たとえ凝固が始まっていて黒く染まった血液であっても、 串刺しとなった女が美しいことだけは変わりなかった。

自分は、思わず口を押さえた。

むせかえるほどの血臭と同時に、もうひとつの事実にも気づいて しまったからだ。

彼女の美貌──白く滑らかでいかにもエキゾチックにのけぞった顔から、両方の眼球が抉り抜かれていたのだ。

「これは……」

と、師匠も言葉を無くした。

しばらくしてかぶりを振って、

「ハイネさん、彼女を降ろしてもらえますか?」

と、呼びかける。

ちら、とハイネが周囲を見やった。

すでにこの場には、招待された魔術師たちが全員集まっている。

清玄にフリュー、ルヴィアゼリッタとその従者、あのオルロックと車椅子を押している助手すらもさすがに今回は無視できなかったようだ。おおよその魔術師にとっては慣れた状況でもあるものか、鋭い緊張はあるものの取り乱した者はひとりもいない。ただひとりロザリンドはひどく不安そうだったが、兄の存在が支えているのか、気を失ったりはしなかった。

「分かりました」

誰からも反対は出ず、ハイネはすっと彫像の天使に手を伸ばした。

そこから伸びたのは、髪の毛のごとく細い金属糸のようなものだったろうか。たちまち彫像の剣が断ち切られ、菱理の死体を優しく青年が受け止めたのだ。スーツが汚れるのもかまわず、そっと死体を床に横たえると、師匠もその傍らにしゃがみ込んだ。

「失礼」

そう言って、菱理の死体へと触れた。

振り袖をめくりあげ、素早く死体をチェックしていく。まるで医者か何かのように、冷ややかなぐらい手際よく化野菱理の外傷をつきとめていった。

「ハイネさんが獣と言っていたが、確かに大型の爪めいた刃物で ざっくりと眼部を抉り取られているな。ほかにも背中のあたりが大 きく削ぎ取られてるが、おそらくは魔術刻印だろう。できのいい魔 術師はそうでもしないとなかなか死にも至れん」

魔術刻印はひとつずつまったく異なる代物だが、共通する機能もある。

とりわけ年月を経た家系の魔術刻印は呪いにも等しく、魔術刻印 自体が魔術師を生かすため、ありとあらゆる力を注ぐのだという。 魔術師として人を外れればなまなかなことでは死ぬこともできない と、そんなことを師匠が以前話していた。ある意味では、魔術師の 家系にとっては魔術刻印こそが主であり、代々の魔術師はそれを引 き継がせるための器にすぎないのだとも。

はらり、と振り袖の内側から血ち塗まみれの封筒がこぼれ出た。

自分たちの招待状と同じ封筒を、師匠はそっと拾い上げた。特に 断りもなく、その中身を引きずり出して検分する。

「おや」

と、声をあげた。

「彼女にも〈天使名〉があったらしいな。これは.....」

そこで、言葉が途切れた。

Hachasiah八八シア。

招待状に浮かんでいた単語を読んで、師匠の表情が険しく変じた のだ。

「師匠?」

血に濡れた指で顎を押さえ、しばらく師匠は黙り込んでいた。

やがて、震える細い声で答えた。

「……考え違いをしてたのかもしれない」

「考え違い、ですか?」

訊き返した自分にも、すぐには返事しなかった。

震える指は無惨な死体となった菱理の身体を探り、半ば凝固した血にまみれながらも菱理の髪を掻きあげ、抉られた眼球のあたりを再確認する。

「……〈天使名〉は遺産のヒントなんかじゃなかった」

その言葉に、居並ぶ魔術師たちもぐるりと振り向いた。

助手に車椅子を回転させて、オルロックが問う。

「……君主ロードよ。では、これはなんだと言うのだね」

「謎かけミステリーなんかじゃない」

もう一度、師匠が呟く。

神秘ミステルの語源は、ギリシャ語の『閉ざす』だという。閉鎖であり隠匿であり自己完結であり、つまるところは神秘は神秘であること自体に意味があるのだと。

秘することこそが魔術の本質。到達できるものがより少なければ 少ないほど魔術は強大となりうる。この剝離城に至る前、師匠は広 く知られるほど概念は安定すると言ったが、それと対をなす──魔術 師ならば誰もが知る真理。

だからこそ、剝離城の亡き主が残したメッセージを、魔術師たちは素直に受け止めた。彼らの世界じょうしきでは、こうした謎かけは慣れ親しんだ趣味であると同時に、ふさわしからざる者を選別するための神聖な儀式だったからだ。

しかし。

それが、謎かけなどではないとしたら?

「シェムハムフォラエの七十二天使は黄道十二宮に変換できると 言ったが、同様に人体にもなぞらえられる。大宇宙マクロコスモス と小宇宙ミクロコスモスとが常に照応しあうなんて、このメンツで 説明する必要はないだろう」

居並ぶ魔術師たちの顔に、緊張が走った。

師匠の言う意味を、彼らも悟ったのだ。

「Hachasiahハハシアは白はく羊よう宮きゅうを支配宮とする天使だ。白羊宮は大ざっぱには人体の頭部を加護し……」

そこで、師匠は一拍の間をおいた。

師匠自身、この言葉がどうしようもなく禍々しく、しかしここに 至っては吐かずにはおれないとばかりに囁いたのである。

「……とりわけHachasiah八八シアに限定すれば、眼球を意味する」

思わず、あっと声が出そうになった。

ロビーで菱理が口にしていた遺言状のメッセージが、脳裏に蘇った。

― 『問われて答えられなかったものは、すべからく天使を剝ぎ取られねばならぬ』

天使を剝がれる、とはそういう意味であったのか。

比喩でもなんでもなく、ただひたすらに直ちょく截せつな魔術師のメッセージ。答えられなければ当然のこととして剝がれるのだからその覚悟をしておけと、そういう意味であったのか。

「つまり、この〈天使名〉は私たちをこのように殺すという予告状 だ」

声は、しんと広間に響きわたった。

まるで呪文のようだった。広間中に配されたおびただしい天使たちが、すべてこちらの命を狙う殺し屋に変じたかのごとき錯覚さえ感じた。

だが、それきりで師匠はうつむいた。

「師匠?」

「……最悪だ」

と、師匠が呟いた。

こちらの声などまるで届いていない。それほどに今の師匠は切実 に没頭していた。

「師匠?」

もう一度呼ぶと、やっと師匠はこちらを振り返った。

先の〈天使名〉の意味を見つけたときよりも、師匠の表情は悲愴

さを増していた。

「……最悪だぞ、これは」

「何が、です?」

「この結果がだよ。犯人が誰にしろ、こういう図式をつくりあげる ことが目的のひとつだったんだろう」

それから、こう付け足したのだ。

「化野菱理は剝離城に集まった人間の中で、唯一アッシュボーンの 秘法を知り、かつそれを手に入れる必要がない人物だった」

ちら、と後ろを見る。

視線だけでその意味は十分に分かった。唯一ハイネが庇っているロザリンドを除いて、魔術師たちは誰も恐れてはいなかったのだ。

むしろ、歓喜しているようにさえ見えた。

剝離城ここには隠すだけの何かがあるのだと、その確信を得たからだ。しかも、それを得るために互いを殺すことさえ厭いとう必要がないのだと。真っ先に管理人だった法政科が殺されたのなら、どうしてかまうことがあるだろうか。

「はは! つまり獣がご丁寧に魔術刻印剝いで目をくり抜いてから、あそこにぶっ刺したってのか? そら丁寧すぎて笑える話だな」

「フリューガー殿。私が嘘を言ってるとでも?」

「いやいや。わいはハイネ兄さんの言うことを信じてるで」

「……では、我が友ゲリュオン・アッシュボーンの亡霊が、この城のどこかを這いずっているとでも言うのかね?」

「あら。シザームンドのご老体は、犯人がこの中にいると言うつもりですの」

魔術師たちの、声、声、声。

広間に響き合う声音に、それぞれの自負と敵てき愾がい心しんと

好奇心とが複雑に混ざり合って、まるで嵐の夜に笑いさざめくという妖魔の群れワイルドハントのようだった。

ああ、そうだ。

師匠の言う通り、これはもはや単なる宝探しではありえない。

だけど、自分の感想は少しだけ師匠と違っていた。この事件から 謎が消え失せたわけではない。むしろ犯人にせよ秘法にせよ、明か せぬ謎はどうしようもなく事件の中心に位置しており、その存在感 を増してすらいる。

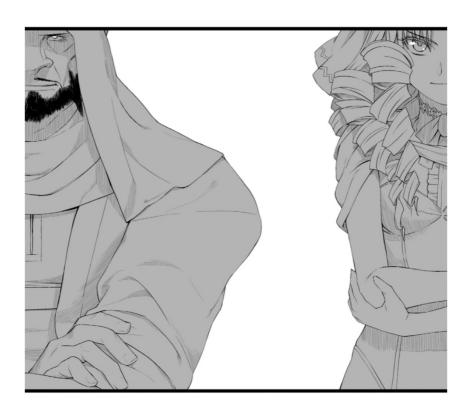
違ったのは、謎の質だ。

それは、誰かに解かれるための謎ではない。

甘い蜜のごとく魔術師たちを呼び込み、死と災いを招き寄せるための回路だ。謎という駆動機関を得てこそ、物語は本来のカタチを取り戻し、幕を開く。

──惨劇グランギニョルの、幕が開く。

◆ 第三章 ◆



部屋の扉を閉じて、師匠は崩れ落ちるようにソファへもたれかかった。

「……ふう」

と、息をつく。

身体の芯ごと吐き出してしまうようなため息だった。

今回ばかりはいつもの葉巻を吸うのも忘れて、ソファに身を委ね きっている。そのまま、ずぶずぶと沈み込んでしまいそうなほど、 師匠の表情は疲労を濃くしていた。

すぐに水を用意して隣のテーブルに置くと、貪るように飲んだ。

顎からこぼれて、シャツを汚すことさえ厭わなかった。あっという間にコップを空にしてしまい、滴った雫しずくは師匠の長い髪も濡ぬらした。

「……酒はあるか」

「部屋に置いてたウィスキーでしたら」

「それでいい」

くぐもった声に押されて、棚からスコッチウィスキーを取り出し グラスに注いだ。

かなり度数の高い酒だったようで、注いだだけでつんと鼻の奥に 来る。水か何かで割るべきかと思ったが、師匠は奪い去るようにし てそのグラスをもぎとった。

ぐい、と唇に傾けた。

その様子を見ながら、自分は口を開いた。

「……もう少し、現場を調べなくてよかったのですか?」

「あの状況では、いつ殺しあいが起きてもおかしくなかったからな」

手の甲で、顎元を拭く。

残ったウィスキーもとにかく喉へと流し込む。おそらく味など分かっていまい。ただ何もかも忘れてしまいたいというだけの行為だ。ウィスキーの瓶やグラスまでは天使が刻印されてなかったことを感謝すべきかどうか。

完全に飲み終わるのを待ってから、もう一度尋ねた。

「ほかの方は、自分が殺される……とは思わないんですか? だって、あの法政科の魔術師も殺されたんでしょう」

「そこが魔術師の業だ」

忌々しそうに、師匠が舌打ちする。

「互いの腕を磨けるということで、時計塔でも魔術師同士の戦いは 奨励する向きがあるぐらいでな。そうでなくても他人の魔術なんて そうそう拝む機会もない。一流であればあるほどこういう状況は 願ってもないということになるのさ。もちろん法政科は神秘よりも 時計塔の秩序に重きを置くがゆえ、自分たちならあんな不覚はとら ないとも思ってるんだろうがな。はは、警察なんて呼ぶはずもな い」

Г......

「ほぼ全員がこう思ってるさ。たとえ殺し合っても、自分だけは生 き残るってな」

万人の万人による闘争という言葉を、故郷で聞いた事がある。

人間をただありのままに放置すれば、誰もが殺し合う地獄しか生まれない。そういう事態を引き起こさぬように社会が生まれ、秩序がつくられるのだという話だった。法政科は魔術師たちの世界においてそういう役回りを引き受けるための職分だったのだろう。

―だが、その秩序が失われたら?

今、この剝離城アドラこそがそうだった。

いずれの魔術師もその手で殺し合う事に躊躇がない。はたしてここはブッディズムの修羅界か。はたまた幾多の英雄が戦と饗きょう宴えんを繰り返すヴァルハラか。

「つ.....」

想像して、ぶるり、と背筋が震えるのが分かった。

どう考えても、自分たちは場違いすぎた。蜘く蛛もの巣に搦からめ捕られた生き餌のようなものだ。どうもがいたところで、蜘蛛の糸はなおさら頑丈に自分たちを縛りつけるばかり。後に残されたのは、いつ毒の牙を首に突き立てられるかというだけの十三階段だ。

だから、意を決して尋ねた。

「……今のうちに、脱出しますか?」

かなり長い間、師匠は沈黙していた。

ぎゅっとグラスを握りしめる。さきほど化野菱理の死体を目にしたときよりも長く、苦しそうな葛藤であった。

やがて、

「……いいや」

と、弱々しくかぶりを振った。

「……どうしてです。あの中の誰とやっても死ぬのは自分ひとりだと、師匠がご自身で言ったでしょう」

「ああ。決闘なんて始めれば、最初に死ぬのは間違いなく私さ。酒を呷ったところでまだ恐ろしくて恐ろしくて、気を抜いたら膝が笑い出してしまうぐらいだ。今ここにロープがあったら、首をくくって逃げ出してしまいたいね」

苦笑して、膝をさする。

その笑みは露骨にひきつっていた。

「それでも、帰れない」

「......どうしてです?」

もう一度、自分は訊いた。

すると、師匠はジャケットの懐からあの招待状を取り出した。

「この招待状をつくったゲリュオン・アッシュボーンは、よくよく こちらのことを研究していたらしいな」

と、唇に苦笑を滲ませた。

師匠がそんな表情をするのを見るのは、これで二度目だった。どうしようもなく無様で、格好悪く、何かにしがみつこうとしている人間の表情であった。

見ているこちらが何も言えなくなってしまう横顔。

目を細めて、その招待状を見つめて、師匠が言う。

「私には、やるべきことがある」

やりたいこと、ではなかった。

やるべきこと。自分にはどちらも分からない。ふたつがどう違うのかだって、本当には分かってない。

ただ師匠の声音からは、たとえ天の神様でも動かせない決意が窺えた。それはどんな人生なんだろう。あの故郷で―あの墓地で一生を終えるはずだった拙せつにはあまりに遠すぎる世界。こんなにも近くにいるのに、まるで理解できない相手。

だけど、その理解できない地平から、師匠は呼びかけてくる。

「レディ。君に付き合わせてすまなく思っている。だが、私にも退けない理由がある」

「八八!」

自分の右手のあたりから、声がした。

アッドが笑ったのである。

「これはまた、腰抜け魔術師がずいぶん男気を発揮してるもんだ! てっきり、あんたはやばくなったら速攻でトンズラこくと思ったんだがな!」

「君たちの切り札も基本的には一回こっきりだ。しかも条件が揃えられるかすら分からない」

念を押すように、師匠が口にする。

吐息こそ酒気を帯びていたが、その瞳はひどく真剣だった。

「私に理由があるとはいえ、他人に強制できるものじゃない。ここで降りるというなら、それを止める権利はない」

Г......

自分には、その瞳を受け止めることはできなかった。正面から受け止められるような何かは自分の中に存在しなかった。

だから、視線を逸らしてしまう。

逸らしたままで、訊いた。

「前も訊きましたが、師匠にはここの遺産が必要なんですね?」

「ああ」

師匠がうなずく。

自分を故郷で拾い上げたときの顔だった。わずか数人しか知り合いのいなかった自分を、ロンドンへ連れ出すと決めたときと同じ表情。なぜだかため息がこぼれた。自分でも正体不明の感情が狂おしく胸にさざめいていた。

「……でしたら、もう少しお付き合いします」

「.....すまない」

珍しく、深々と頭を下げた師匠に、なんとなく頰がひきつってしまった。

いや。

ひょっとして、ひきつったのとは違うのか。こみ上げた感情が分からなくて、自分の唇に触れる。指先でなぞった唇は、自分のそれとは思えないぐらい自然にほころんでいて......

「……おやおや」

と、低い声がした。

部屋の扉が、開いたのである。

師匠の顔が強ばり、咄嗟に振り返った自分も思わず息を止めた。

「師弟で仲の良いことだな。善ぜん哉ざい善哉」

きい、とタイヤが床を踏む音がした。

助手の押す車椅子が、闇を割って現れる。皺に埋もれたかのようなオルロック・シザームンドの顔は、なぜか芋虫を思わせる―非人間的な笑みを貼りつかせていた。

*

天使だらけの私室で、その老人はなおさら異形めいていた。

骨と皮ばかりの痩せこけた身体は、逆に生への妄執にぎらついて見える。剝離城アドラという巨大な環境に対して、老人の在り方はたったひとりで拮抗している。老いさらばえた小さな身体にこの城と匹敵するほどの何かが詰め込まれているのだと、嫌でも直感させられて、思わず二の腕をさすっていた。

「.....オルロック老、いかがしました?」

師匠が、可能な限り落ち着かせた声で問う。

自分の右手のアッドは、慌てて気配を引っ込めさせていた。さき ほどの声が老人に聞こえていたかもしれないが、だからといって姿 まで見せる必要はまったくない。

くく、と老人は虚うつろな笑い声を響かせた。

「いやさ。勝手に入って悪かったが、鍵が開いておったものでつい な」

「……ご遠慮なく」

師匠が渋い顔で、うなずく。

もちろん、つい、などではあるまい。一瞬前まで完全に気配が消えていたからだ。もちろん自分も師匠も、さきほどの件で動揺していたのは確かだが、だからこそ気を張っていたのも間違いなかった。

その視線が、師匠の手元のウィスキーグラスに動いた。

「ほう。いいものを飲んでおるな。こちらももらおうか」

ふわ、と車椅子の肘掛けのあたりから、淡く光る何かがこぼれた のだ。

蝶であった。

蝶魔術パピリオ・マギア。

確か、それが老人の操る魔術の名前だったはずだ。老人とはいっ そ対極的に美しい光の蝶は拙せつからウィスキーを奪い、また別の 蝶はグラスを棚から取り出して、とくとくと老人の手元に注いだの である。

あまりの手際に、師匠も自分も二の句を継げなかった。この老人 は背後の助手に命じるより簡単に、魔術を行使するのだった。だい たい鍵だって締めていたはずで、下手に派手な魔術を見せられるよ り、よほどこの老人の底知れなさをひたひたと思い知らされた。

「ふむ。やはりゲリュオンはいい酒を置いているな。昔から溜め込んでたくせに、生前はろくに客にも出さなんだからな」

唇に含み、ひひひと舌鼓を打つ。ねっとりと口内で楽しんで、まるで我が家のごとくリラックスした様子で瞼を閉じていた。

耐えきれなくなったように、師匠が口を開く。

「一体、どのようなご用です?」

「ああ。さきほど、いろいろ見識を伺わせてもらったのでな。ひと つお礼を申し述べておくべきかと思ったのさ」

「……先ぐらいの知識など、ご老体にとって大した価値はないでしょう」

「知識自体にはな」

認めて、ゆっくりと老人はうなずいた。

「だが、おぬしの特質はいささか異なる。自分でも分かってるので はないか。無駄な謙遜は敵を増やすだけだぞ」

「……私風情に、どんな特質があると?」

「視点さ」

と、老人は指摘した。

皺に埋もれた目をさらに細め、正面から師匠を見据えて囁く。

「現代魔術などいかにもくだらない。歴史と複雑に溶け合った魔術の深淵を知ることもなく、単に神秘のつまみぐいをして相性の良さ そうなパーツをつぎはぎするばかり。我らのような正統な魔術師が 顧みる必要などあるまいと、そう思っていたのだがな」

師匠の講義によれば、一般に知られている中で最も現代的な魔術 は混沌魔術ケイオスマジックというそうだ。

一九七○年代、イギリスはウェスト・ヨークシャーに始まった魔術体系。それは洋の東西を問わないどころか、魔術のみならず哲学や科学理論、果てはSFまでも取り込み、魔術師の意識を『彼方』へとアクセスさせることで超常的な現象を発露させるのだという。

ゆえに、混沌。

そうした節操なくデタラメな在り方こそがこの上なく現代的だと、師匠は時計塔で話していた。もちろん実際に魔術が起動するかというと困難を極めるし、あくまで表側に知られた歴史の一断片に過ぎないとも注釈を加えていたが、この老人はそうした現代魔術の事情にも通じているらしかった。

「てっきり、現代魔術など頭から無視されてると思ってましたが」

「学ぶことは重要さ」

車椅子の老人が、喉を鳴らす。

「学んだ上でくだらないと唾棄することもな。……だが、だからこそおぬしのごとき異端の視点も生まれることがあるのだと思わされたわ」

「過分な評価をいただいて光栄です」

言葉を選びつつ、師匠が頭を下げる。

上目遣いに、さらに問うた。

「ですが、まさかそれを仰りに来ただけではないでしょう」

「おうとも」

車椅子の老人がゆらゆらと肩を揺らす。異様な緊張感に満ちた部屋の中で、車椅子の握りを押さえた助手の少年だけが無表情を守っていた。

「ひとつ、確かめておきたいことがあったのだがよ」

と、老人が前のめりになった。

「おぬしがここに来た理由は──エルメロイの魔術刻印が破損したためだな?」

その言葉は、まるで稲妻のようだった。

主神の投とう擲てきする災厄が頭上に降り落ちたかのごとく、師 匠はその身体を硬直させた。

「おいおい。こんなものは推理とも言えまい。アッシュボーンの修 復師という異名を知るならば、最初に考える発想だぞ。ましてやお ぬしの場合、十年前の事件があるのだからなおさら当たり前だろ ı ر

「……それも、ご存じですか」

「冬ふゆ木き市の、第四次聖杯戦争」

こともなげに、老人は答えた。

「十年前、極東で英霊同士の戦いに参加したおぬしの師匠―ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは命を落とした。だが、そもそも魔術刻印が十全に働いていれば死に至るまい。逆に言えば、ケイネスが死に至った以上、いかに死体を回収したところで魔術刻印はもうどうしようもなく破損していたはずさ」

Г......

師匠の顔は、まるでゾンビのごとく強ばっていた。

一言も返せぬまま、ただ相手の瞳だけを見据えている。それがせ めてもの抵抗と言うようでもあった。

「のう、どの程度無事に回収できた? 五割か? 三割か? いいや、英霊同士の戦とあれば一割も回収できなかったのではないか? ああ、そういえば若かりし頃のおぬしはケイネス師と敵対する形で参加していたのだったな。彼が亡くなったのにも一枚嚙んでいるのではないかな? いや、ひょっとしたら直接殺あやめたのはおぬしが操った英霊だったりしたか?」

オルロックの声は、十年の過去から殷いん々いんと響いてくる。

逃れ得ない罪を、改めて突きつけてくる。

(......師匠が......自分の師匠を殺した?)

拙せつも、思いがけないほどの驚愕を覚えていた。

殺すのも殺されるのも魔術師にしてみれば当然の流儀に過ぎないとさきほども言われたばかりだというのに、しかしそれが師匠の一ロード・エルメロイII世の身に起こったことだと囁かれた途端、脳髄をぶん殴られるほどの衝撃を受けていたのだ。

はたして、師匠はゆっくりと立ち上がり、老人の手元からウィス

キーを取り返した。

自分でグラスに注ぎ、ぐっと飲み干す。

「……どうして、その質問に答えねばならないのです」

 $\Gamma < \langle \cdot \rangle$

と、老人は笑った。

くく、くくく、くくくく、と背を曲げて笑った。

しばらくして、

「わしの魔術刻印も、それと同じよ」

と、低い声で告白したのである。

「つー!」

「どうした? わざとらしく驚いた顔をつくる必要などあるまい。 あのエーデルフェルトの小娘に見抜かれた通りさ。シザームンドの 魔術刻印は限界に来ておる。わし同様の哀れな老衰さ」

それも、ひとつの宿命だ。

魔術刻印が臓器のようなものならば、必然的に寿命も存在する。 もちろん通常の生物のスケールではかれるものではなく、数百年、 場合によっては千年以上生き続ける魔術刻印もあるらしいが、この 限界も特質によって上下する。

あまりにも時間を経すぎた魔術刻印は、老衰するのだ。

それを聞いた師匠の顔は、ひどく陰鬱だった。

「……私に言って、どうするつもりです」

わざわざ弱みを見せる理由が、隣で見てる自分にも分からなかった。

純粋に魔術の技量という意味では、剝離城に集まったどの魔術師よりもこの老人が恐ろしい。どんなに贔屓して見積もっても二流がいいところの師匠に、そんな内実を打ち明けてどんな意味があると

言うのだろう。

しかし、老人はそんな疑問が晴れるより先に、なおも手を打っ た。

「同盟を結ばぬか?」

と、切り出したのだ。

「同盟?」

「おうさ」

鷹おう揚ように、車椅子の老人がうなずく。

「アッシュボーンの秘法が何人にどれぐらいの期間をかけて施すものかはわしも知らぬ。だが、使えるのが一度きりというのでもなければ、手を組む余地はあるだろう」

「……それなら、同盟相手が私でなくてもいいはずですが」

師匠は、やはり慎重に口にした。

この期に及んでも、師匠はけして安直には応えなかった。それだけが生き残る方法だと知り尽くしているのだった。

「それでも私を選んだのは──もしもその秘法を施すのに何年もかかる、あるいはひとりきりにしか施せない場合──あの中で私が一番楽に殺せると思ったからですか」

師匠の問いに、にんまりとオルロックは笑った。

顔中を埋め尽くした皺が倍も増えたように見えた。複雑な陰影が 老人の顔を妖魔のそれに変貌させ、思わず喉を鳴らしてしまった。

「おうおう。怖い怖い」

と、剽軽な仕草でオルロックが手をあげた。

「まあ、秘法がひとりきりにしか施せないなら仕方ない。そのときはもちろんわしが貰もらい受けるつもりさね。わざとらしく隠すつもりもない。だが、時間の問題については……そう、数十年ぐらいのことなら、おぬしが先に使ってもよいさ」

「私が先に?」

意外な申し出に、師匠が眉を寄せた。

「おう。もう数十年ぐらいは魔術刻印も問題あるまいし、わしも生き続けるつもりじゃからな」

くく、とまた老人が笑った。笑い混じりであっても言葉は本気そのものだった。さきほど魔術刻印同様に老衰してると口にしたのに、いや老衰していてもその程度の年月は支障なく生き続けられると断言したのである。

この老人は、もはや通常の魔術師の域さえも離れている。

人間どころか生物から外れつつあるバケモノなのだと、そんな風に自分の芯が納得させられてしまった。──たとえば、故郷で出会ったあれらのような。

「少し、訊いていいですか」

今度は、師匠から持ちかけた。

「ほう。わしに答えられることなら」

「ハイネさんが城を探索していた頃、あなたは何をしていましたか」

「ほ」

すると、おびただしい皺を寄せて、老人が目を見開いたのだ。

「まさか、これはあれか。アリバイとかいうやつか! おぬし、わ しにアリバイなど尋ねておるのか!」

怒るのではなく愉快極まりないといった表情で、オルロックが肘掛けを叩いた。

よほど楽しかったのか大きく開いた口には、汚れた歯がほんの数本しか残っていなかった。ふわふわとその笑顔の周囲に、光る蝶が舞ったのである。

「だが、それが何になる? さきほどもこの蝶を見たろうが。今剝

離城にいるのは全員魔術師じゃぞ。俗じみたアリバイ確認が一体何になる?」

「同時に、ここはアッシュボーン家の工房でもあります」

淡々と、師匠が言った。

工房とは、魔術師が自らの魔術を研ぎ澄ますためにつくりあげる 一種の『異界』だ。いかに強大な魔術師といえども、工房の主でな い限りは振るえる魔術や神秘に大きな制限を受けることとなる、ら しい。

師匠はさらに言葉を続けた。

「事前に仕込んでない限り、そうそう遠隔の呪いが通用する場所でもないでしょう。少なくとも、ハイネ・イスタリと正面から戦うような呪いとなれば、かなりの準備が必要となるはずです」

「……ふむ。なるほどなるほど。それは理屈だ」

面白そうに皺首を曲げて、飴色の肘掛けを老人はさすった。

「だが、まったく魔術師らしくはない。おぬしの思考は魔術をもっと俗に満ちた場所へ落とし、取り込もうとしておる。──幸せな道とは言えぬぞ」

۲.....

師匠は反論しなかった。

老人の言葉をずっと前から覚悟して、受け容れていたようでも あった。

そのせいか、老人もそれ以上は言いつのらなかった。

代わりに、

「あの時間なら、わしは占星術師のフリューとチェスをしておったよ。証拠になるかどうかは分からんが、少し前にアッシュボーンの 従僕を呼んで、酒の肴にスモークサーモンを持ってこさせた。なん なら確認しておくとよい」 背後で、少年が黙ったままうなずいた。

「ありがとうございます」

と、師匠も頭を下げた。

それから、オルロックが切り出した。

「……ついでに、もうひとつ教えてやろう。若き君主ロードよ」

「もうひとつ、ですか?」

「おう。この事件はな、ゲリュオン・アッシュボーンの呪いよ」 ごくり、と唾を飲み込む音が聞こえた気がした。

自分と師匠、どちらだったろう。

「呪い?」

もちろん、魔術師たちの世界には呪いも実在する。

地域や魔術系統によってその在り方はさまざまだが、つまるところは不幸と災いを招く術式だ。

しかし、その言葉で師匠と自分が緊張を漲みなぎらせたのは、術者の死によって呪いの『力』を高めるという術式も一般的だからだ。まして、その名も高きゲリュオン・アッシュボーンが自らの命を術式の糧としたならばどれほどの凄まじい現象を引き起こすか、自分には想像もつかなかった。

たとえば、この剝離城に集まった魔術師を絶滅させるほどの―

「なぜ、呪いだとお思いですか?」

 $\iota < \langle \ \rangle$

オルロックが、また笑う。

干からびた髑どく髏ろが、かたかたかたと欠けた歯を打ち鳴らす のに似ていた。

「ゲリュオンにはな。息子がおった」

「息子? 時計塔には登録されてなかったですが」

「それはそうさ。この田舎から出る前に、死病に倒れたからな」

初めて聞く情報に、師匠の眉が曇った。

「魔術師として、という前置きはつくが可愛がっていてな。わしもずいぶんとのろけられたものさ。息子を産んですぐに妻が亡くなったことも大きな理由じゃったろうが、同じ病で倒れたのはなおさらに痛かっただろう。生命の因果に―現代医学だと遺伝子とやらに基づく業病でな。ドルイドから取り寄せた秘薬も役にはたたなんだ。日一日と愛する妻が弱っていったときと同じように、息子はその命を取りこぼしていった。ああ、どういう気持ちだったろうな」

(.....)

魔術師は基本的に自らの子供を愛する。彼らの見据える目的は何代も先にしか到達できぬものであり、魔術刻印の特性からしても直系の子供以外には託せないからだ。

だが、オルロックの口振りではそれ以上の意識を、かつての剝離 城の主は抱いていたらしい。

なぜなら、老人は続けてこう口にしたからだ。

「その息子が死んだとき、ヤツは狂ったのよ」

「狂った?」

「おうさ」

うなずき、車椅子の老人は遠い目になった。

遥か彼方──老人がまだ熱情や信頼といった類の精神こころを信じていられた頃かもしれない。

「なぜ呪いだと思うか、と言ったな」

と、老人は皺だらけの顔を歪めた。

ありとあらゆる感情が、その皺に込められていた。色という色を 混ぜ合わせれば黒になるように、老人の顔は幾千幾万という皺に塗 り込められていた。

「わしには分かるのさ」

そして、続けた。

「わしとゲリュオンは、昔、この剝離城アドラでとある研究をして おったのよ」

一同じ頃。

彼女もまた、事件を別の角度から観察しようとしていた。

アンティークの椅子に座ったまま、もう数十分ほどもテーブルの 地図や小道具にあれこれと触れている。

この部屋だけは模様替えされていた。

気分が良くないという一言で主人の意図を察して、わずか数時間で部屋の刷新を終了した第二従僕の手際である。もともと移動は自家用のカーゴへリかジェット機が基本であり、最低限の家具はいつも運搬させているがゆえの荒技だったが一そういう作業をしていたため、昨夜はロード・エルメロイII世の訪問をルヴィア自ら応対するはめになって、あのような事態ともあいなった次第だ。

「……とりあえず、ですわね」

と伸びをしたタイミングで、横合いから声がかけられた。

「お嬢様」

「何? クラウン」

「紅茶をいれました。気分転換にどうぞ」

実にミスマッチなモヒカンの執事姿で、サングラスの第二従僕が 一礼し、紅茶を差し出したのである。

温度も蒸し加減も完璧な──もちろんルヴィアにとってはいつもの ──紅茶を唇に含むと、ようやく少女は表情の険をゆるめて、しばし その香りと味に心をゆだねた。ヌワラエリアのかすかに緑がかった 橙だいだい色の水面と爽やかな香気が、今のささくれだった気分を 静めるにはもってこいだった。

ほんの少しだけ濃い味になっているのも、きっと少女の気分に合わせたのだろう。

数分ほど味わったところで、

「いかがですか?」

と、第二従僕が低い声で尋ねた。

主人の気分を害さない程度の、しっかりとしつつも抑えた声量。 行き届いた教育に、満足とほんの少しの憂鬱さを感じつつ、少女は ティーカップから唇を離した。

「そうね。一応カタチにはなったけれど」

と、目を細める。

ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトにとって、この城にやってきたのはいわば稼業の一環であった。オルロック・シザームンドも言っていたが、口さがない者は『地上で最も優美なハイエナ』などと呼んだりする。無論エーデルフェルト家にとってみれば秘奥を守り通せない方に問題があり、自分たちの方が正しく管理・活用できるという自負あってのことだ。

だから、この一件も彼女にとってはいつもの日常に過ぎない。

そのはずだった。

「.....後はやってみるしかないわね」

もう一度、テーブルの地図に視線を戻す。

あらかじめ購入していた古地図である。もちろん剝離城の詳細は描かれておらず、あくまで公的に登録された偽装の建物が記入されている地図なのだが、その上にいくつもの貴石が転がっていた。

紅玉ルビー。

蒼玉サファイア。

翠玉エメラルド。

金剛石ダイヤモンド。

いずれも、ここに目利きがいればたちまち奮い立つ逸品ばかりだった。輝きや大きさはもちろん、職人による処理やカットも鮮やかな貴石の数々。それらの宝石とルヴィアとはまるで視みえない糸でつながっているかのような、不思議な圧力を生み出していた。

宝石魔術。

エーデルフェルト家が最も得意とする、『念を貯めやすく魔力を蓄積しやすい』という鉱石の特性を利用した術式である。手元の宝石たちの輝きを見つめ、研ぎ澄まされた集中とともにルヴィアは目を閉じる。

イメージは心臓。

宝石となった自らの心臓にひびが入り、砕け散る。

指先まで幻想の音が伝わった刹那、少女の身体は『神秘を成す歯車』となりはてる。神経は総数百に至る魔術回路に挿すげ替えられ、あまねく大魔術式へとつながって、少女の認識を幽体まで行き渡らせる。

その感覚とともに、唇を開いた。

「Call目覚めよ」

静かに呼びかける。

吐息に押されたごとく、宝石が動き始めた。球形に磨かれたわけでもない宝石たちが、微細に揺れ始め、物理的にはありえない動きで転がり始めたのだ。

彼女がやっているのは、宝石によるダウジングであった。

地下水や鉱脈を探すために用いられるダウジングの手法は、一般にもよく知られている。二本の折れ曲がった棒を使い、あちこちを歩きまわるダウザーの姿はさまざまな書籍やテレビでおなじみのものだ。

今は、そうした古典的な技術にルヴィアなりの工夫を加えていた。

「Thou art the Mars, blessing fram war deity汝は火星なり。戦神の 息吹を受けるものなり.」

紅玉ルビーに吐息を吹きかけ、その意味を賦活させる。

どの宝石がどの惑星に所属するかは魔術や地方によって大きく異なり、ルビーの場合太陽とも金星とも言われる。

しかし―

(一カバラなら火星)

シェムハムフォラエを使っているからには、この剝離城の魔術は 基礎にカバラを採用しているのだろう。完全に合わせるのは無理で も、同じ論理の方が魔術も通りやすいはずだ。

(色は赤、数字なら5、金属ならば鉄、守護天使はカマエル)

ルビーが属する器セフィラの性質を、つらつらとルヴィアは連想 する。

とりわけ最後の単語に、軽く歯嚙みした。

ここでも天使だ。

カバラが聖書を礎にした魔術である以上天使が頻出するのは当然なのだが、それでもここまで繰り返されれば苛立ちを抑えるのは難しい。その苛立ちさえ魔術に必要な集中力へと変換しながら、少女はさらに蒼玉サファイアへと視線を移す。

「Thou art the Jupiter, blessing fram our father汝は木星なり。父神の息吹を受けるものなり.」

翠玉エメラルド、金剛石ダイヤモンドへと同じ儀式を繰り返す。

それにつれて、宝石の速度にも勢いがついていく。

ぐるぐると巡り出す宝石たちは、まるでそれぞれの重力で引き合い、公転を繰り返す天球図のようであった。もとより宝石が大地から掘り出された地球の一部であることを思えば、そうした動きを取るのが魔術にとっては自然なのやもしれなかった。

古地図の屋敷を中心に、宝石たちはぐるぐると回る。

Г......

ルヴィアの瞳も、その宝石たちを注意深く見つめていた。

自らが仮想的な意味と生命を与えた小宇宙ミクロコスモスを前にして、ひとりの魔術師としてその行き着く果てを一瞬も見逃すまいと、目を凝らす。

しかし、それらの軌跡は突如透明な手に遮られたかのように方向を転じて、迷走したあげくに動きを止めたのである。

「……やはり、妨害されてますわね」

と、少女は囁いた。

モヒカンの第二従僕──クラウンもまたその地図と宝石の並びを見 やって、遠慮深げに口を開いた。

「いまだ、アッシュボーンの結界が効力を残してますか」

「仮にも魔術師の工房なら当然……ではありますけど、不可解な点は残ります」

古地図の端をなぞって囁いた少女に、第二従僕は訊き返す。

「不可解、ですか」

「ええ。……もちろん、わざわざ殺し方を予告していることです」

「……Hachasiahハハシアでしたか」

第二従僕が、殺された化野菱理の〈天使名〉を呟く。

「私のMichaelミカエルなら、左脛けい骨こつになりますわね」

七十二天使と人体の照応ぐらいなら、ルヴィアもそらんじられる。

もっともあの男に言われるまで、死体の損壊と天使との一致に気づかなかったのも事実で、それがなおさら彼女を苛立たせているのであった。シェムハムフォラエのこともそうだが、とにかく不必要なぐらい他人の魔術に興味を示し、あっさりと見抜いてくるあの君主ロードの在り方が心のどこかに棘のように刺さっていた。

(......他人など、どうでもいいでしょうに)

もちろん参考になる技術は多い。

エーデルフェルトなどそうした秘法や魔術礼装の簒さん奪だつで成り上がった家系だ。

だが、その上で魔術師が他人に興味を示すのは、所詮自分の魔術を磨くために過ぎぬ。秘法も財産も、最後は自らの向上あってのこと。最終的には根源へとつながるという信念あってこそ、魔術師は妄執を積み重ねることができるのだ。

手段と目的は常にはっきりしており、いかに生まれや環境が違おうとも魔術師である限りは──そう、たとえ汚らわしい魔術使いであるうと、他人の技術など自分を磨くための材料に過ぎない。

だが。

あの男は、どこか逆転している節があるのだ。それはもはや魔術師どころか魔術使いですらない。時計塔の秩序のために神秘の追究を手段とした法政科とさえ異なる。だからこそ、少女の胸は言いしれない不安と焦燥に掻き乱されるのだった。

「──何かの魔術のためでは?」

従僕の言葉で、少女は我に返った。

「ルヴィア様?」

「いえ、死体の損壊についてでしたわね」

こほんと咳払いしてから、

「その可能性も考えましたわ。死霊術ネクロマンシーに限らず、黄道十二星座と照応する部位を魔術師から奪うなら、相当多くの術式に転用可能ですもの。十分以上にありえると言っていいでしょう。 ……でも、やはり私たちに向けて予告する必要がありません」

少女の瞳はあくまで冷ややかで、精密な実験を見つめる科学者を 想起させた。

「せめて、アッシュボーン家の従僕から、何かしらつかめればよかったのですけど」

もちろんルヴィアたちは、アッシュボーン家の従僕たちにも聞き 込みをした。

が、案の定というか、アッシュボーン家の従僕は何も知らなかったのだ。示し合わせて嘘を述べている可能性もあるが、もともと魔道の家系は後継者以外の子供には魔術の存在を打ち明けないことも多いほどだ。今回の殺人事件が本当に亡きゲリュオン・アッシュボーンの仕業だとしても、従僕程度には何も教えておかない方が普通だろう。

「単純なアリバイなら、なんとか分かりましたけれど」

アッシュボーン家の従僕に聞き込むのと同時に、ほかの魔術師に も事件発生時と思われるタイミングでの行動を尋ねている。さすが にオルロック老に直接訊くのははばかられたが、それ以外の言い分 はこうだった。

- ──『残念ながら第一発見者の私には、有利な証拠がありませんね』
- ──『お兄様を自室で待ってました。争いはともかく、お兄様が死体を辱めるなんて、そんな残酷な真似をするはずありません!』
 - ─ 『私なら、グレイと一緒に就寝していたな』
- ─ 『ん? その時間ならオルロックの爺さんとチェスしてたぜ。 あの爺さん、腕は並なんだけど、とにかく手が粘っこいんで閉口し

たっつの』

― 『わいはアッシュボーンの従僕さんに酒を持ってきてもらって たな。なんなら訊いてもらってもええけど』

結果として言えば、それぞれのアリバイはこんな風になる。

ハイネ:×

ロザリンド:×

エルメロイとグレイ:△

フリュー:○

オルロック(とその助手):○

清玄:○

エルメロイとグレイが△なのは、アリバイが身内同士でしかないからだ。

もっとも、魔術師たちにアリバイがあったところで、殺人に関わらなかった証拠にはならない。ここがゲリュオン・アッシュボーン家の剝離城である以上ほかの魔術師に行使できる魔術は限られてくるが、それは化野菱理の殺人が不可能ということにはならないからだった。

「.....でも、あんな風に死体を持ち上げて彫像の剣で刺すのは難しいでしょうね」

と、少女は付け加えた。

有名なところでは念動力などもあるが、案外純粋な魔術で物体を持ち上げるというのは難しい。そもそも魔術とはまわりくどい方法によって現実の世界を騙すものなので、そういうわかりやすい効果を期待するならば、身体を動かした方が早いのだ。

それでも魔術でやるなら──最もたやすい方法は使い魔だ。ハイネが見たという獣のような存在はなるほどうってつけだろう。

(天使と獣.....)

それも、比較的頻見されるモチーフだ。

最も有名であろう楽園を守る獣ケルブは、スフィンクスやメソポタミア神話の翼ある獅子アンズーと同様のルーツだと言われている。こうした翼と獣の組み合わせはさまざまな系譜が存在し、たとえばヴェネツィアの守護聖人である聖マルコのシンボルも『翼ある獅子』とされている。

ゆえに、一度こっちの方向を諦め、少女の思考はもっと手近な部分へと戻った。

「では、どうして法政科の魔術師が殺されたのかしら?」

「アッシュボーンの遺産、ないしその手がかりを見つけたからでは」

「彼女も〈天使名〉を持っていた以上、その線はありえますわね。 管理人といいつつ、自分も遺産を受け取る資格者だった可能性は濃厚です。──でも、やっぱり予告する必要は解明できません」

紅玉ルビーに、しなやかな指が触れた。

愛あい撫ぶするように優しく、同時に少女自身の精神こころの中を探るかのように用心深く触れられるうち、緋色の宝石は角度とともに何度も輝きを変じていく。

少し考えて、ルヴィアは可憐な唇を開いた。

「たとえば……誰かへのメッセージとか」

「メッセージ?」

「ええ」

肯定して、少女は浮き上がってきたアイディアを言語化する。

「集められた中で、メッセージが意味を持つ相手がいるのかもしれ

ない。さあこれからこのように殺していくぞと伝えることで、その 相手の反応を待っているのかも」

「……なるほど」

第二従僕が、小さく何度かうなずく。

いかにも主の慧けい眼がんが頼もしくてたまらないと言うようだった。

それから、別の話題を切り出した。

「あの若い君主ロードが気になりますか」

「つー!」

その言葉に、一瞬少女が口ごもる。

だが、数秒足らずで素知らぬ顔に戻り、第二従僕へと訊き返す。

「どうしてですの」

「……お嬢様がぬいぐるみの手入れを自分で始めるのは、たいてい何か気になって仕方ないことがあるときですので」

サングラス越しにちらりとベッドへ視線をやって、クラウンが言う。

擬人化された犬のぬいぐるみは綺麗にブラシをかけられて、枕元 に座っていた。

「……ちょっと汚れていただけです」

もごもごと、少女が小さな声で主張した。

それから、

「とはいえ、気にならないと言えば嘘になりますわね」

ルヴィアの眉に険が宿る。

だいたい、あれだけ若い君主ロードというだけでも異例なのだ。 とびきりの例外がいるにはいるが、時計塔の君主ロードの中でも最 も若いひとりには違いあるまい。

否。

若いというのは、彼個人のことではない。本来、あの男の家系は君主ロードどころか時計塔に招き入れられるかどうかも怪しいレベルなのだ。招待客について必要なデータはすでに第クニラ従ウ僕ンに集めさせている。彼の家系が魔術師となったのはわずか二代前。何代もかけて神秘を追究する魔術師が、たった三代で君主ロードになるなどというイカサマが成立したのは、本来の後継者が彼を後見人に指名したからだ。

ライネス・エルメロイ・アーチゾルテと言ったか。

先代のエルメロイが亡くなって後継者闘争のあげくにああいうカタチになったようだが、見方によっては幼い娘に悪辣な魔術師が取り入って、君主ロードという果実を勝ち取ったとも考えられる。

(......そこまでの悪人かどうかは分かりませんけど)

今のところ、ロード・エルメロイII世の評価は保留だ。個人的な好悪の念と、絶対的な評価とを一緒にするわけにもいくまい。

しかし、少女はある種の確信も持っていた。

きっと自分とあの男とは相容れない。

どうしようもなく、根底からずれてしまっている。

そこで、少女は不意に顔をあげた。

ノックがあったのだ。

視線だけで指示を出すと、すぐさまクラウンが動いた。扉の死角 側に身を預けて、手の甲でノックに応える。のんきに開いたドアが 人影を吐き出し、

「うお!」

と、叫び声をあげた。

扉を開けた先で、モヒカンの第二従僕が拳を構えているとなれば

当然だろう。

「おいおい。頼むから、物騒な歓迎はやめてくれよ?」

両手をあげて、人影がごくりと唾を飲み込む。

モヒカンの掲げた拳には、掛け値なしの殺意が籠もっていたからだ。体長二メートルの巨漢というだけでも十分な迫力だが、巨漢の構えからはそれ以上の圧力が発せられていた。魔術師であるかどうかは分からぬが、その名も高きエーデルフェルトがただひとりと言われて選ぶ従僕が、ただのボディガードであるはずもない。

来客の名を、ルヴィアが呼んだ。

「占星術師のフリュー」

その瞳は魔術に向かったときと同じ、昂こう揚ようと裏腹の冷や やかさを取り戻していた。

「別に、そのままクラウンに打ち抜かせてもかまいませんのよ。わざわざこちらの部屋に踏みいるとはそういうことでしょう? とりわけ今は少々機嫌が斜めですの。心臓のひとつも捧げていただければ、興が乗るかもしれません」

「はは。さすがはエーデルフェルトの姫様か」

無精髭をさすって、壮漢の占星術師は嬉しそうに笑ったのだった。

*

ちら、とテーブルの古地図と宝石を見て、フリューは口笛を吹い た。

「やっぱり占ってたか。いくらあんたでもうまくいかなかったろう」

「……さて、どうでしょう」

「はは、そう強がらないでくれよ」

言葉を濁した少女に、中年の占星術師は片目をつむる。

「これでも占星術師だぜ。エーデルフェルトお得意の宝石魔術は専門外だが、途中で星ほし占うらの術式を嚙ませてるなら一発で分かる。あーあー。だからって恥ずかしがる必要もないぜ。なんせ他人の魔術師の工房だ。土地も空気もこっちの思い通りになりゃしない。まあ仕掛けたゲリュオン・アッシュボーンにしても、占い一発でクリアされちゃあたまったもんじゃないだろ。あの殺人がゲリュオンの差し金かどうかまでは分からないがね」

長口上は、隣のモヒカンよりもよほど道化クラウンめいていた。

今も、第二従僕は構えを解いていない。ひとつ間違えばその拳が飛んでくることは明白で、仮に拳を逃れられたとしても、主たる少女ルヴィアの魔術はもっと恐ろしい。それを十分承知しながら、フリューは軽口をやめることはしなかった。

テーブルの上の宝石に、少女が触れる。

宝石魔術にとって、宝石はあらゆる魔術の源泉だ。今の少女が やっていることは、哀れな人質を前に拳銃をもてあそぶ行為に等し かった。いいや、エーデルフェルトの家名や少女の実力を思えば、 拳銃どころか機関銃ガトリングや榴弾砲グレネードランチャーにた とえた方がふさわしいかもしれない。

優美そのものの威圧を誇りながら、ルヴィアが囁いたのである。

「では、あなたなら違うと?」

「……俺は占星術師だぜ? 専門家だよ」

フリューの汚れた手が、民族衣装の上から腰のベルトのあたりを 撫でた。

そこに仕舞われた十二本──黄道十二星座と照応したナイフは、昨日の会食でも見せられたところだ。ルヴィアが宝石の蔵する魔力を手繰るならば、フリューは惑星になぞらえたナイフを操る。

「ついでに言えば、俺は別にここの秘法でなくてもいんだよ。最後 に金にさえなってくれればそれでいい」 フリューの発言は、まさしく俗な魔術使いそのものだ。彼にとっては魔術も金儲もうけの手段に過ぎないのだろう。

ただ、その目的は、ルヴィアにしてみればあの若き君主ロード以上の不快さとはならなかった。むしろ、それなら理解の範疇内だからだ。

「あんたは逆に、ここの秘法が手に入るなら金に糸目はつけないだろ?」

いかにも胡う散さん臭くさげに唇の端を歪め、フリューが言う。

「自分を雇え、と仰りたいわけ?」

「ご明察」

にまっと笑って、フリューはぱんと胸のあたりを叩いた。

不思議と、そういう顔があまり卑しくはならない男だった。人 懐っこさのゆえかもしれない。人徳というよりも天性のなせる業と 思えた。

「先に出会った筋から言うと、ロード・エルメロイII世に言うべきかとも思ったんだけど、ほれあいつ貧乏そうだろ?」

財布が軽いんだといった感じの仕草をしつつ、残念そうに片眉を あげる。

ぎり、と空気が硬度を増した。

ルヴィアが紅玉ルビーのひとつをつまみあげたのだ。それだけで空気が奔騰し、少女に秘められた内燃機関が駆動し始めたことをフリューは理解した。身体中の産毛が総毛立つのを感じながら、フリューはふざけた顔で手を上げた。

「おいおい姫様?」

「雇えと言ったからには、腕を見せるのが道理でしょう。せめて生き残ってくださいませね。クラウン、横にどきなさい」

以前ロード・エルメロイII世に放った魔弾など、苛立ち紛れの軽いおどしにすぎなかったのだろう。今ルヴィアゼリッタ・エーデル

フェルトの指先に集まった魔力は、下位の幻想種すら爆はぜ散らすほどに漲っていた。

ふわ、と古地図に載っていた宝石たちが自然に浮遊する

それのみにあらず。ルヴィアの魔力に呼応して、それぞれの輝き を放ち、ゆるゆると魔力の渦巻きを描き始めたのである。

「エーデルフェルトの万華鏡、とくとごらんあれ」

微笑とともに発された囁きは、術式の名でもあったか。

万華鏡のごとく煌めく万色の魔力。それこそがエーデルフェルト の誇りを支える秘術に違いない。

「Call目覚めよ」

呼び声とともに、宝石たちとルヴィアの魔力がその指先に圧縮される。

「おおおっ?!」

刹那、フリューもナイフを引き抜いた。

咄嗟に中空に投げ放ったのは、食卓で占おうとしたときと同じ。 しかし、そこから占星術師は指を動かし、虚空に魔法円を描いた。

クラウンが横に飛び離れると同時、フリューもまた叫んだのだ。

「Lead me導きたまえ!」

輝きが、世界を圧した。

ルヴィアと宝石たちが放った魔弾はまさに万華鏡。その輝きは美 しき死神となって降り注ぎ、轟ごう音おんと粉ふん塵じんとで部屋 を残らず埋め尽くす。やがて、くすぶった煙が落ち着いた頃、打ち 砕かれた壁と床は爆心地のごとき様相を呈していた。

満足げに見下ろしたルヴィアは、

「お見事」

と、賞賛した。

その爆心地の隅で、中年の占星術師はまるまった亀みたいになっていたのだ。

ごほごほと咳き込みつつ、フリューが抗議の声をあげた。

「……くそったれが。マジに殺す気か!」

「あらお言葉ね。自分の死も占えないような占星術師は不要です わ。今のはそういうことなのでしょう?」

ルヴィアの言葉は、魔弾をフリューが避けた術式について触れていた。

超短期的に因果律へと干渉し、『自分の安全な場所』をつくったのだと彼女は見抜いたのだ。つまるところ、よくテレビの占いなどでいう『幸運な方位』と一緒である。積極的に方位の幸不幸を利用する魔術は、風水やそれに端を発する陰陽道の方かた違たがえにも見られるが、かほどの魔弾を回避する手際はなかなか見られるものではない。

「くっそ一張羅が焦げまくりだぞ。あああ、触媒カタリストまでやられてやがる! てめえ、賠償金は覚悟しろよ!」

一度死にかけたためか、口ぶりはなおさら杜ず撰さんになってい た。

もっとも、少女の方は涼しい風で受け流したものだ。

「小切手を渡しますので、お好きに請求なさいませ。ああそうそ う。あなた、占星術師であるのと同時に殺し屋でしたわね」

「傭兵だっつの」

「似たようなものでしょう」

「それ、まともな傭兵が聞いたら犯されても文句言えねえぞ。──つか、法政科をやったのあんたじゃなかろうな」

歯を剝いて、フリューがぱんぱんと民族衣装の肩口を叩く。

「あら、だったらどうします?」

「別に。こんな状況で他人に食われても、魔術師なら文句言えない だろ。秩序を預かるとかのたまう法政科ならなおさらな」

「そうね。魔術師ですもの」

ルヴィアが、淡く微笑した。

ほんのわずか、自嘲めいたものもその内側に含まれてはいた。あれほど凄惨な事件に遭遇しても自分たちは変わらない。変われない。何代も何代も積み重ねた在り方は、尾を喰らう蛇のように誇りも価値観も蝕むしばんでしまっている。どれほどくだらないと思っていても、そんな在り方こそが貴く見えてしまう──魔術師として根付いてしまった自分からは逃れられない。

美しい光よ、去れ。

我らは醜い闇を望む。

停滞と安寧こそ夜の真実なれば。

「ああ、もしあんたが犯人で手伝えってならそれでもいいさ。規定外の依頼なら色はつけてもらうが、エーデルフェルトならいくらでもつけてくれるだろ。だけど、あのシザームンドだけはご遠慮願うぞ。いくら金を積まれても、あれと張り合える気はしねえ」

「結構ですわ。私もそんなことは望んでません。価値ある相手は価値ある者こそが手にかけねばなりませんもの」

小さく、少女がうなずく。

自分こそその価値ある者だと、疑いもしない態度だった。

「あなたに間引いてもらうとしたら、手をかける価値のない相

手.....」

そこで、一旦言葉は途切れた。

ふわりと、少女の笑みの質が変わった。

残酷なまでに優しく唇をほころばせ、ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトはこう囁いたのである。

「ロード・エルメロイII世を葬っていただけませんか?」

一三日目の朝。

窓の向こうでようやく昇り始めた朝日を恨みがましく睨み、師匠 は瞼を擦りながら、剝離城の廊下を歩いていた。

自分はすぐ後ろで、隣を行くもう一組をちらちらと見やっている。

もちろん、オルロックとその助手だった。

「ほう。現場の調査に戻るのか」

師匠の行く手を知って、老人が口にした。

中央の吹き抜けに天使の像の配された、化野菱理が殺されていた 広間であった。

広間の扉にはプレートがかかっていた。前は気づかなかったがこ の部屋にも名前があるらしい。

「……ええと、Chamael?」

「カマエル。シェムハムフォラエとは別だが、生命の樹セフィロト に照応する関係からカバラでも中心的な天使の名だな。同じく蠍さ そり座ざや火星に縁の深い天使で、火曜日の守護天使などとも言わ れるよ」

と、師匠がつらつら口にする。例によって魔術師には常識的な内容なのだろうが、こうも毎回こともなげに言われるとなんだか癪な 心持ちもする。

「破壊の天使たちを指揮するゆえ、悪魔と同一視されることも多い 天使だの」 追い打ちとばかりに、オルロックまで付け加えた。

ちなみに、車椅子を押している少年はまったく喋らなかった。案 外人造生命ホムンクルスという可能性もありえる。

「―やたらに足音が響くな」

踵で床を叩いてから、おもむろにひざまずいた師匠へと、オルロックが尋ねた。

「しかし、現場を調べたければ、死体を見つけてすぐやればよかったろうに」

「あのときは、ほかの魔術師との殺し合いになりかねなかったですから。——番恐ろしかったのはあなたですよ」

「おやおや」

師匠の答えに、くくくと楽しげに笑う。

まったく事情を知らない者なら、案外仲のよい祖父と孫に見えるかもしれない。ただしその内幕はいつ命の取り合いになってもおかしくない──いや、互いの実力差を考えれば一方的な殺さつ戮りくとしかならない組み合わせだ。

すでに死体はアッシュボーンの従僕たちの手で片づけられていたが、まだあちこちに血痕が残っていた。

そのひとつひとつを検証しながら、師匠が視線と指先を移してい く。たまにジャケットの内側から取り出しているのは、なにやら薬 液の入った試験管であった。

一滴、血痕のあたりに垂らすと、じわと変色した。

その様子に、老人が興味深そうに顎元を撫でた。

「ふむ。化学というよりは中世初期の錬金術か。いや、むしろ大釜 派の魔女術ウィッチクラフトといった方が正確かな」

「血痕に残っていた魔力の濃度を調べて、ミス化野がいつ死んだのかを特定してます。これも魔術には違いないでしょう」

「もちろんもちろん。魔術と科学が夜の褥しとねをともにしていた 頃の懐かしき代物さ。とはいえ発想はいささか現代によりすぎてお らんかな。直截すぎるやり方は神秘から遠のくぞ」

掛け合いが楽しくてたまらないと言うように、車椅子の老人は言葉を投げかける。

「いろいろ試しましたが、結局こういうのが一番得意なものでし て」

言って、師匠の捜査はそのまま丁寧に続けられた。

一滴垂らして色の変化を見守ってはまた場所を変えて一滴。色の変化を確かめてメモに取り、時々別の試験管を取り出しては元の場所に垂らしたりする繰り返しだ。正直こんな状況でなければ、自分はあっという間に辟へき易えきしてしまいそうな地道すぎる捜査なのだが、オルロックは飽きもせず、まるで初めての昆虫を見つけた子供みたいな表情で眺めていた。

「わしのところに来た〈天使名〉はNanaelナナエルだったな」 ぽつりと、オルロックが言った。

「支配宮は白羊宮。その意味は誇りの失墜」

「おう。もしおぬしの推測通りであれば、わしは舌を引き抜かれて 殺されよう。くく、それはそれで愉快だろうな」

۲......

黙ったまま、師匠はまた薬液を一垂らしした。

窓に映った朝日が徐々に昇っていき、今日の朝食はどうなったんだろうとそんなことを自分は思い始めていた。よい匂いがかすかにしているあたり、昨日のように広間での朝食会も行われていたのかもしれない。

まるで化野菱理の死などなかったかのように。

あるいは、そんなものは魔術師にとっての日常でしかないよう に。 「.....やはり、おかしい」

ふと、師匠が顎をさすった。

「何がだね?」

「……眼鏡はどうしたんでしょう」

奇矯な発言に、自分ばかりか老人も眉をひそめた。

「ほう?」

「死体は眼鏡をかけてなかったでしょう」

「それはまあ、眼鏡をかけたままでは眼球を抉れまい」

至極当然の理屈を老人は口にする。だからこそあの場の誰も、その事実には触れもしなかった。眼鏡なんて付属物よりは眼球を抉られたという事実の方が遥かに重かったから。

「……ええ。しかし、この通りならミス化野の死んだタイミングは……」

そこまで、師匠が言ったときだった。

「おや、手を組んだのかな?」

と、老人が振り返ったのだ。

さきほど入ってきた広間の扉から、新たな人影が差したのである。

師匠とオルロックもそうだが、この組み合わせもずいぶん不釣り合いではあった。どんな舞踏会に出ても客人の目を奪うだろう美貌の少女と、砂漠かどこかを旅しているところしか想像できない垢じみた占星術師。

ルヴィアとフリューだった。

モヒカンの第二従僕も、その背後に控えていた。二メートル近い 巨体が意外なほど存在感を消しているのは、従僕という職業ゆえの 技術だろうか。 「やあ、悪いな」

と、フリューが頰を搔いた。

言葉面とは裏腹に、まるで悪びれてない笑顔ではあった。札束の厚さでも示すみたいに、親指と人差し指で幅をつくってみせる。

「ちっと積まれちまってさ。こっち側につくことになったわ」

「別にかまわないとも」

と、師匠が受けた。

こちらは床に這い蹲つくばったままである。試験管に加えて、虫 ル眼ー鏡ぺまで用意して、薬液と色の変化を確かめている。

「ただ、できれば今は邪魔しないでもらえるかな。調査中だ」

「それで、何が分かると言いますの?」

と、自分は眉をひそめた。

何が気にくわなかったのか、ルヴィアの声には隠しきれぬトゲがあったからだ。いや、もちろんふたりの相性が悪いのか出会いが悪かったのか、最初から険悪気味であることは確かなのだが、今はそれ以上の何かを感じたのである。

「いろいろだよ」

「いろいろ? ろくに手の内も知らない魔術師同士で、何が分かると言いますの」

もう一度、同じことを少女が問うた。

いい加減な答えは許さないという意思表示でもあったろう。対する師匠は視線をあげることもせず、薬液の変化にのみ注目しながら口を開く。

「ああ、意味がないよ。特にハウダニットはね」

「ハウダニット?」

「推理小説の専門用語だよ。つまるところは『どうやってやったか』ということだ。似たところでフーダニットは『誰がやったか』だな。魔術師がどんな超常現象を起こすか限定できない以上、このふたつに意味はない。ゲリュオン・アッシュボーンが残した謎かけも、今回の事件も、まともな推理なんか成立する余地はない」

師匠の言葉は、なんとなく自分にも分かった。

自分の故郷でも、いくつかの探偵小説は並んでいた。そうした名 探偵は常にスマートで、ほかの答えの介在する余地がない推理を閃 かせていたが、こと魔術師の関わる事件で同じような手際を見せる とは思えない。あるいは壁をすりぬけ、あるいは空を渡る魔術師が 相手では実行可能な犯罪方法が無限に広がってしまうからだ。

「だけど、ホワイダニット──『どうしてやったか』は、ひょっとしたら例外だ」

ゆっくりと、師匠は付け足した。

「たとえ起源とは違っても、属性はその人間の性質に根ざす。魔術もまたその例外じゃない。生まれる以前からずっと魔術という物語に浸ってきた魔術師は、抗うにせよ受け容れるにせよ、必ずその内面まで侵食されることとなる。その意味で魔術師ほど嘘のつけない人種はいない」

静かに語りながら、師匠の瞳はやはりずっと床を見つめていた。

時には刷は毛けで埃を払い、時には拡大鏡を使いながら、いまだに薬液と闘っている。よほど集中しているのか、額にはじっとりと汗が浮いており、それが血痕に垂れぬよう時々手の甲で拭き取っていた。

「だから、解き明かせるものでなくても迫ることはできると信じている」

「どのように?」

まだ、少女は粘った。

師匠の言葉が理解できないのではなく、証明してみせろと言ってるのだ。挑発的な物言いを前に、初めて師匠は顔を上げた。

「たとえば、エーデルフェルトの宝石魔術なら」

「っー!」

少女の滑らかなこめかみが引きつった。

「宝石と魔術の関係は、メソポタミアや古代エジプト―つまるところが人類の歴史とほぼ同時期に発生した宝石幻想に起因している。 もとより宝石は王の象徴でもあり、錬金術や錬丹術に見られるように不老長寿の薬としても用いられてきた。『アリストテレスの鉱物書』はもちろん、あらゆる石を四元素と四つの基本性質、四つの体液によって区分したヒルデガルトの『自然学』が有名なところだろう」

師匠が述べる著書については、覚えがあった。

たしか『アリストテレスの鉱物書』は表の歴史的にも大きな意味を持つ書物であり、とりわけ七十二の鉱物について著述をまとめ、単に鉱物や薬剤としての説明をするのみならずパワーストーンの源流ともなった書籍のはずだった。

......また、七十二だ。

魔術的に大きな意味を持つ数字であり頻出するのは分かるのだが、これだけ続くとそれ自体が呪いのようにさえ思われた。

「しかし、前のガンドを見る限りでは、君のそれはむしろ北欧圏の魔術に近い。自らの血や体液で染色し、魔力そのものの流動に宝石という媒体を使った特殊なルーン魔術と見るべきだ。本来ルーンは衰退した魔術系統だが、エーデルフェルトはそこに宝石を取り込んだことで新たな境地を切り開いた。呪文スペルを英語にしていることも似たような事情からだろう。……これらの結果として言えば、君の性質は宝石などの煌びやかな価値を誇る、ある種の貴族のようなものではなく」

「やめなさい!」

悲鳴のような叫びが、師匠の説明を引き破った。

「それ以上言うなら、塵ちりひとつ残しませんわよ」

これまでの憤怒に倍する―いいや比較にならぬほどの殺意が、少

女の総身から迸っていた。隣で佇んでいた自分さえ、思わず怯んで しまうほどの猛烈な威圧であった。

対して、

「……わしの友人を脅かさんでもらえるかな?」

オルロック・シザームンドが、愉しげに口角をつりあげたのだ。

もちろんルヴィアも老人の存在を忘れていたわけではあるまい。 しかし、今の単語が聞き捨てならなかったのか、ぴくりと片眉をあ げた。

「友人ですって?」

「そうさ。見所のある若者でね。ここで散らすには惜しいと思った。何かおかしいかな?」

おかしいかなと言いつつ、またくくくと笑う。

剝離城のロビーで初めてふたりが対峙したときと、まるで反対の 構図だった。あのとき不備を見抜かれたのはオルロックの側だった が、今は師匠の言葉によってルヴィアこそが丸裸にされかけてい た。

壊れた髑髏のごとき虚ろな笑い声におされ、金髪の少女は持ち上 げかけた指と宝石を仕舞い込む。

そのまま、師匠へと向き直った。

「なるほど。確かにあなたは魔術を愛しているのでしょう。ある意味で求道者といってもさしつかえありません」

憤然と胸を張り、言い放つ。

「ですが、魔術の本義からいえば、あなたはむしろ魔術の破壊者で すわ」

すると、師匠はひどく難しい顔になったのだ。苦渋を嚙みしめるような、その苦みすら舌の上で転がして懐かしむような、ひどく不 思議な表情だった。 「……昔、似たことを師に言われたよ」

「さぞ優秀な師だったのでしょうね」

「もちろんさ。魔術師としてはこれ以上なく優秀だったとも。エルメロイの名に本当にふさわしいのはあの方しかいない。......いなかった」

皮肉げに浮かんだ笑みと会話の内容に、自分は思わず息を止めて しまっていた。

(____っ!)

ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。

師匠の師匠。

ひょっとすると……師匠が殺したかもしれない相手。

しかし、それを追及することはせず、金髪の少女は踵きびすを返 した。

「ごきげんよう。地面を這いずり回って、星の欠片でも見つかることを祈っておりますわ」

「じゃあな」

金髪を翻して少女が立ち去り、こちらに指を振ってからフリュー もその後を追った。

ふたりの気配が完全に消え去ってから、

「わざと挑発しましたね」

と、師匠は老人に向き直った。

「いや、ついやり返したくなっての。おかげさまで痛快だったぞ。 くかか、あのハイエナ娘がなんと不快そうに顔を歪めることか。寿 命が伸びるほどに胸がすいたわ」

澄ました顔で、老人が言ってのける。

稚気溢れると言ってもいいのだが、この場合の悪戯はひとつ間違

えば死に直結していただろう。

「......師匠」

思わず呼びかけてしまった自分の頭へ、フード越しに師匠の手が触れた。

こちらには視線を寄越さぬまま、しかし思いがけない柔らかさで 頭を撫でてから、

「守ってもらえたことには感謝します」

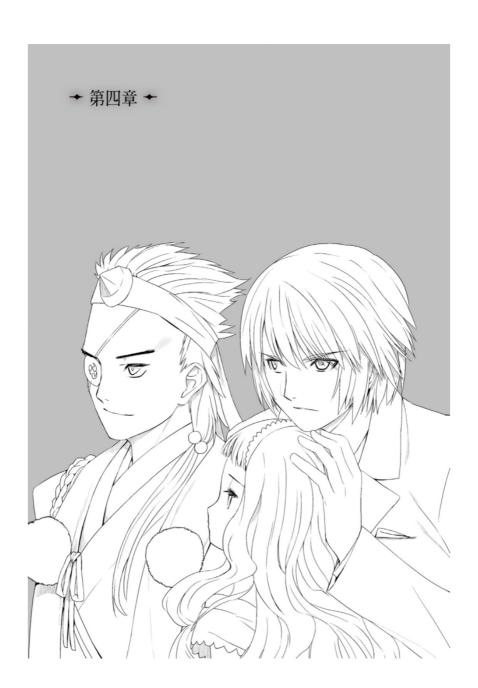
と、師匠は口にした。

「こちらも、おかげでひとつは発見がありました」

「ほう」

老人の目が細まり、再び大量の皺の中に埋まる。

「聞いていただけますか、オルロック老」



─イメージこそが、スイッチだ。

やり方は、魔術師によってさまざまである。

幻想の撃鉄を落とす者もいれば、心臓にナイフを突き刺す者もいる。案外多いのは性的興奮で、この手のタイプにはドラッグを必要とする者が多い。何にせよ、これらのイメージのスイッチで魔術師は体内の神経と魔術回路を切り替える。

魔術回路の起動によって、魔術師は基盤となる大魔術式へとつながり『神秘を行うシステム』へと作り替えられる。

フリューの場合は、渇きだった。

砂漠を歩く自分。どうしようもない喉の渇き。とうの昔に汗は枯れ果て眼球すら萎しぼんでいる。一滴の水が得られるなら、どんな犯罪でも──いいやそんな思考すら枯渇した果て。ただ純粋な渇きをエネルギーとして、内臓から神経を裏返す。

どっと蓋が弾き飛ばされる感覚。

反転する。

苦痛は恍こう惚こつへ、渇きは悦楽へと超越する。

「Lead me導きたまえ!」

その囁きは、自分とともに世界をつくりかえた。

昂揚とともに投げ放たれた六本のナイフが、まるで食卓のバター

のようにやすやすと石畳へと刺さり魔法円を形成する。

だが、そのうち三本が石畳に刺さったまま、ぶるぶると震えていた。

抵抗されているのだ。超常と超常がぶつかりあったならその結果 は互いの技量こそが決める。だからこそフリューにとっても退ける はずがなかった。身体の内の精才気ドをなおさらに燃やし、魔力へ と変換してナイフに叩きつける。

石畳を、殴りつけた。

「Lead me, now今こそ、導きたまえ!」

叫びと伝でん播ぱした魔力が、ナイフを弾き飛ばした。

石畳から抜け出たナイフが、そのまま勢いよく壁に突き立ったのだ。ばかりか―見よ、そこにあったはずの壁がたちまち薄れ、からんとナイフが落下した後は跡形もなく消え去っていたのである。

もとより、そこにあった壁は現実のものではない。

厳重に仕掛けられた結界を、フリューの占星術による『導き』が 凌いだのだ。

「ご苦労様」

と、横合いから優美な声がかけられた。

ついで、その闇に向けて白い手が伸ばされる。

「Call目覚めよ」

ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトの手に、紫の炎がともった。白い肌を焦がすかにも見えるその炎はまるで熱を持たないらし

く、指先を美しく彩り、煌こう々こうと闇を照らしあげていた。

フリューがどんと尻餅をついた。

「ひい、疲れたぜ」

と、額の汗を手の甲で拭く。

実際、極限までの集中を必要としたため、フリューの顔色は十歳も老け込み土気色に変じていた。単に魔術を行使するだけではこうはならない。この剝離城に仕掛けられた結界がそれほどに強固だったのだ。

ロード・エルメロイII世たちと別れた後、ふたりは剝離城アドラの仕掛けを隅から隅まで探っていたのである。憤然とフリューを連れ歩く少女のペースは、それこそこの城内の塵ひとつも見逃さぬといった有様で、正直ロード・エルメロイII世のあれとあまり変わらぬのではとフリューが思うぐらいだった。

「痛……」

喉のあたりをフリューがさする。

今の魔術の反作用だった。もともとこの剝離城では魔術が使いにくい上、乱発とあっては身体より先に魔術回路の方が悲鳴をあげる。ぎしぎしと骨を擦り上げる幻痛は、真実の痛みでないからこそ、なおさら耐え難く身体を苛さいなんだ。

「魔術師なら、その痛みも恍惚でしょう」

言わずもがなのことを、ルヴィアは口にする。

それから、小さくうなずいて、

「ええ、資格ある者の前でこそ扉は開かれる。──魔術師ならば当た り前のことですわ」

誰かにあてつけるような言い様ではあった。

(.....そらそうか)

と、フリューは考える。

魔術にとって、秘密こそが命だ。神秘は神秘であること自体に意味があるのであり、知られてしまえばその分力を失う。もちろん魔術師同士で一端を見せる程度であれば何の変化もありはしないが、ロード・エルメロイII世の洞察は本質に迫りすぎていた。

単に魔術の歴史や発祥をなぞるのはよい。

だが、その魔術から規定される魔術師の思想や理念まで繙ひもと こうとする行為は......

(.....気づいてるのかね)

ぞくり、と自らの背筋にも悪寒が走るのを感じながら、フリューは考える。

──『魔術の本義からいえば、あなたはむしろ魔術の破壊者ですわ』

ルヴィアのあの言葉こそ、ロード・エルメロイII世を正しく捉えている。

意識的にせよ無意識的にせよ、気づいたからこそルヴィアはあそこまで激怒したのだ。

地上で最も優美なハイエナなどと称されるエーデルフェルト家以上に、ロード・エルメロイII世は盗賊めいていた。魔術の本質から後代の魔術師の在り方までも見極められてしまうなら、それはある意味で、魔術から未来の神秘まで取り上げるということにほかならない。

(......あれが、君主ロードか)

時計塔に十二人しかいない頂点。

あるいは、その枠にすら留まれない異端者─破壊者。

紫の炎を手に灯し、闇のわだかまった階段をゆっくりとルヴィアは下りていった。その歩みすら舞踏会を思わせる優雅さであった。

さほどかからず、木の扉へと突き当たって開く。

「っ、なんだこりゃ」

あわてて、フリューが口と鼻を塞ぐ。

ひどい悪臭が、部屋にはこもっていた。

あえていうならば、家畜から抉り抜いた内臓をぐちゃぐちゃにかき混ぜ、何年も放置したかのような臭いだった。鼻を塞いでいてもこちらの喉や肺胞までも冒されるようで、フリューはえずきを必死でこらえた。

「どうやら、当たりですわね」

言ったルヴィアも鼻のあたりに手をあて、かすかに眉をひそめている。

ほかの部屋に比べるとぐっと手狭だった。窓ひとつなく、机と ベッドのほかは銀の五芒星や銅のゴブレットなど、魔術に使う小道 具がびっしりと棚を埋め尽くしている。そのほか、黒々とした染み と錆さびのこびりついた刃物や穿せん孔こう器きらしき器具も複数 置かれていた。

(.....拷問具か?)

フリューが、いままで見てきたいくつかの拷問器具──アイアンメイデンやファラリスの雄牛といった品々を思い返す。おぞましいのは、そうした器具にすらあちこち天使が彫刻・刻印されていることだった。愛らしい幼ク天ピ使ドの顔が黒く酸化した血に汚れている様は、本能に訴えかけるおぞましさを秘めていた。

どうやらゲリュオン・アッシュボーンの私室のようだった。

しかし、家具にせよ小道具にせよ拷問器具にせよ、天使まみれであることは変わらない。部屋が狭くなった分だけ、なおさらに深い 泥沼の底に潜っていってるような心持ちさえした。

「……ここで、ゲリュオン・アッシュボーンが魔術刻印を修復したのかね」

「あるいは、魔術刻印を剝離したのかも」

少女が口にする。

肌を剝ぎとる魔女狩りの拷問をイメージさせて、その言葉は歴戦 の傭兵の心胆すら寒からしめるものがあった。

そんな中で、

「絵?」

棚に置かれた不釣り合いな品に、フリューは目をとめた。写真と 見まがうような細密さで描かれた、小さな絵画であった。

ただ、ルヴィアはそこには興味を示さず、真っ直ぐ机へと向かった。

埃にまみれた机には、いくつかの魔法円が描いてあった。

「……これが、アッシュボーンの基礎術式ですわね」

「一お、おい」

と、フリューが声をかける。

このような場所にある以上、危険な魔法円である可能性も高い。 しかし、なんら頓着せずルヴィアはその指を魔法円に滑らせたの だ。

びしっと稲妻が走った。ごく小規模の自然現象は最初からそう仕込まれていたように少女が指先に嵌はめていた指輪の宝石へと吸い込まれ、ルヴィアは何事もなかったかのごとく魔法円を精査しはじめた。

魔法円の周囲に書かれた単語を、言の葉にのせる。

「アスモデウス、ベルフェゴール、バアル、アドラメレク、リリ ス......」

挙げられた不吉な名前に、フリューが片眉をあげた。

「悪魔つうか、堕天使か? つかひょっとして邪悪の樹クリフォト?」

「さすがにお分かり? カバラの象徴たる生命の樹セフィロトの裏

―人が天へと至るための美徳と天使の代わりに、奈落へ堕ちるための悪徳と堕天使を並べた図。どうやら、剝離城ではこちらを基礎術式にしていたみたいね」

一拍おいて。

花のほころぶように美しく、少女は微笑したのである。

「ええ。これで手がかりは十分。エーデルフェルトのやりかたを見せてさしあげましょう」

*

ロザリンド・イスタリは、ずっと部屋にこもっていた。

朝食と昼食は兄の言いつけ通り部屋でとって、外には一歩も出ていない。まだ幼い精神こころは外を思ってそわそわしてしまうものだが、さすがに化野菱理の事件の後ではそういう気分にもなれなかった。兄の配慮によって直接現場は見ていないが、わずか一日ほどにせよ憧れを惹起した美しい女性の喪失は、ロザリンドの胸を重く塞いでいた。

(誰が.....)

誰がやったのか、という問いが、少女の脳をぐるぐる巡っている。

魔術師ならば誰もが可能性があると、ロザリンドは思わざるを得なかった。自分が生きてきた場所が人命より魔術に重きをおくことなど、生まれたときから知っていたからだ。ばかりか、兄すらその範はん疇ちゅう外に置くことができなかった。自分のためならば兄はそれこそ修羅にも悪魔にもなるだろうという、哀しいまでの確信があったから。

それでも、おとなしく待っていることしかできなかった。

無力を嚙みしめ、座ったまま視線を落とす以外、何ひとつできは しなかった。 「どないしたん? 気分が悪いんやったらお茶でもいれよか。わいが持ってきたんは紅茶やなくて緑茶になってまうけどな」

兄の代わりについたボディガードが、気さくに声をかける。

「すいません。......清玄さん」

「はは。気にせんといて。麗しのお嬢様のおつきなんて嬉しい限り や」

軽く胸を叩いて、清玄は目をつむった。

ウィンクのつもりかもしれないが、隻眼ではあまり格好がついて なかった。だからこそ胸が温まるのも確かだった。家族以外の異性 とは長く同室にいたこともないロザリンドだったが、この山伏の近 くは不思議と落ち着く自分を感じていた。

「ハイネ兄さん、ロザリンドちゃんにもなんか言うとった?」

「いいえ。ただ清玄さんが一緒なら安心だとだけ」

「……そっか」

微苦笑のカタチに、清玄の唇が歪んだ。

ロザリンドは、無邪気に兄の言葉を信じている。

化野菱理の殺害発覚の後、ハイネがすぐ接触したのがこの山伏 だったのである。ハイネ自身は単独で調査に出ていたが、この剽軽 な山伏がいるだけでずいぶん世界は柔らかく感じられた。

「何か、お兄様とあったんですか?」

「……む。むむむむむ。……まあハイネの兄さんには見透かされてたからええか」

肩をすくめて、清玄は告白する。

「わいは、もともと魔術を諦めとったんや」

「諦めた?」

「言葉通りやって」

行者服の袖あたりを、清玄がそっと撫でた。

「魔術は基本的に一子相伝らしいけどな。まあうちの親父つうか行者が艶福家やったのさ。妾めかけにぼろぼろ生ませた子供が十数人 もおってな」

へらへらと清玄が笑う。

現代では珍しく、しかし少し時代を遡ればいくつもあった事例だ。百人近い子供をなした王や豪族の例など、枚挙にいとまがない。

「そやから考えたんやろうな。子供たちを相競わせて選ぼうって」

「競わせて?」

ロザリンドの表情が動いた。

「せや。まあもともとが山伏なわけやから修行場所には事欠かんや る。魔術は多数に伝えるほど力を減じるものやけれど、修験道の場 合半分は宗教や。初歩的な技術を伝える分にはたいした影響もあら へん」

弟子は多く持つが、骨子となる秘奥を伝えるのはごく一部の内弟 子のみ。

それはそれで、魔術師として正しいカタチであろう。最も多いパターンは子供の中でも特にひとりだけを選び、残りの子供には魔術の存在すら教えぬものだが、地方や形式によっては幾分かの変化を生じさせる。清玄の家もそうしたひとつであった。

「まあ、そもそも極東の魔術は西洋とはいろいろシステムが違うんやけどな。うちの一派の場合はだいぶ西洋にかぶれてたみたいで、魔術刻印なんかも引き継いどった。……で、そうなるとその魔術刻印を誰に伝えるかや。わいは落ちこぼれやったから、どうでもよかった。魔術はわりと好きやけど、皆が目を皿のようにして追い求めてる根源どうこうにはあまり興味がなかったしな。というか興味がない段階で才能がないということなんやろ。師匠つうか親父には嘆かれたけれど、ぴんと来ないもんはどうしようもあらへん。それに、わいには兄貴がおったからな」

「お兄さん、ですか」

かすかにロザリンドの声はうわずった。

あまりに自分の状況と似通ってしまう単語だったから。

「おお。ハイネ兄さんほどかどうかは分からんけど、そら大したものやったんやで。ほかの兄弟もまあ兄貴が傑出してるのだけは認めざるをえないぐらいでな。だいたい魔術師の家系からしたら、蠱こ毒どくにかけられないだけでもマシな方やからな」

蠱毒。

手頃な小さい壺に、毒蛇や毒蜘蛛、はたまた百足むかでや蠍などの生物を集めて共食いさせ、最後に生き残ったものを呪いの触媒カタリストとして使用する魔術である。大陸には広く伝わった呪術であり、毒を持った生物に限らず、犬や猫、狼でも同様の形式は見て取れる。

この場合は、魔術師の見習い同士を戦わせることで、生き残った ひとりを後継者とするやり方のことである。複数の子供に魔術を教 授する場合では比較的よく見られるパターンでもあった。親がそう した方式を取らなかったというだけで、清玄の兄弟たちは幸運な事 例と言えただろう。

「でもなあ。うちの場合はそれが災いに転じたんや」

弱々しく、清玄は笑った。

「下手にみんな生き残ってたからな。逆恨みするやつが出てきた。 それもひとりじゃ兄貴にはかなわんつうので複数──笑えるやろ? そんなことしてる段階でもう後継者の資格とかないわけやん──で、 正式に魔術刻印を移植し終える儀式の前に、不意打ちをかけたん や」

「っ一!」

ロザリンドが、息をのんだ。

「結果がこれまた悲惨やった。兄貴は粘りに粘ったんやけど、それで間に合ってしまった師匠まで巻き込んで、襲撃者もろとも全滅やで。アホやろ。たまたまどうでもいいから言うて、サボって街に下りてたわいだけが助かったつう寸法や。もう、ぼうぼう本堂が燃えて、兄貴も師匠も丸焦げや。ほんま何やってるんやかな」

「それでも大部分の魔術刻印を移植してた兄貴はまだ生きてたんや。分かるか? 修験道で扱う炎やで。もともと行者は火渡りもするんやから炎には耐性あるのに、それをなおさら焼き焦がす天狗の炎やで。もう完全に骨まで炭化してるのに魔術刻印に生かされてしまって、兄貴がまだ動くんや。ああここまで言うたら、兄貴が何を託したか分かるよな」

清玄の声に、得体の知れない熱がこもっていく。

こんなことを逐一話したいわけではないのに、自分でも止められないというようだった。

「魔術刻印を……受け継いでくれ言うんや。そんなん持ち主の兄貴が死にかけてるわけやから、魔術刻印がどんな状態かは分かるやん。だいたい、そんなたいした家系でもないんやで。十代は超えてるて言うても、もともと分家や。そんなしんどいの本家に任せたらトンズラしたらええやんか。なのに誰も彼もそんなの考えへん。魔術を引き継げ神秘を引き継げ魔術刻印を引き継げわれらの目指すは根源への道のり、ああもうどんだけなんや」

吐き出すように、彼は言った。

「誰も彼もアホや。アホばっかりや」

また法衣の袖のあたりを擦って、清玄は顔を歪める。

しかし、その歪みはほどなくして穏やかなため息へと変じていった。

「ああ。それでも兄貴に言われてしもうたんやから、魔術刻印はなんとかしたいなって。ひょっとしたらここならなんとかなるんやないか.....ってそう思うてな」

「.....なんとかしたかったんですか」

ロザリンドが訊いた。

「いいや。でもそれしかなかった。これだけ否定しても、わいには 何も残ってへん。最初に諦められたような才能なしの根性なしで も、親父も兄貴も死んだ後はそれを継ぐぐらいしかやることもな かった。お笑いやろ?」

清玄の顔が溢れた感情にしかめられる。

魔術が好きになれなかったとはいえ、修行は辛くなかった。山河を獣たちと渡っていく生活は、どれほど厳しくても芯に積もっていくような充実があった。もともと独自の宗教と魔術とが習合した修験道の場合、西洋圏の魔術師ほど神秘だけに執着してなかったこともあるだろう。

深い森の、土の匂い。

はたまたしんしんと積もった雪を見ながら、獣たちと身を寄せ 合った温かさ。

空はいつも高く、星は輝いていた。病の高熱で片目を失って死にかけた夜には、兄が取ってくれた薬草を煎じて飲んだ。舌が痺れるほどの苦さは、しかし清玄が口にした中で一番の美味でもあった。

「わいの兄貴はな、魔術が本当に好きやった」

眼帯を撫でて、しみじみと清玄が言った。

「自分の身体を通じて認識が広がるのが楽しいとか、そんな雲でもつかむようなことをしょっちゅう言うとった。わいには分からへんけれど、魔術刻印を継いでいったらわいの子孫の誰かは同じことを言うんやないかって。そんな風にも思ったんや。もしもそんなことが未来に起きるんやったら、兄貴が死んだことにも意味が持てるんやないかって」

清玄の行動原理はそこに集約されている。

ふさわしからざる自分とは違う、本当の後継者を探し求めていた。

一度は後継者を辞退しながら、ロザリンドの異常体質から舞い戻らざるを得なかったハイネと似て非なる──あるいは対極的な関係 性。

だから、ハイネ・イスタリと心を通わせたのかもしれない。

かつて彼が失った絆の代わりとして。

「.....そういうこと、でしたの」

ロザリンドの視線がついと下がった。

「ははは。お兄さんには見抜かれたわ。もう口説き台詞からイカしてたからな」

清玄が鼻の頭を搔いた。

あの化野菱理の事件の後、

― 『君の正体を知っている』

と、ハイネは清玄へ切り込んだのだ。

立ちすくんだ山伏へ、続けて青年は口にした。

- ― 『君は、本当は魔術刻印が憎いんじゃないか』
- ― 『だったら、私と同じだ』

同じだ、と言われたことが清玄の胸をついた。

ずっと空虚であった傷口を満たされたような心持ちだった。その言葉は確かに鈍い痛みも再発させたのだが、もっとずっと辛かった何かを癒してくれた。それだけで自分がこの城にやってきた意味は満たされたと、時任次郎坊清玄は思ってしまったのだ。

「ごめんなさい。嫌なこと聞いちゃいました」

「いやいやいや」

と、清玄が手を振った。

どこか小動物っぽい顔をくしゃくしゃと歪めて─それから、ごし

ごしと手の平を法衣で擦ってから、ぽんぽんと少女の頭を叩いた。

「まあ、あまり気にせんといて。昔話やし、所詮は都合のええ夢 や」

夢だと言う。

勝手に思いこんで、勝手に他人へ依託してるのだから。どうしようもなくわがままなのは、自分もほかの魔術師と同じだと清玄は思う。

だから、都合のいい夢と形容した。

「まずはハイネ兄さんが帰ってくるのを待ってようや」

「.....はい、ふぁ」

こらえきれなくなったのか、ロザリンドが小さくあくびを漏らし た。

それが恥ずかしかったのか、きゅっと口元に拳をおいて、

「......清玄さんは、誰が菱理さんを殺したのだと思います? やっぱりアッシュボーンの呪い?」

「どうやろな。魔術師ならそんな呪いを残してもおかしくあらへん。やけど、ハイネ兄さんならそんなのに負けたりせえへんやろ」

「......はい。お兄様は......私の......」

そこで、言葉が途切れた。

ソファに身体が傾き、ついで規則正しい寝息が聞こえてきた。

眠りに落ちたロザリンドに毛布をかけて、金髪の頭を優しく清玄 は撫でたのであった。 ハイネ・イスタリは、再び剝離城アドラの前庭を彷徨さまよって いた。

森である。

ざわざわと葉擦れの音が魔女の笑い声めいて響く、夜の森だった。

「……どうやら、このルートが正解か」

呟いて、落ち葉を踏み分けていく。

ルヴィアが占星術師のフリューと協力し、半ば手当たり次第に探っていったならば、ハイネは別の方法でアプローチしていたのだ。

─ 『天使は獣なり。西にありて天空を睨み、太陽を吞む』

昨日、招待状にメッセージを浮かばせた台座の森から、やや離れた場所だった。

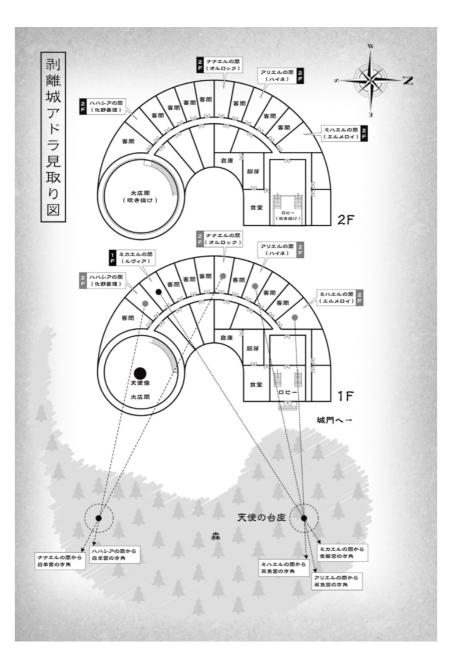
なぜなら、化野菱理の〈天使名〉の方位が、ほかと違っていたからだ。

自分やロード・エルメロイII世、またルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトの〈天使名〉は宝ほう瓶へい宮きゅうから双魚宮──簡易な占星術で見た場合、黄経にして300度から360度。つまり空を四季で分けた場合の冬の終わりの方位に属しており、部屋からの方位で交点を探ることもできた。

だが、化野菱理のHachasiah八八シアも、密かに部屋のプレートを探ったオルロックのNanaelナナエルもともに白羊宮であり、その方位は黄経0度から30度であり、交点の位置もずれているのだった。

調べてみたところ、そちらの方位にもハイネが見つけたのと同様の台座が存在したのだ。

そこに載っているべき天使の彫像はやはり見つからなかったが、 同じメッセージが招待状に浮かび上がった。



─ 『天使は獣なり。西にありて天空を睨み、太陽を吞む』

メッセージは変わらない。

だが、よくよく周囲を調べてみれば、地面に何かをひきずったような跡が発見できた。

しばらく考えてから、ハイネは石碑に手を添えた。

全身に力をこめる。

やがて、ごとりと台座が動くや、地面との隙間から風が吹いた。

地下への階段が、その隙間から出現していたのだ。隠し通路は欧州の古い城にはつきものだが、これほど深くつくっているものは希だった。

「……ここに、あの獣が潜んでいる?」

口にして、数秒の思考でハイネは決心した。隠し通路が知られたと露見すれば、あの獣が居場所を移す可能性もある。ここは畳みかけるしかない。

ゆるやかに、ハイネは階段を下りていく。

ひどく、足音が響いた。

(─化野菱理も同じところに来た?)

その可能性は高い。

自分よりも深く、彼女が剝離城の秘密に近づいていたということ。その結果として──あるいは報いとして、あのような姿を晒さらすことに陥ったのか?

いや、そもそも与えられた〈天使名〉の違いを考えれば。

(ここの主は、オルロック老とミス化野には違う情報を渡そうとし

ていた.....?)

だとしたら、そこにどんな意味があるのか。

彼女はどこで殺され、あの天使の剣に串刺しにされたのか。

いかなる呪いが彼女の命を蝕んだのか。

やがて通路を進むうち、別の魔力をハイネは感じた。

(ここが、工房の中枢か?)

剝離城アドラ全体が巨大な魔術師の工房であることは疑いないが、真に魔術を生み出す空間でもありえない。それは厳重に秘匿され、主が死せる今も蠢うごめき続けているはずであった。あるいはゲリュオン・アッシュボーンの遺言状に残されていた秘法もまた。

「Convert流転せよー」

青年が囁き、身体に埋め込まれた〈生きている石〉が応じる。

たちまち身体が騎士の甲冑に覆われ、その手には槍が生まれた。 時代錯誤の騎士としか見えないその姿が彼にはこの上なく似合って いた。自分も時代遅れの産物なのだろうとハイネは思っている。魔 術師が誰しもそうであるように、歴史の闇に埋没していくしかない のだろう。

そういう意味で、あの清玄は自分より遥かに強い。

魔術がというのではない。

その逆だ。

なぜなら、魔術とは本質的に快感だからだ。

超常の力を操れるという悦楽。たとえ時代遅れではあっても、生命として一段上に至れるという愉悦は何物にも代え難い。習得のための凄絶な苦痛さえ、この快感の前にはあっさりと頭を垂れる。

それを自分から捨てられた清玄は、生命として強いのだ。あるいは、一種動物的な純粋さと評するべきかもしれない。あのロード・エルメロイII世ですら、『知識の探求』という欲望から逃れられていないのだから。

ある意味で、ついに自分が得られなかった種類の強さ。

だから、妹を託すことに躊躇はなかった。

Г......

足音が響く。

こつこつと反響する。あまりに響き渡るそれのせいで、自分が足音を立てているのか、足音によって自分が生じているのかが曖昧になってくる。混合する因果。反転する現象。魔術によって騙される現実。

自分たちは影から生まれてきた。

ならば、いつか影に帰るのが必然か。

そもそも根源に辿り着きたいという願望もまた、似た思考から生 じているのではないか。

「.....ああ」

やがて、歩みは止まった。

魔力によって『強化』されたハイネの瞳は、この暗闇にあってさ え、なおも濃いもうひとつの『影』を捉えていた。

通路にわだかまり、その正体すら知らせぬ影の獣に、ハイネは淡く微笑を返した。

「.....また会いましたね」

腰を落とし、槍を低く構えた。

獣とはいっても実際の知能がどの程度かは分からない。仮に猛獣と変わらぬ知能だとして、裏でこの獣を操っている魔術師がいるならば、その主が自分への対策を立てた可能性もある。

だからこそ、ハイネは油断しなかった。

甲冑の強度に慢心せず、慎重に槍の間合いを詰めていく。仮に獣の速度が以前よりあがっていても、爪と槍であれば攻撃範囲の差で打ち勝てる。相手がそれ以上の隠し球を持っていたならば──そのときは。

――闇が疾はしった。

研ぎ澄まされた槍風が応じ、高い音が流れた。

血は流れなかった。ハイネの鎧にも傷ひとつつきはしなかった。 深々と切り込んだ槍に、ハイネは確かな手応えを感じていた。

しかし。

「.....やられましたか」

ちら、とハイネは自らの槍の穂先を見やった。

欠けていた。影の獣の爪は、ハイネを狙ったものではなく青年の操る槍自体を狙ったものであった。しかも槍の硬度は鎧のそれを大きく上回る。今の獣は前に現れたときを大きく上回る能力を身につけているに違いなかった。

離れた影は、笑ったように思えた。

どうだ、お前の鎧などこれほど簡単に断ち割れるぞ、と。

Г......

無言でハイネが槍を振ると、再精製された金属はほんの少しだけ 短くなりながら、もう一度刃を形成した。

だが、それでどうするというのか。錬金術の槍は獣の爪に敗北した。もう一度やって結果が変わることなどありえるだろうか。現に、影の獣は屈辱を晴らした歓喜に打ち震えているではないか。

跳んだ。

獣が。

狭い石の通路をジグザグに、人間大のビリヤードめいて反射す

る。跳躍はたちまち五回、八回、二十回を大きく超える。いかにハイネ自身が魔術で強化されていても、その速度は人間の動体視力など及ぶ域ではない。時速三百キロで乱反射する物体は人間の身体構造では捉えられない。

死角から躍りかかった獣の爪が、ハイネの背中から鎧へとたやす くめりこんだ。

実にたやすくめりこんで──その途中で、突然ぐにゃりと搦め捕られた。

「それも考えていました」

と、青年は呟いた。

ハイネの装甲は、けして硬化するだけではない。

その逆、相手を搦め捕るための軟化も可能であったのだ。獣が槍を叩き切ったときから、ハイネは鎧の特性を切り替えていた。なおも用心深く、鎧自体が鎖のごとく変形して、獣をさらに拘束する。

「今度こそ、正体を見せてもらいましょう」

ゆっくりとハイネが振り向き、槍を掲げた。

泣くように、獣が口を開いた。

一四日目の、朝。

師匠と自分は、ちょうどそのとき朝の準備をしているところだった。

昨夜はオルロックとの話にかなりの時間を費やしていたため、寝ぼけた師匠のジャケットをいつものように直し、ひとまず朝食をいただこうと部屋を出かけたところで、アッシュボーンの従僕がやってきたのである。

駆けつけたその先で、悲劇は起きていた。

あの広間だった。

天窓からこぼれる日差しは天使の階段めいて、あまりに皮肉であった。

つい一昨日、化野菱理が串刺しになっていた天使の膝元で──今度 は中世の騎士物語を思わせる、堅固な甲冑を着込んだハイネが横た わっていたのである。かつて強壮であった腕はだらりと垂れて、 整った横顔の瞼は閉じられていた。

ああ。なぜ、死に顔までが騎士物語のごとくあらねばならぬのか。それとも菱理のときと違って、その顔が傷ついてないことを感謝すべきなのだろうか。

感謝?

一体、誰に?

ちら、とだけ死体の様子を見て、師匠はとある事実を確認する。

「……Arielアリエルか」

呟いたのは、ハイネの死体から失われていたのが左足であったからだ。

その部位に該当する〈天使名〉がArielアリエルなのだというのは、今更付け加えるまでもあるまい。〈天使名〉が死の予告状だと言ったのは師匠だが、実際にその実現に立ち会うと、石を吞み込んだような心地にさせられた。

どうしようもなく、胸ががらんどうにでもなった気分だった。

そうだ。ハイネの胸もまたおびただしい血で汚れていた。致命傷となったのはおそらくそちらだろう。失われた左足のあたりにはさほどの出血が見られないので、死後に切り離されたと見て間違いあるまい。

感情の麻痺してしまった頭が、そんなことばかりいちいち列挙していく。

そして、

「......どうして!」

と、無残な叫びが石壁を叩いた。

「どうして、お兄様が!」

泣き崩れる少女を、自分はただ見つめるしかなかった。

すぐ隣で、山伏の清玄も視線を落とし、ぎりぎりと奥歯を嚙みしめていた。

「ハイネ兄さん.....」

どちらも、精神こころの芯を奪われたかのようだった。

いや、彼らだけではない。それを見つめる師匠も面持ちを硬くしていた。さすがに最初の化野菱理ほどの衝撃はなさそうだが、青ざめた顔はたった今この場で自死してしまいたいと告白するようにも見えた。

背後から、声がかかった。

「化野菱理は権威的な意味での安全弁だったが、ハイネ・イスタリは精神的な意味での安全弁だったからの。ははは、まるでジェンガを一本ずつ引き抜いていくようなやり口だとは思わんか」

「─オルロック老」

振り返って、その言葉の主の名を師匠が呼んだ。

「だが、わしはおぬしに協力するぞ。ある意味で、おぬしの安全は 前より保証されたとも言えないかな」

老人の笑みはどこまでも深く、見る者を引きずり込まんとするほどに悪魔的だった。

師匠は応えなかった。

代わりに、

「一失礼」

と、広間の中央へ歩み出た。

しゃがみこんだロザリンドを前にして、横顔が苦く歪められる。 ある意味でどんな強大な魔術師と敵対したときよりも痛々しく、し かし決心を変えることはせず口を開いた。

「ミス・イスタリ。あなたの兄を見せてもらってもいいですか」

「あなたは!」

泣きじゃくりながら、ロザリンドが振り返った。

誰にも兄へ触れさせたりしないと、その瞳が叫んでいた。

「あなたは! あなたが! お兄様を殺したの! それともお兄様が死んで競争相手がまた減ったって喜んでいるの! こんな城で最後のひとりになるまでずっと殺し合うつもりなの!」

指弾の声は、広間に長く響いた。

さしもの師匠も口を閉じざるを得ない悲壮な覚悟が、少女の声と 瞳には漲っていた。迂闊に手を触れたならば、それこそ肌が破けそ うなほどの意志であった。その凄まじさが広間を拉ひしぎ、剝離城 を埋め尽くす天使たちさえもつかのま怯ませたように見えた。

「......いや、これは」

師匠が持ち上げた手を握りしめる。

どれだけ言葉を連ねても、今の少女には空疎だろう。彼女の真実は失われた。世界の関節はことごとく外れてしまった。本来あるべき善きことはもたらされず、あってはならない惨事ばかりが続いてしまった。

「亡くなったのは昨夜の十二時過ぎかの」

と、オルロックが口にした。

「またぞろ、地道にアリバイでも確かめてみるか?」

「私はもう結構ですわ」

と、ルヴィアはきっぱり踵を返した。

「この茶番、おおかたは摑めてきました。私は私で歓迎の準備をい たします」

ドレスをつまみ上げ、カーテシーの礼を取ってから扉の向こうへと立ち去っていく。

それを見送ることはせず、師匠はもう一度忍耐強く、被害者の妹 へと語りかけた。

「ミス・イスタリ.....」

「私は誰にも、お兄様を渡しません」

決然と、わずか八歳ばかりの少女は告げた。

たとえ万を超える軍隊であろうが、たったひとりの幼い少女の想いを翻すことはできないだろうと思われた。

その顔を見て、つい自分は前に出てしまった。

「グレイ?」

「……ロザリンドさん。清玄さん」

自然と、声をかけていた。

眉をひそめた師匠をよそに、ふたりへ話しかけてしまったのだ。

「……拙せつに、ハイネ・イスタリを弔わせてもらえませんか」

「弔い?」

初めてロザリンドの瞳が敵意でない色に揺れた。一度揺れてしまえば、少女が纏っている鎧は、とても不安定で儚い硝子のようなものでしかなかった。たとえ硝子であっても、少女の精神を守るものはそれしかなかったのだろう。

「……拙せつが」

そんなつもりはなかったのに。

そんな資格なんかなかったのに。

どうして、自分はあの少女へ言ってしまったのだろう。

「拙せつが、祈りの言葉を覚えていますから」

*

参列者は、わずかに三人きりだった。

自分を除いて、ロザリンドと清玄、師匠の三人である。

森の外れ。城の前庭からやや離れた空き地に、彼らは葬られていた。こんもりと盛り上がった土山は、アッシュボーンの従僕が手際よく埋めてくれたものである。この期に及んでもアッシュボーンの従僕たちは何の動揺も見せず、壊れた家具を扱うような表情で淡々と処理するばかりだった。

「本当は、ミス化野にもすぐ行うべきだったかな」

師匠が、その土山に目を細める。

ハイネ・イスタリの亡なき骸がらは、ひとまず化野菱理の隣へ埋めていた。あのふたりの相性を考えれば、隣同士というのはどちらも嫌がるかもしれないが、今の状況ではそこまで贅沢は言えなかった。

準備もあって、すでに昼下がり。

秋の太陽は高く、どこか物寂しげだ。

鼻孔をくすぐる乾いた土と落ち葉の香りも含めて、場所がこの剝離城でさえなければ詩情に満ちた風景だったやもしれない。

「グレイ」

「.....はい,

師匠の言葉に、小さくうなずいた。

まず手元の香炉を掲げ、土山に向かって献香を行う。幸いこの剝離城でも香料に不自由はしなかった。本来ならば聖水も振りかけねばならないところだがそんな持ち合わせはないし、いくら一時期は聖堂教会に属していたとはいえ、魔術師であるハイネにふさわしいとも思えなかった。

だから入祭や集会祈願は廃し、死者を祝福するための祈りだけを 捧げる。

息を吸った。

ついで、

「我らに災禍より逃れる術を与えたもう、主なる神よLord God, in whom all find refuge,」

するりと、言葉が喉を出た。

身体が覚えているとはこういうことなのだろう。頭でひねくって も出てこないのに、喉を通した途端になんと軽々と滑り出てくるも のか。

「わたしたちはあなたのwe appeal to限りなき慈しみを知らしめ your boundless mercy:、その慈悲がハイネ・イスタリのgrant to the soul of魂の元にもたらされることを願いますyour servant Heine Istari,。彼をどうか手厚く迎えいれ下さいa kindly welcome,」

とっくに忘れたと思っていた言葉が、途切れずに流れていく。

だけど、まるで嘘っぱちだ。自分は神父でもなければ、主も宗教 も信じてはいない。集まった魔術師の中では最も信心深いと見えた ハイネ・イスタリにしたところで、聖堂教会を離れている以上はそ こに属する祈りを捧げられたくはないかもしれない。

それでも。

死者への祝福は生者のためにある、とそう言ったのは誰だったろうか。

喪失の大きさで荒れ狂う心をほんのつかのまでも慰めておけるなら、信仰の有無は後から考えればよろしいと諭してくれたのは誰だったろう。

「その罪を浄め、その魂を死の連鎖から解放しcleansing of sin, release from the chains of death,.....」

ここで、言葉に詰まった。

硬直した自分を、たった三人の参列者が振り返った。

「グレイさん?」

ロザリンドが呼ぶ。

だけど、自分には何も浮かばなかった。

祈りの続きは何だったろうか。あれほど自然に溢れ出ていたリズムは、自分の内側から跡形もなく消え失せていた。最初から幻であったかのように、いくら心の手を伸ばしても何も摑めない。幼い頃からあれだけ聞いていた聖句は、やはり主を信じてもいない自分には遠すぎる言葉だった。

「グレイさん?」

もう一度、訊かれた。

「……あの、拙せつは」

謝らねばならない。

最愛の兄との、最後の時間さえ穢けがしてしまった自分は許されるべきではない。だが、一体どのように謝罪すれば、ほんの少しでも彼女の慰めになるのだろうか。たとえ命を差し出したとて、兄の死を卑しめた報いにはならないのではないか。

とん、と肩が叩かれた。

振り返ると、低い声が葉巻臭い唇からこぼれた。

「一その魂に永遠の命をお与え下さい and entry into everlasting life.」

それが続く祈りの言葉だと知って、自分は息を吞み込んだ。

一瞬の間をおいて、師匠に唱和するのはとてもたやすいことだっ た。

「その魂に永遠のand entry into命をお与え下さい everlasting life.。 わたしたちは我らの主なるお方を介しWe ask this through、これをお願い申し上げますour Lord.」

祈りを終えて、もう一度十字を切った。

アーメン。

そうあれかし。

死者に祝福を。たとえ死後に与えられる永遠の命など信じられなくても、今生きる我々の内側に死せる魂のあらんことを。

しばらく誰も何も言わず、しんと静まりかえっていた。その間に 自分は香炉に蓋をして、襲いくる疲労でへたりこまないように堪え ていた。うまくやれたかどうかなど考える余裕もなかった。

ただひたすら、自分の感情を殻で塞ぐようにしているところに、

「.....ありがとうございます」

と、ロザリンドが頭を下げたのだ。

それこそ憑きものが落ちたような顔を少女はしていた。身内を 失った深い悲しみはそのままに、しかしその悲しみだけに囚われな い芯を取り戻していた。

「あの、すいません。さっきはひどいことを言って」

「……あ、その」

もごもごと、口ごもってしまう。

そんな自分にも、ロザリンドは気にせず話を続けてくれた。

「グレイさんは魔術師なのに、祈りを知ってらっしゃるのですか」

「……魔術師では、ないですから」

「彼女は霊園の出身なんですよ」

見かねたのか、横合いから師匠が付け加える。

さしもの師匠もやや疲れた顔をしていた。連続した殺人事件。魔 術師同士の睨み合い。師匠でなくても胃を痛めるには十分すぎる状 況ではあった。

「霊園、ですか?」

「……事情があって」

自分は、ただ首をすくめるばかりだった。

故郷のことについては、まだ整理のついてない事柄だ。他人に説明しると言われても、そもそも自分自身が理解も納得もしきれてない。いや納得などできる日が、はたして生きている間に来るのかどうか。死後の永遠の命とは、誰もが自分の道程を納得などしてないからではないか。

そんな拙せつを見やって、師匠はもう一言添えた。

「清玄殿。ミス・イスタリを送ってもらってかまわないかな」

「あ、ああ。任せてくれや」

胸を叩いて請け合った清玄が、そっと少女を促す。

そのふたりの背中を見送ってから、師匠が口を開いた。

「まあ、あの弔いなら上出来だろう」

「......あの、ありがとうございます」

礼を言う。

すると、師匠は軽く鼻を鳴らしたものだった。

「ふん。だが魔術師だから祈りが関係ないなんてヤツがいるか。それこそさっきのアーメンだってカバラと直接つながってるぞ」

突然言われて、自分は目を丸くした。

「……そう、なんです?」

「省略法ノタリコンって技法でな。もとはアドナイAdonai□メレフ Melef□ネエマーンNeman。主、そして信仰に厚き王よ、というほど の意味だよ。この頭文字をつなげてアーメンAmenとしたわけだ。 まあ、現在だと『そうあれかし』と翻訳される方が多いが」

ひょっとすると魔術師には常識かもしれないが、自分には驚きだった。

何度も口にしていた言葉にそんな意味があったなんて、まるで知らなかった。

「ふん。ロザリンド嬢もそのへんの基礎は叩き込まれてないようだったがな。──帰ったら、宿題のテキストにしておいてやる。覚悟しておけ」

「う.....はい」

うなだれて、説教をやりすごす。

ただ、こんなやりとりができることがほんの少しだけ嬉しかった。剝離城アドラに来る前の、ロンドンの日常を思い出せるような気がしたから。

それから、師匠が視線を移した。

ロザリンドたちが消えていったのと反対側の、城の壁だった。

「私に用があるのか」

「―おおっとバレてた!」

おどけた感じに、壁の向こうからフリューが現れたのである。

民族衣装を着込んだ占星術師を一瞬だけ見やって、師匠は面倒臭 そうに口を開いた。

「祈ってくれたのか?」

「は、まさか。魔術師がどんな祈りで笑わせてくれるのかと思っただけだ。ちょうど、お嬢ちゃんが香炉を掲げるあたりから眺めさせてもらったがね」

それだと最初から最後まで見守ってくれたことになるのだが、師匠は指摘せず、ジャケットの懐からシガーケースを取り出した。新しい葉巻の先端をナイフで切り落としてから、ふと気づいたように話しかける。

「火をもらえるかね」

「おう」

フリューの手元で金属の蓋を撥ね上げる音。

師匠が、かすかに眉を顰める。

「魔術師がジッポーとは堕落だと言われないか」

「今更だろ。錬金術よろしく小便からでも創れってのかよ」

「はっ」

下品なジョークに師匠が唇を歪めた。後から聞いたことには、古いマッチの原料であるリンが、尿を蒸発させる錬金術の実験で発見された歴史的事実に由来しているらしいが、やはり自分にはあまり理解できないジョークだった。

もらった火で紫煙をくゆらせ、その香りを十分に堪能してから、

「ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトは、私を殺せとか言わなかったのか?」

「おう、言われた言われた。まあ、こいつがいささか毛色が違っててさ」

フリューが楽しそうに肩をすくめる。

隣で聞いている自分は思わず息を止めるほどの事実だったのだが、双方ともさしたることではないとばかりに会話を続ける。

「毛色が?」

「おう。あのお嬢様、お前の無能さを証明して業界的に葬りたいん だとさ。ちょっと正攻法過ぎて受けるだろ」

Г......

今度こそ、師匠が目を丸くしたのである。

ついでに何度かぱちぱちと瞬きしてから、

「……実に、斬新だ」

と、呻くように口にしたのだった。

「は、その顔を見せたら手を叩いて喜んだんじゃねえか。ありゃ他 人に上から目線で批評されるのが腹に据えかねてたまらないんだろ うよ」

「そんな覚えはないが」

「あんたに覚えはなくても、そう認識する相手はいるってこった。 覚えておくといいぜ」

フリューの言葉に、師匠はひどく難しい顔になった。

「逆だと思うがね」

「何が?」

「いいや」

かぶりを振って、もう一度土山を見直す。

「ハイネの身体は、鎧ごと砕かれていた」

思い出すように呟いた。アッシュボーン家の従僕たちが埋葬する前に、師匠はハイネの死体を検分していたのである。

その情報に、フリューは無精髭をさする。

「ふ.....ん。イスタリの〈生きている石〉だっけ? 噂ほどじゃなかったってことかね」

「実物を見るのは初めてだが、術者が死してあれだけの硬度を保っているなら、生前はよほどの魔術でも打ち砕けないだろう。だが、 鎧を構築する術式が不安定になったような形跡があった。そこで、 胸元を獣の爪みたいな何かでズブリだ。この凶器のあたりはミス化野のときと同じだな。魔術刻印を剝離した跡があったのも同様だ」

「ほう」

興味深そうに、占星術師が顔を突き出す。

「それに、ミス化野のときもそうだったが、おそらくハイネさんの 死体は現場から移動させられている」

「ああ。あの広間にはたいして争った形跡なかったもんな」

「だったら、ミス化野にせよハイネさんにせよ、まだ私たちは現場を知らない。つまりはその現場が……アッシュボーンの秘法と関係している可能性が高い」

「はあん」

師匠の説明に納得したのかどうか、フリューが曖昧にうなずいた。

「だけど、どうしてわざわざあの広間に死体を運んできてるんだ? お前の言う通りなら、別に行方不明にしておいただけでもいいんじゃないか?」

「.....それは」

そこまで話したところで、師匠が振り返った。

ちょうど先ほどまで自分たちが祈りを捧げていた土山のあたりから、老人の乗った車椅子が押されてきたのであった。

「おやおや、爺さんの登場かよ。ひょっとしてこいつのお守りに来 てくれたのか」

「いや。どうやら、あの小娘が面白いことを始めるようでね。せっかくだから同席はどうかと誘いに来た」

その言葉に、師匠がじろりとフリューを睨めつける。

短く、問い詰めた。

「監視だったか」

「さて」

とぼけて、フリューが口笛を吹いた。

それ以上追及することはせず、師匠はこちらへ小さくうなずいて から、オルロックへと口を開いた。

「―すぐ行きましょう」

師匠と自分が足早に向かったのは、ルヴィアたちに用意された客室だった。

その部屋だけは、一見して天使たちの象徴が綺麗に除かれており、まるで剝離城と関係のなさそうな顔をしていた。

すぐ、自分が瞬きした。

「ロザリンドさん、清玄さん」

さきほど別れたばかりのふたりも、そこに集まっていたからだ。

「今、従僕の方に呼ばれて」

と言って、ロザリンドは部屋の中央に佇む主を見やった。

縦ロールの髪は、黄金を梳ったようだった。こちらを見据える瞳の深さは水晶に似て、ルヴィアの神秘性をなおさら強調している。 隣には、あのモヒカンの第二従僕――クラウンも佇んでいた。

「ロード・エルメロイII世。そろそろ、来られると思っていました わ」

「君は、何をするつもりだ?」

「この茶番にケリをつけようと思いますの。オルロック様も私がお呼びしました。どうせなら、まとめて片付けた方がよろしいでしょう?」

少女の微笑は並々ならぬ自信に裏打ちされていた。

師匠の言葉によれば、エーデルフェルトがハイエナと称されたのは、単に死骸あさりのゆえではない。あらゆる争いに介入し、最も美味なる部分をかっさらう─その手際も加えてのことだ。

つまるところが、彼女たちは本能的に果実の場所を嗅ぎ分ける。

理性でなく、もっと奥深いところで。

「まとめて片付ける? まだそんなことを--」

「言いますわ」

師匠の言葉を、きっぱりと少女が撥ねつけたのだ。

「私が手をこまねいていたから、無駄な死をつくることになったのですもの」

「.....フェ

その言葉と、内包された意志に、さしもの師匠が硬直した。

圧倒されたのである。化野菱理とハイネ・イスタリの死に憤っていた者がここにいたことを、師匠も自分も思い知らされていた。

「どちらも我々の世界にとって欠くべからざる人材でしたわ。選んだ魔道は異なれど、魔術師の血の一滴は宝石の一粒にも等しい。まして、力ある魔術師となればどれほどの財貨を積んでも手に入れられぬ宝です。たとえ停滞と安寧こそが我らの世界の宿業であったとしても、彼らの存在はそれでも後を行く者たちにとって掛け替えのない礎となりえたはずなのです。……何か、私は間違ってますか?」

華きゃ奢しゃな身体から発する苛烈な怒りが、こちらの頰面を叩 くようだった。

この少女は、確かに貴族だった。世界に起きるあらゆる喜劇も悲劇も粛々と受け容れながら、しかしそのどれひとつにも本当は満足などせず、抗いの旗を高らかに掲げて止まない闘士であった。

かつて魔術師は王だったと、師匠から聞いたことがある。

魔術には土地が重要なのだから、魔術師もまた王や貴族として自らの土地を獲得しておくのが常であったと。現代では魔術協会や各組織によって主だった霊地は押さえられ、魔術師の貴族然とした性質はあくまで伝統に依存する名残でしかなくなっているはずなのに、この少女はいまだ過去の美質を体現しているらしい。

ほんの少しだけ、胸を痛みが掠めた。

同じように過去に囚われていながら、何故この少女はこんなにも 真っ直ぐに前を向くのだろう。

「.....くかか」

後ろで、遅れてやってきたオルロックが笑った。

彼にとっても、少女の怒りと―それ以上に彼女が用意した術式は 興味深いものだったようだ。

「やらせてやったらどうだ、君主ロードよ。成功しようが失敗しようが手がかりの一端にはなろうさ」

Г......

師匠の沈黙はごく短かった。

口にしていた葉巻に指をあてがい、うつむいた顔をあげて、こう問うたのだ。

「だが、どうやって?」

「そこのフリューと、隠し部屋を見つけましたの」

「隠し部屋?」

怪訝そうに、師匠の眉が寄った。

「ええ。そこで、この剝離城を構築する基礎術式を見つけました わ。内容が正しいか確認するのと、応じた工作をすませるのにずい ぶん手間がかかりましたけど」

「工作だって?」

「ええ、これを」

手の平にのった宝石を露わにして、少女は優美に微笑した。

「剝離城の部屋という部屋、通路という通路の魔術経路を、すべて 私の宝石で埋め尽くしてきました。ほとんど半日がかりでしたわ」

その意味に、師匠が目を剝いた。

「では、君はまさか……」

「ええ」

対する少女の笑みは、艶然と花開いた。

「剝離城アドラの工房としての機能を、まるごと私がいただこうと 思いますの」

「.....フı

端で聞いていた自分が、思わず絶句する。

それは、まるで寄生虫のような。

あるいは、ロンドンに来てから初めて聞いたコンピュータウィルスのような行為か。

魔術師について詳しくない自分でさえ、その言葉がいかに凄まじいものであるかは体感的に理解できた。工房とは魔術師が何年も何十年もかけて、時には何世代もかけて積み上げた摂理の果てだ。魔術刻印が内部につくりあげる新たな臓器なら、工房は外部につくりあげる新たな異界に他ならない。

なんという力業か。師匠がひとつずつ分析して剝離城の謎を追い 詰めようとしているのに対して、いくら魔術でのこととはいえ、ル ヴィアは単身たった半日で剝離城全体を相手取ると言っているの だ。

まるで、風車と戦おうとするドン・キホーテ。

いやこの場合、老騎士の妄想通り、巨人に剣で戦おうとする愚か 者か。

「そうなれば、いずこに犯人や呪いが潜もうと、私の宝石が炙り出 しますわ。こんな簡単なことはないでしょう?」

「この剝離城がどれほど高度な工房かは分かってるはずだ。いくら 君がエーデルフェルトであろうと」

「いいえ」

ほんの一瞬だけ。

少女の横顔を淡い怯えが掠め、だが刹那の後に残ったのは強敵と の対峙に燃える挑戦者の眼差しであった。満まん腔こうに漲る自信 が、少女をさらに美しく彩っていた。

「エーデルフェルトの妙技、とくとご覧じくださいませ」

「ルヴィアゼリッター」

呼びかけようとした師匠よりも早く、少女は右手を横に振った。

「Call目覚めよ」

可憐な唇が囁く。

騎士の答礼にも似て指先の蒼玉サファイアが輝きだし、その輝きがほかの宝石へと連鎖する。あたかも爆弾の導火線のごとく危険に、しかし大英博物館の元となったという驚異の部屋ヴンダーカンマーのごとき麗しさで、少女の周囲が美しい光に満たされていく。

宝石の魔法円。

起動した魔術はそのまま他者への結界も兼ねるものか、師匠が伸ばした手をばしっという雷鳴とともに弾き返した。

その様子に満足げに微笑し、ルヴィアは囁いた。

「Call目覚めよ」

第一段階は、少女の周囲。

魔法円の輝きがゆっくりと回転しだす。

螺旋状に制御された魔力は、原初のカタチに則のっとって巡り出

す。

このときの直感と、後から師匠に聞いた説明を加えれば、ルヴィアのやろうとしていることはある意味パズルに似ていた。たとえば「3+4=5」などとマッチ棒で描かれた数式から、マッチ棒を一本だけ動かして正しい計算式にしてみせろ、というようなものだ。

カバラによって精緻に組まれた剝離城アドラの術式へ、宝石と自らの魔力をもって最低限だけ手を加え、まったく別の意味の術式に組み替えてしまおうとする試み。

だが、マッチ棒のパズルとは規模も複雑さも比較にさえならなかった。

規模はこの剝離城全体、個々に組まれた魔法円は蟻ありが通るほどのズレさえ許さぬ。

いくら大量に持ってきた宝石のブースターがあれど、少女がやっていることは消防車の放水ノズルから絵の具を噴き出して、数十 メートル先に細密画を描こうとするようなものだった。

しかし、

「Call目覚めよ、Connect with Green 7 for Red 8翠の七番は赤の八番へと接続。. Excitation Red 10,赤の十番を励起し、 and circulation to Blue 4蒼の四番へと循環させよ。. Blue 6, thou connect with Blue 7, 9, 11,蒼の六番は蒼の七番、九番、十一番、 and Red 5, 6, 25 for赤の五番、六番、二十五番とともに Green and Red 11.翠と赤の十一番へと接続し、 Thou shall be fish for comming with me我が元に導かれる魚とならん.」

長く、呪文が続く。

第二段階は、部屋の周囲。

螺旋状に回転した魔力が、蛇のごとく頭をもたげる。

すでに剝離城全体へちりばめられた宝石たちが呼応して、周囲に

満ちた魔力がダンスのように踊り始めた。それにつれて微細な振動が城全体を覆いだし、はっきりと分かるほどに震え始めたのである。

師匠が、天蓋を見上げた。

「.....城が?」

「おいおい。こりゃ、ひょっとして本当にやりとげちまうのか」

手伝っていたはずのフリューさえ、信じられないように口笛を吹いた。

幾多の神秘を目にしてきた彼らでさえ、おいそれとは受け入れがたい光景だった。天才などという安易な言葉ではくくりがたい域に、ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトの魔術は達していた。

届くのか。

剝離城アドラに。

۲.....

オルロックは、無言のまま車椅子で目を細めた。

「Call grace恩恵よ、目覚めよ!」

第三段階は、一気に城の周囲へと広がった。

ひとつの輝きがまた別の輝きとつながって複雑精緻な魔法円となり、その魔法円がまた別の魔法円と連なって、より大きなカタチに 積みあがっていった。もともとあった魔法円自体には傷をつけず、 まったく新たな意味へと生まれ変わらせる。

その都度、少女の周囲の宝石たちは虹色の輝きを宿した。すでに 八割方は虹色へと変じており、おそらくはそのすべてが移行したと き、剝離城の機能はルヴィアの手中に堕ちるのだろう。

圧倒的な魔力が、世界を洗い流す。

この剝離城のすべてを新たな主の元に届けんと、巨大な魔法円を 巡りて回帰する。魔術師ならざる自分の肌ですら感じるほどの規模 で、それはこの客室へと雪崩れ込んだ。

「来た—!」

ルヴィアの瞳が勝利の歓喜に輝く。

しかし、師匠はまったく別の感情に突き動かされ、呻いた。

「違う……? これは単なる反応じゃなくて……」

一際大きな振動が、城に響いた。

同時、少女の身体がぐらりと揺れたのだ。ルヴィアだけではなかった。その場にいたフリューやクラウン、清玄も自らの身体を押さえ、うずくまったのである。

「.....く.....おっ!」

「オルロック老!」

かの老魔術師でさえ例外ではなく、車椅子からぐらりと体勢を崩し、床にくずおれる。

いいや。

自分も。

右手が突然炎と化したかのような痛みと幻覚にとらわれ、ばかり か身体中の神経が反旗を翻した。生存するための回路がすべて遮断 され、抗することなど考えもできず、視界が急速にぼやけていく。

「グレイ!」

その言葉さえ、ひどく遠かった。

ルヴィアのすぐそばに、ひどく汚お穢わいな闇が広がるのが見えた。昏こん倒とうした少女を喰らわんとするように、その闇が顎を開いたのも。

「っ糞くそ―!」

師匠の手がジャケットの懐へと飛び込む。

かろうじて、意識があるのはそこまでだった。

自分も師匠もルヴィアももろともに、その闇へとひきずりこまれていった。

─確かに、そこは剝離城だった。

拙せつが見つめている光景は、あの食卓だった。

招待された魔術師が揃っていたとき皆で朝食を食べたあの部屋で、いくつかの人影がやはり食事を摂っていたのである。ナイフとフォークを手にしたまま、影絵のごとき人々は笑いさざめいていた。

「は。この魔法円の繋ぎ方では一年ももたずにあちこち崩壊する ぞ。お前は魔術も雑なままだな」

そう言って肩をすくめたのは、オルロック・シザームンドだ。

車椅子に乗っていなかった。老境にさしかかってはいるものの、 その姿は明らかに今よりも若い。どことなく茶目っ気のある物言い も、今とはずいぶん異なる。それでいて身に纏った魔性の深さは今 のオルロックと遜色がなかった。

「雑で悪いか」

「おうとも。お前の顔のようだ」

「ぬかせ、この死に損ないが」

「──あら、あなた。わざわざ手伝ってくださってるオルロック様に そんな言い方はないでしょう?」

同席していた女が、口を挟んだ。

巻き毛の美しい女だった。質素な亜麻布リンネルのドレスがよく 似合っていた。

「奥方」

「お疲れ様です。オルロック様」

- 一違う。
- ―これは、拙せつの記憶ではない。
- ──拙せつを侵食しているのは、もっと別の誰かだ。

「ああ、やっと分かった」

声がする。

雑音ノイズまじりの、耳障りな声。

「そうだ。これしかない。最初から分かっていたんだ。どうして気 づかなかった?」

誰だ、これは。

誰だ、これは。

誰だ、これは。

「お前の、魔術刻印を……」

手が伸びる。

白い手が、伸びてくる。

ばつん、と古いフィルムに鋏はさみでも入れたかのように、拙せつの意識はもう一度途絶えた—

額に、温かな感触があった。

思えば、その温かさが自分をつなぎとめてくれていた最後の鎖だった気がする。こちらを観察している怠だるそうな瞳を、夢見心地に見返したまま、自分はぼんやりと呟いた。

「......師匠?」

「やっと気づいたか」

と、呆れたように師匠が額から手を外す。

そのまま、ぐっとフードを戻して、ぽんと額を叩いた。

「痛っ」

「フードはちゃんとしておけ。その顔を見たくないのは知ってるだろう」

「.....は、はい」

すまなくなって、きゅっとフードを押さえたまま、上半身を持ち 上げる。

「......夢を見ていた、気がします。この剝離城にまつわる夢を」

「ほう。お前が視たなら、後でじっくり話を聞きたいが、あまり状 況はそれ向きじゃなくてな」

言って、師匠は周囲を見回した。

「……どうやら閉じ込められたらしい。剝離城の防衛機構といったところか」

「つ……!」

自分も、ようやく気がついた。

視界は見渡す限りが、どろどろとした闇に染められていたのだ。

かろうじて自分たちのいる半径数メートルばかりが元の石畳を残

していたが、それとてじりじりと不可視の闇に侵略されつつあるのが確認できた。

「咄嗟に結界を創ったんだがね。結局、向こう側の仕掛けてきたより大きな結界に引きずり込まれた」

と、師匠はため息をつく。

「空間遮断ほどではないが、性質的にはそれに近い。私たちのいる 位相をほんの少しばかり星幽アストラル界よりにずらしてるという ことだろう。完全に取り込まれてしまえば、肉体を持ったままの私 たちでは生命維持はいささか困難だ。海の中に放り込まれるようなものだからな」

「じゃあ、拙せつたちは……」

「空間遮断と違って単にずらしているだけだから、それ以上の魔力 で突き破れれば問題なかったんだが」

「あいにくですわね」

と、もうひとつの声がした。

ルヴィアであった。

彼女は右手を押さえて、ひどく青白い顔をしていた。

「どうかね? 二流の魔術師としてはエーデルフェルトの魔術に期待したいところだ」

「この通りですわ」

少女が右手を持ち上げる。

その手の平に、いくつかの宝石が載っていた。そのすべてから本来あるべき輝き──魔力が失われていることは、詳しくない自分が見ても一目瞭然だった。

忌々しそうにその宝石を握りしめ、

「さっきの衝撃のせいですわね。まだ、魔術刻印がうまく機能しま せん」 「魔術刻印が?」

聞き返した師匠から、恥じらうようにルヴィアは目をそらす。

「自前の宝石と魔力で抵抗してみましたが、この闇は私のガンドも 受け付けません。いくつも宝石を無駄にしましたわ」

口くち惜おしそうに、表情が歪んだ。

命の危険に震えたのではない。ただ敗北による名誉の毀き損そんをこそ魂より拒絶しているのだ。心底からこの少女は貴族に生まれついているらしかった。

「……どうして、私を助けたんですの」

唇を震わせ、こんな屈辱は耐えられないとばかりに呟く。

「知るか」

「無様に失敗したのは私ですわ。あなたは、どこまで私を馬鹿 に.....っ」

激昂しかけた少女へ、師匠はため息とともに人差し指を立てた。

そして、

「君と同じだ」

と、不機嫌そうに口にしたのである。

「ハイネ・イスタリの死を悔やんだろう。私も傑出した才の浪費や 喪失を惜しむ。それが答えで何か不都合があるか」

「そんな言い訳が通ると?」

「純粋に才能を問うのなら、君は私が見てきた魔術師の中でも間違いなく五指には入る。もしも君が誰かの才能を世界に欠くべからざる宝だというなら、そこには君自身も入るべきじゃないのか」

ぱくぱくと、何か言いたげに少女が口を開いた。

しかし、そこから先に台詞が発されることはなく、細い肩を落と したのだ。 「……なら、仕方ありませんわね」

何か、憑きものが落ちたような顔だった。

新たな宝石をじゃらりと手の平に落とし、吟味するようにつまみ上げる。

「残った宝石で、簡易儀式用の魔法円を用意します。脱出はそれからになるでしょう」

「そうすると、少しだが時間がかかるか。あいにく私は何もできないし、ひとつ休ませてもらおう」

「.....何ですって?」

「後をよろしく」

そのまま、師匠は器用にあぐらを掻いて目を閉じた。

数秒もたたず、寝息をたてていた。瞑想や睡眠管理は魔術師の基礎科目だが、どうしてこういう表層的な技術ばかり長けているのか。

今にも暴発しそうな少女に、ひたすら自分が戦せん慄りつするほかはないのであった。

*

はたして、客室ではもうひとつの事件が進行していた。

「……ルヴィア様」

第二従僕たるクラウンは絨毯を握りしめ、かろうじて意識が途絶 えるのを堪えていたのである。

魔術刻印が機能停止していることに、彼も気づいていた。クラウンもまたエーデルフェルトに代々仕える家の魔術刻印を引き継ぐ身であったが、その機能停止によって同調した神経もひきずられ、あやうく気絶しかけたのだ。

しかし昏倒を免れたところで、その身は自由にならない。

ほぼ物理的に停止した神経は、主の危機に際してすらまともに信号を伝達しない。鍛え抜いた肉体も魔術も、身体が動かぬままでは何の意味もなしはしない。無念に精神こころを打ち震わせ、それでもかすかに身体に残った意識を総動員して、彼は指一本でも動かさんと抗っていた。

衝撃さめやらぬ中、ひとつの影が動いた。

「今の.....は.....」

ロザリンド・イスタリが、おどおどと周囲を見回していたのである。

彼女だけは、今の衝撃を受けていなかったのか。

だとしたら、その理由は。

(魔術刻印.....?)

今の衝撃が魔術刻印を標的としたものであるなら、イスタリの後継者でない彼女が衝撃を無効化するのも道理。

しかし、よりにもよって、この幼い娘では。

客室の硝子が砕けた。

そこから侵入する影を、クラウンは見た。

何らかの魔術によるものか昼日中にあってさえ姿が瞭然とはせぬ、しかし恐るべき速度で肉薄してくる四つ足の怪物——

「……アッシュボーンの……獣……っ!」

呻きは、しかし第二従僕の口から外には漏れなかった。

ぽとりと、血が垂れた。

少女が自らの指に傷をつけ、宝石を石畳に擦りつけている。

そうすることで、即席ながら強い魔力が籠もった魔法円をつくろうとしているのであった。師匠の講義によれば、多くの魔術は魔術回路に魔力を通すだけの一工程シングルアクション、ひとくぎりの呪文をもってひとつの神秘を固定化する一小節ワンカウント、十以上の小節をもって簡易儀式となす瞬間契約テンカウントなどに大別されるという。

つまり、一工程シングルアクションでは突破できなかった結界を 破るために、準備を重ねているということか。

r......

ただ、ギスギスした空気が痛かった。

おおよそはルヴィアから眠る師匠への敵意で、中間にいるだけの 自分でさえ、ざくざくと針のむしろにあっている気分だ。正直引き 籠もりは得意だし、他人との共感など諦めている自分だが、そうし た信条をすべて売り払いたいと思い詰めるほどに、少女の激情は強 烈だった。

何か話題がないかと、とにかく言えそうなことを探して、

「......あの、そういえば、さっきのルヴィアさん、まるでハッカー みたいでしたよね」

「ハッカー?」

訊き返され、慌てて言葉を継ぐ。

「ええと、拙せつもロンドンに来てから、テレビの映画で初めて見

たんですが、その、コンピュータとか乗っ取る道具を使ってて...... なんか、ギリシャ神話っぽい名前がついてたと思うんですけど」

「……トロイの木馬だ」

どこから聞いていたのか、薄く目を開いた師匠が助け船を出してくれた。

「先んじて相手のコンピュータに侵入しておき、必要に応じてその コントロール権を奪うためのプログラムだな」

「ああ、なるほど。それでトロイの木馬ですのね。あれはトロイア 戦争で敵国に運び込まれた巨像ですもの。内側にいたのは、オ デュッセウス、小アイアース、メネラーオス、ディオメデス。名だ たる英霊ばかりですわね。内側から食い尽くされたトロイアを思う と、ぞっとしますわ」

ルヴィアにしても、もとの神話の方が親しみ深かったらしい。

トロイア戦争。

ギリシャ神話の中でも、とりわけ多くの文人に謳うたわれたエピ ソードだ。

昔、故郷の神父様が話してくれた──その戦争の決め手となったのが、トロイの木馬であった。巨大な木馬の内側に歴戦の英雄たちを隠し、トロイアの国に運び込ませたという逸話は今更繙くまでもないだろう。

「まあ、そのあたりの基本概念はコンピュータでも魔術でも大して 変わらんよ。古代だろうが現代だろうが結局は人間の使う道具だ」

「そんなことを仰る君主ロードですから、周囲の尊敬を得られない のではなくて?」

「.....ん、む」

少女の指摘に、師匠が黙り込む。

その沈黙が思いの外長く続いた。突然窒息したのではないかと錯覚するぐらい、あまりにも重苦しい沈黙であった。そんなにショックだったのかと、日頃師匠には辛辣な自分ですら一瞬同情してしま

うほどだ。

「えと、師匠? そんなに気にしなくても.....」

「……そうか。それだ。必要だったのはそのピースだ」

「え? ₁

首を傾げた自分をよそに、師匠はぐるりともうひとりの少女へと 向き直った。

「ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルト。魔法円の設置は終わったか?」

「な、何ですの。それはおおよそは終わりましたけど、まだ慣らし もかけてませんわよ」

突然師匠に呼ばれ、不意打ちを食らったみたいにルヴィアが顔を あげる。

「どうしても、すぐに出る必要ができた」

「あなた、何を─」

ついに頭がおかしくなったかと言わんばかりの少女へ、師匠は鋭く畳みかける。

「出なければ、我々はもちろん、あの場に残ったほかの魔術師も君 の連れてきた第二従僕もすべて鏖おう殺さつされるぞ」

そう言い切ったタイミングだった。

周囲から、ぎりぎりと不穏な音がしはじめたのだ。

空気が硬質の物質に変じたかのごとき異常な気配とともに、おぞましいまでの圧迫感がこちらの肺を締め付けるようだ。

「.....これは」

と、少女が見回す。

こちらの敷いた結界が、圧力に飲み込まれつつあった。もとより こちらの結界は、咄嗟に師匠がつくりあげたものだ。相手が本気に なればひとたまりもあるまい。

「こちらの動きに反応しているらしいな」

と、師匠は分析した。

「閉じこめたまま、放置しておくつもりはないということか。この 結界の強度なら、物理的に圧搾するのは難しくあるまい」

「冗談じゃありませんわ!」

猛然と立ち上がった少女は、人差し指を突き出した。

「Call blue, red, green for your queen目覚めよ、蒼、紅、翠。汝の女王がため!」

一小節ワンカウント。

残った宝石を怒ど濤とうのごとく費やし、叩きつけられるガンドの猛打ガトリング。それは吹き荒れる地上の虹にも似て、凄まじいまでの魔力をひたすら力任せに放出し続ける。輝きは果敢に闇へと挑み、神が最初に残した言葉を再生せんと迸った。

光よ、あれ。

しかし、闇はほどけぬ。

ルヴィアの放ついくつもの魔弾をすべて吞み込まんとするよう に、むしろこちらを圧搾する速度を増すばかりだ。

「ふざけないで!」

少女が叫ぶ。

なおも小オ源ドを練り上げ、魔弾を放つ。

万色の輝きこそ豪華壮麗。だが、その内実は悲壮なまでの覚悟が 支えている。通常の魔術程度ならともかく、これほど高出力の魔弾 を放出しつづけるのは神経を溶鉱炉にくべるようなものだ。加熱し 続ける魔力に魔術回路は残らず悲鳴をあげ、主たるルヴィアに即時 停止を要請する。本来それを補佐するための魔術刻印が復帰したと は、少女から聞いていなかった。

Г......

その様子を見つめて、師匠は改めて口を開いた。

「ルヴィア」

「なんですの。絶望して先に死にたいとでも仰るつもり?」

この期に及んでも、少女の目は一切の絶望を宿していなかった。 ただ緋色の宝石にも似た熱情だけが燃えさかっていた。

そんな少女とこの絶望的な状況に対して、師匠は言う。

「石ではなく、泥だと思いたまえ」

「は?」

少女の眉間が殺意交じりに歪む。一秒遅れればそのまま師匠を貫いただろう殺意は、しかし次の瞬間まったく別の行為によって歪められた。

細い手首を、師匠が握りしめたのだ。

「あなた―!」

「宝石のことだ」

まなじりを決した少女に、低く師匠が囁く。

「紅玉ルビーの内側の脈動を君は感じているはずだ。だが、それは 君が操るべき力の半分に過ぎない」

「……何、を」

普段なら、そんな言葉は笑い飛ばしていただろう。

いくら師匠が君主ロードとはいえ、ルヴィアにも何代と重ねてきたエーデルフェルトの誇りがあるはずだ。つかのまとはいえその誇りをよそにおいて、師匠の言葉を聞き届けさせたのは、いかなる心

境の変化だったか。

「先にも話していただろう。エーデルフェルトの魔術の本質は価値を誇るのではない。価値を流通させることだ。風はすでに吹いている。水はすでに流れている。君の石は君の心臓でありながら、外界のすべてでもある。あの闇さえもすべてのひとつに過ぎない。水が高きから低きに流れるように、電位が高きから低きに流れるように、力の流動そのものが君の魔術だ。心臓の鼓動のひとつひとつで宝石を突き動かすと同時に、あの闇の内側の、さらに内側まで感じたまえ」

それは、一流アスリートに助言するスポーツドクターのようなものだったろうか。

だが、観念的なものだけにとどまるわけではない。

握りしめられた手首からまったく別のものが伝わったことに気づき、たちまちルヴィアが眉をつりあげたのだ。

「あなた、私の魔術回路に接続を一」

魔術回路への接続。

その意味に自分が戦慄したとき、師匠は決死の面もちで叫んでい た。

「拒むなら拒め! 君の好きにしろ!」

師匠の言ってることは、まるで正気ではなかった。

なぜなら、魔術回路の接続はむしろ干渉された側にこそ主導権が あるからだ。

一定以上の技量を持ってる魔術師なら、接続してきた側の魔術回路を好き勝手にいじることも焼き切ることもたやすい。つまり、今ルヴィアがその気であれば、師匠の魔術回路をことごとく破壊するのもできるということ。神経と魔術回路のつながりを考えれば、これは心臓を差し出したも同じ行為だった。

しかし、ルヴィアは逆らわなかった。

師匠の魔術回路から流れ込むままに彼女の内側のイメージが変容していくのが、はたで見ている自分にも分かった。いままでの彼女にはなかった、ひどく自然で穏やかな魔力の流動だった。

流動。

それこそが彼女の魔術の本質だと、師匠は言わなかったか。

「いいかね? 君がやろうとしていた剝離城の乗っ取りは失敗したわけじゃない。むしろ成功したからこそ、セキュリティが発動したと見るべきだ。だったら、君がつくりあげた魔法円はこの闇の外側にもある。内と外の自分を同時に意識したまえ。そして境界自身である君も」

はたして、師匠の声はどこまで聞こえていたか。

それとも、ひょっとすると魔術回路を直接つないでいたふたりに は、本当は言葉など必要なかったかもしれない。

「君の属性は地。『自然学』の四分類からすれば冷にして乾。その位置を自覚しつつ、温にして乾なる火、温にして湿なる風、冷にして湿なる水へと流動させ、蓄積させ、制圧したまえ。制圧された『力』をもって、現代魔術では天使と呼ぶ。君の蒐集すべき天使はそこにある」

ぎゅるん、ともう一段階魔力が循環したように思えた。

師匠の魔力に誘導され、ルヴィアの身体を巡る魔力がいままでよりもうひとつ螺旋を増やし、再加速するイメージ。

ふたりの魔術回路を通じて、指先の宝石が輝きを増す。

いいや、闇もまた宝石であったかのように煌めき出した。雷はまず空気の絶縁を破壊して自らの行く道をつくりあげてから邁進するという。あたかもその道理に倣うかのように、今ルヴィアが操る魔力はこちらと向こうの『道パス』をつくりあげてから放たれようとしていた。

だが、その寸前。

ぶちぶち、と嫌な音がしたのだ。

宝石とともに、師匠の手の甲が真っ赤に染まっていた。

「師匠―」

「あなた―」

自分とルヴィアの声を受けて、

「問題ない。慣れない魔力で、付近の血管と神経がやられただけ だ」

無表情に師匠が口にする。



尋常ならざる魔力によって、血管と神経を破壊されながら微動だにしなかった。ますます精緻にルヴィアの魔力を操りながら、師匠の眼差しはただ闇だけを見つめていた。その瞳の奥に燻くすぶる熾おき火びを見たような気がした。

「撃て!」

叫びに、ルヴィアの呪文スペルが応じた。

「Call目覚めよ!」

それこそは、魔弾を解放する呪文。

一斉に迸った光芒が闇に溶けて──硝子を思わせて、打ち砕く。

突然、自分たちの視界は溢れる色彩に埋め尽くされた。

「……出ら、れた?」

よろめきながら、起きあがる。

さきほどの客室から少し離れた廊下のようだった。溢れる色彩は窓からこぼれる昼下がりの陽光であり、遥かそびえた山脈の峰であった。

「結界を砕いた衝撃で、座標がずれたみたいですわね」

ルヴィアもぱんぱんとドレスのスカートを叩いて、ぎこちなく立 ち上がる。

あれほどの魔術を行使しながら、さほどの疲れは残ってないらしかった。魔力回路の強きょう靱じんさも一流の素質だとするならば、やはりこの少女は超一流の資質を持ち合わせているのであった。

「.....つ」

ぞわ、と背筋の産毛がそそり立つ。

振り返った先で、師匠が佇んでいた。だけど、本当に師匠だろうかと思った。血の滴った手をハンカチで拭きつつ、その形相はただならぬ感情を漲らせていた。

「......師匠?」

この剝離城に来て以来、ルヴィアがこちらに敵意を向けることは 何度となくあった。

だが師匠からルヴィアへ―しかも、これほど切実で悽せい愴そうな殺意を向けたのは、初めてのことだった。

「君たちは、本当に卑怯だ」

胃の底から滲み出るような言葉だった。

「ただ天才であるというだけで、あっさりと高みへ飛翔していく。 私がただ思い描いているだけの空を自由に飛び回る」

ひどく重くて、切ない言葉だった。

師匠にとっての魔術とは、それほど大切なものなのだろう。普段 は心に秘めているとしても、永遠に届かない境地を見せ続けられる 気持ちは、どれほどの痛みを伴うのだろう。

しばらく、ルヴィアも沈黙していた。

「私も、あなたを許せませんわ。たとえ空が落ちようとも」

古いヨーロッパの言い回しだった。

多くはケルトや北欧で誓いゲッシュを立てるときに使ったという、自分の耳にも馴染む言葉。しかし、この少女の口から発されると、それこそ神話の一幕のごとき気配を宿すのであった。

小さく息をついて、ルヴィアはもう一度師匠を見上げた。

「ですけど、ひとつ質問させていただけます?」

「好きにしたまえ」

気怠げに言った師匠へ、少女はこう問うたのだ。

「十年前、あなたの師──ケイネス・エルメロイ・アーチボルトが死んだとき、どう思いました?」

(.....あ)

自分もまた、その質問に鼓動が跳ね上がるのを感じた。

師匠が、自らの師を殺したともいう第四次聖杯戦争の出来事。自 分の知らない時代。

「信じてもらえるかどうかは分からないが」

と前置きして、師匠が言葉を続けた。

「ケイネス師を殺したのは私じゃない。とある剣セのイ英バ霊ーとそのマスターだ。私はケイネス師の死に様を見てもいない。──だけどね、後から知ったとき、やはり悲しかったよ」

「悲しかった?」

「あれほどの才が無為に喪うしなわれたことも、あの人の見ていた 景色を結局私には一度も共有できなかったことも、ただただ悲し かった。それだけだ。気の利いた物言いができなくてすまないな」

「.....そう」

陽光の下で、ルヴィアが睫毛を伏せた。

ほんの数秒で瞼は開き、凛とした声音でこう命じたのである。

「だったら、あなたは私の指導役チューターになりなさい」

「は?」

突拍子もない言葉に、師匠が瞬きした。

「ま、待て。私のことを、魔術の破壊者だとか言ったのは君だろう」

「言いましたわ。その思いはいまだに変わっていません。ですが、 それだけの存在でないことも、今あなたは証明されました」 至極丁寧に、ルヴィアは説明する。

「それに、あなたは他人の魔術に干渉しすぎました。魔術回路まで接続した以上、エーデルフェルトの秘奥に手を出したも同然です。ここまで知られた以上放置はできません。──ですが、私個人の指導役チューターとなれば不問にできますわ。ええ、どうせ来年から時計塔にも通うつもりでしたしね」

「.....は?」

もう一度、同じ表情のまま、師匠があっけに取られた。

その思考は魔術師として正しい。しかし、あまりにも正しすぎて本来の魔術師から遠すぎる。少女のやり方は世界のどこででも通じる正攻法であり、闇と月を愛する魔術師としてはむしろ欠陥品とすら言い得る代物だった。

目を白黒させている自分の横で、不意に爽やかな声音が空気を 割った。

師匠が笑い出したのだ。こんな状況だというのに、まるですべて を忘却しきったかのような笑い声だった。

「清廉、だな」

目のあたりをこすりながら、告げた。

「な、何が?」

「君の在り方だよ」

その言葉に、ルヴィアが口ごもった。

淡く耳が赤らんでいたような気もするが、よく分からなかった。 つんとした感じに視線を背け、改めて訊く。

「と、とにかく、私の要望はどうですの」

「指導役チューターの件は、後で考えさせてもらおう。どの道、現代魔術科を志望するならそれ自体を止める権利はない。君が通るかどうかは保証できんがな」

「あら、私が通らないわけがあって?」

あくまで挑戦的に、少女が言う。

しかし、ふたりともすでに意識は別のことに移っていた。

「まずは、この事件ですわね」

「ああ。今はこの剝離城のケリをつけなきゃなるまい。──いい な? グレイ」

「.....は、はい」

水を向けられた拙せつも、慌てて何度もうなずいたのだった。



客室に舞い戻って、自分たちが見たのは酸鼻極まる光景だった。

壁も調度もペンキでも塗りたくったかのように血まみれで、足の 踏み場もないほどあちこちに肉片が散乱していたからだ。

一瞬だけ口元を手で覆い、すぐにルヴィアが駆けだした。

「クラウン!」

「.....お嬢様」

息苦しそうに、巨漢がひざまずいていた。

「申し訳ありません……」

その言葉すら、朽ちた枯れ木を思わせた。

ルヴィアの魔術刻印を停止させた衝撃は、この巨漢をも苛んでいたらしかった。いや、比較するとルヴィアの症状は軽い感じもあった。何かしら、この少女も防御策を保持していたのかもしれない。

「何があったの?」

「あの直後......怪物が現れ......ロザリンド殿を攫さらっていきました......。清玄殿もそれを庇って一緒に......」

「怪物? 本当にそんなものが.....」

言いかけたルヴィアが視線を移す。

「.....ひい.....ひい.....」

尻餅をついたフリューもまた、喘鳴をあげていた。

こちらもなんとか一命を取り留めたらしい。周囲に突き立ったナイフからすると、おそらくは結界を張ってひきこもっていたもの

か。

まだ視界がぼんやりしているのか、何度も眉のあたりを揉みながら、

「おっとろしく手際のいい化け物だったぜ……。こっちがまともに機能回復する前に、一番ヤバイ相手だけ瞬殺していきやがんのよ。 ああ、ろくに姿すら拝めなかった……」

「では、これは……」

師匠の問いに、かくかくとフリューがうなずいた。

「オルロックの爺さんだよ……」

もはや、原形を留めてない死体の名を、占星術師はそう呼んだ。

文字通りの八つ裂きにされた身体は、もはやどれがどの部位かす ら、ろくに分からなくなっていた。

第三の被害者。

だが、もはやこれは犯罪ではなく災厄だ。

荒れ狂う剝離城の災害から、かの老魔術師ですら逃げられなかったのか。

しかし、

「オルロック・シザームンド」

その部屋の中央で、師匠は呼びかけた。

あまりの無意味さに、思わず拙せつが振り返ってしまう。

「師匠。何を……」

「違う。そこに転がっている死骸じゃない」

否定して、さらに師匠が言った。

到底理解できない発言だったが、しかし師匠の視線は床に吸いつけられたままだった。

「あなただ。オルロック・シザームンド」

すると、もうひとり、すぐ近くに倒れていた相手がゆっくり起き あがったのだ。

助手の少年であった。

「あなたが、本当のオルロック・シザームンドでしょう」

「え.....?」

困惑した自分を前に、その少年は相好を崩した。

主の血にまみれた唇の端をつり上げて、いままで一度も表情を動かしたことのない少年がにこりと笑ったのだ。

「本当の、というのは正確じゃないな。若き君主ロードよ」

「つー」

思わず息を吞んでしまったのは、声音も張りもまるで違うのに、 その口調が生前のオルロック・シザームンドそのままであったから だ。

生き写しという言葉がある。

この場合、まさしく写したのである。

「転写させたのはあくまで記憶と人格に過ぎないさ。まあ、もとの 身体に残っていたのは一割かそこらじゃがな」

くつくつと、少年──オルロックが笑った。

「蝶魔術パピリオ・マギアはそういう魔術なのですね」

「慧眼と言いたいが、もう少し老体に花を持たせんか」

と、少年は指を回して見せた。

蝶魔術パピリオ・マギアとは、芋虫が蛹を経て蝶になるという一連の変化を模した魔術だとは聞いていた。だとすれば、この復活も応用だと納得できなくはない。

しかし、聞くのと見るのではまるで違う。あまりに意外すぎる変化に、ただ自分は低く呻くことしかできなかった。

「もともと、この身体自体、わしの精液と血でこしらえた人造生命ホムンクルスでな。本当は魔術刻印と一緒にちょっとずつ移植して、最後にまとめて人格を移動させるんじゃが、急にやることになったから一割ほどは欠損するはめになったわ。さきほどの妙な不意打ちのせいで、残りも半ばは機能停止したままじゃしな」

忌々しそうに、少年の姿でオルロックが言う。

実際のところ、一割ほどの欠損というのはそんな軽々しく話せるようなものではない。とりわけ歴史ある魔術刻印は一割でも何十年という歳月―先達となった魔術師の命そのものでできあがっているからだ。だが、すでに老衰が始まってるというオルロックの場合は事情が異なるのか、その語り口にはむしろせいせいしたと言わんばかりの感情がこもっていた。

対する師匠は唇を嚙み、一拍の間をおいて切り出した。

「そのことで、ご相談があります」

「ほう」

少年が首を傾げたところで、ルヴィアが口を挟む。

「一エルメロイII世。それより、急いで怪物を捜さないと」

「必要ない。賭けてもいいが、その怪物はロザリンド嬢には危害を 加えないよ」

ゆるりと、師匠はかぶりを振った。声音の底にへばりついたどう しようもない疲れに、拙以外の誰かが気がついたかどうか。

壊れた窓から差し込む陽光に目を細め、肺腑から押し出すように 言う。

「だから、もう終わらせてしまおう」

太陽が完全に墜ちて、闇が剝離城アドラを包んだ。

もとより山中にある城だ。まともな戦に使われたことこそないが、最も近い村でさえ軽く十キロ近く獣道を渡る必要がある。よほどの登山家であっても、こうなってしまえば出入りは不可能といってよいだろう。

それにとっては、関係のないことだった。

蜘蛛のごとく壁を這い、鐘楼のすぐそばで耳を澄ましている。

目的は、ただひとり。

肺腑を焼く憎悪の炎は、その標的を捉えるまではけして消えることはないのだと、嫌と言うほど分かっていた。ひたすらに感覚を研ぎ澄ます。万が一にも逃げられることがあってはならないのだと、全神経と魔術回路をそのために注ぎ込んだ。

剝離城のすべては、それの味方だった。

天使のあるところ、彼の手も瞳もどこまでも届く。

その瞳が、城壁の近くを彷徨う使い魔を発見していたのだ。

蝶である。

何頭かの淡く発光する魔術の蝶が、ひらひらと前庭から城壁、また主郭キープの玄関のあたりを飛んでいたのである。おそらくは脱出のためだろう。どうやら使い魔の蝶を使って、様子見をしていたらしい。

Г.....

あの蝶だけは、見間違えようがない。

まさか、あの魔術師が生きているとは思いもよらなかったが.....

それならもう一度殺せばよいだけだ。儀式はその後にいくらでも続けられる。

だから、それはまず蝶を捕らえるために耳を澄ましていた。

魔術の発動ですら音の反射からは逃れられぬ。むしろ音の波が 個々の魔力によって影響されるため、より発見しやすくなると、それは経験則から知っていた。使い魔を手中にすれば、その縁パスを 使って主を発見することもたやすい。どのように身を隠しているか は分からぬが、今すぐ引きずり出してくれよう。

壁を伝う。

選んだのは剝離城の主郭キープの側だ。

身軽さには自信がある。それにしてみればたやすすぎる作業だった。

玄関のすぐそばで、こちらに気づきもせず蝶は舞っていた。にんまりと唇が歪むのを抑えきれぬまま、それは素早く手を伸ばそうとした。

刹那、光が射したのだ。

思いがけない明るさに、それがたじろぐ。陽光を浴びた吸血鬼のようだった。

「……やはり、現れましたね」

と、青年は囁いた。

その手にあるのは、錆びた銅のカンテラだった。どうやら城から 持ち出した物品らしく、古くなった油の臭いがいまさらになって鼻 についた。

「ええ。もちろんほかの獲物も大事でしょうが、一番の標的に逃げ られるわけにはいかないでしょう」

足音がした。

青年の後ろから、何人かの魔術師が現れたのだ。

誰もが意外そうな顔を隠しもしなかった。

「って、どういうことだよこれ」

「見ての通りですよ」

青年が、カンテラを持ち上げる。

揺らめく光が、男の姿を照らしあげた。

兜巾や法螺貝がなくても、その姿は見間違えようがなかったろう。どこか間の抜けた面差しに眼帯をつけている表情は、この夜闇にあってもどこか人を和ませる印象があった。

こんな場でなければ。

カンテラを掲げたまま、ロード・エルメロイII世が裁定する。

「犯人はあなただ。時任次郎坊清玄……いいや、ゲリュオン・アッシュボーンの息子、グラニド・アッシュボーン」

*

夜の闇から、拙せつもゆっくりと顔を出した。

すでに、剝離城主郭キープの玄関には、五人の魔術師が揃っていた。

師匠。

ルヴィア。

フリュー。

かつては助手であった──今はオルロックそのものの少年。

そして、時任次郎坊清玄。

前者の四人は、自分と同じように、前庭の森の魔法円へ潜んでい

たものだった。第二従僕のクラウンのみ、主郭キープの内部で非常 用の準備をしてもらっている。

なお、隠れ身の魔法円を敷いたのはフリューである。方位による 術を何度も同じ場所で使うと強度が鈍る……と、本人は嫌がってい たが、集まった魔術師の中でも最も向いているということで、師匠 に説得されたのだ。

そのフリューが、真っ先に目を白黒させた。

「おいおい本気かよ。そいつが犯人だってのはともかくとして、ゲ リュオン・アッシュボーンの息子だって?」

「そ、そや。何言うてるんや」

清玄は、極めて大袈裟にばたばたと手を振った。

兜巾や法螺貝を叩き、ついでに自分の頰をこれでもかと引っ張って、

「どう見ても、わいはアッシュボーンなんてガラじゃないやろ? あの化け物からやっとの思いで抜け出してきたところなんや。早は よロザリンドちゃんを助けたらんと」

Г......

師匠は小さくため息をついた。

カンテラをゆっくりと足下に下ろし、咳払いした。

「では、この事件の最初からいこうか」

と、語り始める。

夜風が吹き、前庭の森で葉擦れの音を立てた。妖精たちの嬌きょう声せいのようでもあった。いや、この剝離城アドラならば、ふさわしいのは天使たちの囁き声か。

主よ、いずこヘクォ・ヴァディス。

裁きの御座にて、我々を審判されるべき方はいずこにありや。

ジャケットの懐から、師匠があの招待状を取り出した。

「そもそも、この招待状は何なんだ?」

「何……って、遺産の相続者を決めるための」

言いかけたルヴィアを阻み、師匠はさらに続ける。

「もっと率直に言おう。どうして、私たちをこの城に集めた? 遺産にふさわしい相手を見つけるための謎かけ? そんなものが魔術師の本質に関係しないことは、皆さん嫌というほどご存じのはずだ」

いや違う。

嫌というほど知っているのは、誰よりも師匠自身だ。知識的にどれほど魔術の本質へ迫ろうが、師匠と魔術の距離はほんのわずかも縮まらない。むしろ知れば知るほどに、永遠ともいえる距離を悟るだけだったはずだ。

どうして、そんなことに耐えられるのだろうと思う。

分からない。

それとも、師匠にとっては最初から当たり前だったのだろうか。

「……ロード・エルメロイII世」

呻くように、フリューが名を呼んだ。

「だったら―この集会は何なんだ?」

「ホワイダニット。理由だけは分かる。いや分かっていた」

と、師匠がうなずいた。

「魔術師は魔術を子供に相続させたがる。それだけだよ」

しんと沈黙が落ちた。

誰もがその答えは共感できる。魔術師であれば当たり前のことだ

と最初から知っている。しかし同時に、今回の場合にはどうしても 適用できなかった。

「ロード・エルメロイII世、あんた正気なんか? そもそも、わいはゲリュオン・アッシュボーンに子供がいたって話も初耳やで」

ここぞとばかりに、犯人呼ばわりされた時任次郎坊清玄が自らのこめかみをつつく。

「ここの息子の葬儀ならわしも付き合った。間違いなく死んでおったぞ。それとも、あれは偽物だったとでも?」

「ええ、それもオルロック老の言うとおりです。死体は本物だった でしょう」

続けて聞いた少年に、師匠がうなずく。

「わし? え、あんたがオルロック? なんやそれ?」

目を白黒させつつ口を挟んだ清玄を無視して、師匠は言葉を継 ぐ。

「ゲリュオン・アッシュボーンの息子が死んだからこそ、この事件が始まったんですよ」

「何を言ってる?」

「魔術刻印を修復する〈修復師〉」

静かに、アッシュボーンの二つ名を口にした。

修復師。魔術の世界にも希なる、魔術刻印を復元する者。本来の 調律師でさえ遠く及ばない存在。

「あるいは、こんな話を聞いたことがないか? 心臓や肝臓といった臓器を移植された者が、その記憶や感情を引き継いでしまうことがあると」

移植手術。

心臓などの重要な臓器の移植によって、突然好みや性格が変わったり触ったこともないピアノの才能を芽生えさせたりという都市伝

説的なニュースは、自分も雑誌などで見たことがあった。

「いえ、待ってください。どうして移植なんて話がでてきますの? アッシュボーンの秘法とは魔術刻印の修復では──」

「そのための材料は何だ?」

声をあげたルヴィアに、師匠が訊き返した。

「破損した魔術刻印を一体何で埋める? 失った魔術刻印の部位を埋めるのに最も適切なものは?」

「魔術刻印と言わせたいのでしたら、根本から間違ってますわ。他 人に適合しないからこその魔術刻印でしょう」

「……蝶魔術パピリオ・マギア」

最後は、師匠の言葉ではなかった。

拙のそれだった。

魔術師たちが一斉に振り返る中、自分はそれを意識もせず、とあることを連想していた。

- 一魔術刻印の修復師。
- ―魔術刻印とは、他人の『臓器』のようなもの。
- ──蝶魔術パピリオ・マギアは、芋虫から蛹を経て蝶に至るまで、 まったく別の生物になってしまう神秘に目をつけたもの。

だとすれば。

だとすれば、時任次郎坊清玄がグラニド・アッシュボーンだというのは—。

「オルロック・シザームンド。あなたはここの主とともに研究して いたと言ったな」 師匠が、オルロックとなった少年魔術師に告げる。

「それがどのような研究か、今なら分かる」

Г......

オルロックはすぐには答えない。

代わりに、清玄が声を荒らげた。

「荒唐無稽や!」

「そうかな? そもそも魔術師に似合わない言葉だろうそれは」

唸りをあげた眼帯の山伏に、師匠はそらっとぼけるみたいに視線 を泳がせた。

それから、革張りの手帳を取り出した。

「これは、ミス・エーデルフェルトが探索していた隠し部屋で、さきほど見つけた品だ。魔術刻印の修復を受けた魔術師の名簿らしい。──君の名前、時任次郎坊清玄の記述もあった」

「ヘ.....ラ?!」

清玄の声が裏返った。

対する師匠は、けして緩めずに言い募る。

「君は、すでにこの剝離城で魔術刻印の修復措置を受けているんだ よ」

۲.....

若き山伏の横顔は、夜目にも蒼白となっていた。

まるで処刑人が振るう斧のように、師匠の言葉は粛々と響いた。

「この作業は、死者蘇生とは似て非なるものだ」

さらに、師匠は続ける。

「死者の記憶や感情を継いでいても、それは死せる当人とは別物だ

ろう。ハードディスクに同じデータを組み込んだだけだ。魔法の域 に近づいたことにはなっても、そこに指をかけたという表現にはあ たるまい。──似た魔術を使うどなたかもそう認識されてるはずだ」

「気恥ずかしい話じゃの。残念ながら第三魔法にはほど遠いわ」

「だからといって、蝶魔術パピリオ・マギアが劣った魔術ということにはけしてならないでしょう」

オルロックにとりなしつつ、冷え冷えと師匠の言葉は流れた。

「結果として、死せるグラニド・アッシュボーンは剝離された。そして新たな魔術刻印の材料として混ぜ合わされ、君の身体の一部として息づくこととなった」

ハッカー。

トロイの木馬。

「......冗談やろ?」

と、清玄は法衣の両手を広げた。

「わいは時任次郎坊清玄やで」

「今言ったはずだよ。君がそう思っていることと、この仮説とは矛盾しない。否定したいなら別の材料を持ってくるべきだ。──加えて言えば、ハイネの事件の際存在していたアリバイも意味をなさなくなったな。君がグラニド・アッシュボーンであるなら、従僕たちは喜んで口裏を合わせるだろう」

悲しげに、師匠は言った。

「まとめて私たちを殺さなかったのは、主を殺した後、剝離した魔 術刻印を保存処理するのにそれなりの期間――おそらく丸―日ほどか かるからだろう。〈天使名〉を使って儀式めいた感じに仕立てたの は、ひとりずつ殺していく事実を不思議に思わせないためもあったか? 化野菱理を串刺しにして、ハイネの死体を同じ場所で見せつけたのも」

「わいはー」

よろめいた清玄と同時に、まったく別のものが応じた。

剝離城の主郭キープから飛び降りたそれの気配に、直前まで誰も 気づかなかった。大地に降りたった衝撃だけで、おびただしく塵じ ん埃あいが舞い上がり、こちらの顔を打った。

「師匠!」

「ああ.....」

清玄を庇うように、怪物は前へ出た。

カンテラの灯火が、その姿を足下から照らしあげる。

体高だけで二メートルは超えている。巨大な狼か蜘蛛に似ていた。泥と血のへばりついた毛皮はまるで金属の鎧のようで、もっとおぞましいのは、そこかしこに人の名残があることだった。

「一天使の名を、問う」

と、それは唸りをあげた。

*

「一天使の名を、問う」

と、それは唸りをあげた。

はたして、ハイネ・イスタリにも投げかけられた質問だったろうか。化野菱理はどうだったろうか。

そして、今は。

「一答えられぬなら、剝がせてもらう」

対する師匠が、ぽつりと呟いたのだ。

「Aladiahアラディア」

途端、獣が硬直したのが誰にも分かった。

その様子に、師匠はひとつ息をついた。足下のカンテラの小窓を 開け、内側の火に葉巻を押しつける。

「これは、単にゲリュオン・アッシュボーンのお遊びですよ。答えられたからといって遺産を渡す気なんてあったかどうか。まあなかった方に賭けてもいいですが」

ゆっくりと煙を口に含んで、師匠が続ける。

「剝離城アドラ。アドラは堕天使Adramelecアドラメレクの略でしょう。ギリシャ神話の女神であるアドラスティアも一応考えましたが、向こうには天使にまつわる伝承もありませんし、最初に除外してました」

「つー」

ルヴィアの片眉があがった。

もちろん、彼女もその可能性は考えていたのだ。工房を乗っ取ろうとする前に見つけた基礎術式にも、いくつかの堕天使の名前があり、その中にはアドラメレクの名前もあったぐらいなのだから。

「だが堕天使では解答に使えない。問われた名が天使である以上、どうにか天使に戻してやらねばならない」

つまらなげに言って、火のついた葉巻を虚空に掲げた。

「この方法はシェムハムフォラエを持ち出した段階で明白です。もともとシェムハムフォラエは聖句から抜き出した三文字を並べて、 天使の名に再構築したものだ。私の〈天使名〉のMihaelミハエルであればMIHから。ルヴィアゼリッタ氏のMichaelミカエルであればMIKからつくりだしたわけです。ああ、もともとがヘブライ語なので、変換は純粋な文字ではなく音を重視しててずれますけどね。chがKだったりするのはそういう理由ですよ」

葉巻の先端で、残像がアルファベットを創る。

 M_{\circ}

I,

H.

その三文字の後、Mihaelと綴る。

再構築。

省略法ノタリコンの逆。

たとえば、アーメンからアドナイ・メレフ・ネエマーンをつくりだすようなもの。

「さてAdramelecアドラメレクの場合、ADR、ADM、ADLといったところでしょう。この順番を入れ替えたりさきほどみたいに発音をずらしたり……とした場合、シェムハムフォラエにあてはまる天使がAladiahアラディアですよ。ほら、子供向けのパズルに載りそうな単純さでしょう」

小さく、師匠がため息をつく。

言われてみれば、ただの暗号に過ぎない。魔術師にとって重要な技術ではあっても、魔術そのものの本質とはほど遠い。だからこそゲリュオン・アッシュボーンのお遊びに過ぎないと断言したのだろう。

「ああ、ちなみに台座のメッセージ──『天使は獣なり。西にありて 天空を睨み、太陽を吞む』というのは、つまるところ十二宮の関連 だと駄目押ししてるんでしょう。親切と言えば親切です。ですが、 こんなつまらない問いかけ、魔術師ならまじめにやらないでしょ う。こちらの目を逸らすための仕掛け以上のものじゃない」

「ああ……そうだろうね」

怪物の背後で、肯定の声があった。

知っているけど、知らない声音だった。

オルロックのときと逆。時任次郎坊清玄の声音でありながら彼ではありえない口調。

「お前が.....」

と、師匠が言った。

彼はうなずいた。

山伏の法衣の右肩を、力任せに引き破る。思いの外たくましい二の腕に、淡く発光する魔術刻印が露わとなった。ふたつの紋様が融合したかのようなカタチで、ちょうど片方の紋様がもう片方の紋様の意味を抑え込んでいるように見えた。

「……僕が、グラニド・アッシュボーンだ」

清玄─いや、グラニドが笑った。

同時、獣が叫んだのだ。

r i l

魔術刻印を停止させる咆哮が、再び自分たちを打ちのめした。

咆哮は、もはや物理的な圧力を保持していた。

喰らった魔術師たちが吹き飛ばされたのだ。

「っー!」

しかし、息を詰まらせたのは、喰らわせた方のグラニドであった。

「天使の〈歌〉、か。直撃だと魔術刻印がなくても効くな」

と、師匠がかぶりを振る。

「今度は誰も気絶しないのが不思議かな」

こん、と近くの主郭キープの壁を師匠が叩いた。

異様なほど響いたその音が、剝離城の夜を渡っていった。

「一ある種の音おん叉さなんだろうこれは。それとも増ア幅ン器プと言った方がいいか。その怪物の〈歌〉は、城のどこにいても響くようになっている。いや、そのためにこそこの城がつくりかえられたんだ。君の〈歌〉を最も効率的に運用するために。だからこそ、この剝離城であれば、君はほとんどの魔術師に勝利できたろう。優秀な魔術師ほど魔術刻印への依存度は高くなるのが常だからな」

アッシュボーンの秘法が錬成した、この剝離城でのみ多重共鳴に よって成立する魔術。

思えば、ヒントはあった。

異様に音の響く広間。

足音に眉をひそめていた師匠。

死んだハイネも、その異常に気づいていたかどうか。

「ルヴィアゼリッタ氏の術式を利用して、ごく限定的ながらその術式を妨害させてもらってる。その怪物の〈歌〉は、もはや個体に可能な出力でしか発揮できない」

「ふむ。正直肝は冷えたぞ」

少年姿のオルロックが顎を撫でさする。

怪物の対処は素早かった。

すぐさまグラニドの身体を咥くわえ、主郭キープへと飛び上がったのだ。

「逃げる―?!」

見上げた師匠の肩越しに、声がかかった。

「おい。こっちゃ最初の〈歌〉とさっきの魔法円で、触媒カタリストから何からカラッケツだ。もう逆さにしても何も出ねえぞ」

「こちらも、妨害術式を維持するなら手伝えませんわよ」

フリューとルヴィアがそれぞれ、現状を訴える。

「ああ、無理を言って悪かった。休んでいてくれ」

そのまま、師匠はこちらへと視線を向ける。

「たまったか?」

「ヒヒヒヒヒ。まあ、なんとか。十分じゃねえかな!」

そんな声が、拙の右手のあたりからした。

「頼む。グレイ」

「.....はいっ」

跳んだ。

一飛びで数メートルを跳躍し、怪物を追って、そのまま主郭キー プの壁を蹴る。 単に魔術的な『強化』と言い切るには、度を超えた身体能力だったためだろう。急速に遠ざかる地表で、ルヴィアの声がかすかに聞こえた。

「一あの娘も、人造生命ホムンクルスだったんですの?」

そう、人造生命ホムンクルスならありえる筋力だった。名高いアインツベルンのホムンクルスは多くの幻想種にすら匹敵する怪力を 誇るという。

「いいや。彼女は人間だよ」

師匠の声。

こんな夜には、なぜこんなに澄んで聞こえるんだろう。

「だけど、こういう事件なら専門家かもしれないな」

*

天と地は、この刹那のみ意味を無くした。

主郭キープの壁を蹴り、九十度入れ違った世界で、拙せつと獣と は交錯した。何度も鈍い音がした。激突で失ったエネルギーの分再 び壁を蹴り、拙せつと獣は主郭キープとつながった尖塔に躍り上 がっていた。

そこにも、天使はいた。

剣を掲げた雄々しい姿からすれば、化野菱理を串刺しにした広間 の大天使ミカエルと同じモデルだったろうか。

Γ

!!!..

再び、獣が吼える。

この剝離城の魔術の正体が音だとしたら、それは魔力を秘めた波であった。

人には聞こえざる音の波。そこに常人には感知しえぬ魔力が注ぎ 込まれていたとしても、やはり不可知の存在には違いあるまい。魔 力と波長を変化させれば、それは魔術刻印を停止するだけではな く、相対する敵を滅ぼす闇の一撃となるのだろう。



ならば--

「.....アッド」

「おうさ!」

拙せつの振るった刃が、その波をことごとく砕いた光景は獣にどう見えただろうか。

すでに半ば変形しているアッドの入った『檻』がさらに展開。愚者の火ウィル・オ・ウィスプのごとき朧おぼろな燐りん光こうが、たちまち新たな形状に変化していく。

それは、誰もが知る収穫の形状。

魂を刈り取るカタチ。

死神の鎌グリム・リーパー。

「ははははは、ご機嫌だな! イイ夜だな! 食べ放題だな!」

魔力の波を断ちきって、鎌の刃に刻印された口は大いに笑った。

夜空には少し欠けた満月。三日月のようなアッドの刃は美しく、 繚りょう乱らんと砕けた幻の波は切なく胸に焼きついた。

人には聞こえない声。

天使の詩うた。

獣の〈歌〉。

「……なんだ、お前」

と、グラニドが問うた。

「なんなんだお前」

「……ただの、グレイどっちつかずです」

と、拙は答えた。

「グラニド・アッシュボーン、あなたに投降を勧めます」

「違ちゃう。違ちゃうんや」

突然、再び声が戻った。

「.....清玄さん?」

「グレイさん。わいは清玄や。時任次郎坊清玄なんや。間違いなく清玄やのに……心が止まらへんのや。どうしてもどうしても、あそこにいるみんなを殺したくて、みんなから剝ぎ取りたくてたまらへんのや」

怪物によりかかったまま、清玄が頭を抱える。

ぐちゃぐちゃに、その顔が崩れる。喜び、怒り、悲しみ、楽しみ、怨うらむ。五情とも言われる人の心の移り変わりが、すべてひとつの顔に凝集されていた。まるで混沌だ。ありとあらゆる感情がもみくちゃになって、清玄の身体と心に同居している。

(.....ああ、そうか)

と、自分も理解してしまった。

清玄は人格を乗っ取られたわけではない。

むしろ、メインとなる八割方か九割方以上は清玄そのままなの だ。

たとえば、試験管の水を思えばよい。『時任次郎坊清玄』である 試験管に、ほんの数滴、色つきの毒が垂らされた状態だった。攪拌 した毒はどうしようもなく清玄という存在を変化させてしまい、そ れでいて清玄という全体だけはまだ保たれている。

数滴だけ垂らされた毒を、衝動と呼んでも、ホワイダニットと呼んでもいいだろう。

滅び去ったはずの魔術師の、妄念だけが生きている。

ひどい吐き気がした。

それは、まるで--

「ごめんなあ」

滂ぼう沱だと涙を流して、清玄が言う。

涙は赤く染まっていた。血の涙を人が流すところを、自分は初めて見た。

「わいは、ほんまにハイネ兄さんを気に入ってたんや。あの人が気づいたりしなかったら良かったのになあ。一番先に獣を見つけなかったら良かった。あんなに最初に工房に近づかんかったら良かった。……ああ、あかん。あんなに綺麗な魔術刻印を無視できるわけがあらへん。欲しくてしゃあない。餓うえてしゃあない。渇いてしゃあない。しゃあないんや、グレイさん」

いや、清玄でありつつ、やはりそれは清玄ではない。

時任次郎坊清玄という器ハードと中身ソフトに、グラニド・アッシュボーンというウィルスを混入させた別の魔術師。

もはやグラニド・アッシュボーンでさえない、誰か。

その誰かが、叫んだ。

「剝離城アドラ! 開門せえ!」

主郭キープの扉が開け放たれ、その内側から飛び出したものを、 自分の直感が察知した。

五臓が、震えた。

*

突如として、主郭キープの扉が開け放たれるのを、地表のロード・エルメロイII世たちも観測していた。その内側のロビーから、はたまた前庭のおびただしい天使の彫像たちから、不可視の何かが次々と飛び出していたのだ。

いや、彼らの瞳には視えていた。

霊。

ただし、これは一般で考えられているような魂とは別のものだ。かつての人格パターンを記録として残しただけのエネルギー、と言った方がいいだろうか。中国のタオイズムでは一般的な認識であり、精神を支える『魂』と肉体を支える『魄はく』は明確に区別して扱われ、大地にへばりつくのは『魄』だとされている。

この場合の霊とは、まさしく『魄』であった。

「ああ。天使はそういう意味もあったか」

ロード・エルメロイII世が、苦く呟く。

この剝離城に来てから、ずっと天使たちに見張られている感じ を、魔術師たちは覚えていた。

実際に、そうだったとしたら。

剝離城の主たるアッシュボーンは修復師として、多くの魔術師たちを集めていたはずだった。その中でどの程度が修復され、どの程度が材料の憂き目にあったかはしれぬ。修復を受けたはずが失敗した魔術師だっていただろう。いや、そもそも成功例など五指に満つるかどうか。

いずれにせよ、この城は幾多の血と魂を吸ってきた土地だ。

ならば、その天使たちのひとつひとつが、霊のよりしろだとしたら?

この剝離城アドラに至る前、ロード・エルメロイII世は話していた。―近代魔術における天使とは、つまるところが曖昧な魔力に対する名付けだ、と。剝離城は『天使』という概念付与によって霊を加工して、工房を稼働させる原動力としているのだった。

天使とは、つまり同じ数の墓標でもあった。

無尽に現れる怨霊を前に、とある囁きがこぼれた。

[「]Perform a dance舞い踊れ」

それこそが呪文スペルであった。

オルロックの指が指揮棒のごとく振るわれると、幾多の幻の蝶が 夜闇に現れ、それらの霊を搦め捕っていったのだ。

「もともと、確かなるものと確かならざるもののあわいを操るのが、蝶魔術パピリオ・マギアの神髄ゆえにの」

「……いや、助かります」

と、素直にロード・エルメロイII世は頭を下げた。

フリューはとうに枯渇しており、ルヴィアは自分の術式にかかり きりとなれば、もはや頼れるのはこの老魔術師──であったオルロッ クしかいまい。

後は、

「.....グレイ」

ロード・エルメロイII世は主郭キープの尖塔を見上げ、自らの従者の名を呟いた。

*

「 !」

三度、獣が吼えた。

今度はアッドで受け止めされず、体内の魔術回路が短絡ショートを起こすのを感じた。手も足もまるで動かない。鉛の服を着せられたってまだマシだろう。剝離城から溢れ出た霊とともに、拙せつの心もまたひび割れていた。

「.....ははは!」

と、グラニドが笑った。

清玄が笑った。

こちらの不調の正体に気づいたのである。

「グレイさん、霊園の出身なんやろ? なのに、まさか霊が怖いんか?」

Г......

答えることもできなかった。

がちがち、と心底自分は怯えて歯を打ち鳴らしていた。

霊の気配を感じただけでこれだ。剝離城にやってきた途端、過呼吸に陥ったのはまさしくこのトラウマによるものだった。あれの存在を感じただけで身体は竦すくみ、足は萎え、指先ひとつまで自由にならなくなる。まるで内臓すべてが裏返りでもしたように、嫌な汗が出てくるのを止められない。

恐ろしい。

恐ろしくてたまらない。

恐ろしくて恐ろしくて、吐き気が止まらない。

「はは、とんだできそこないだ! 亡霊が怖くて、まともに祈りの 言葉も覚えられない墓守か! まるで、わいとそっくりやんか!」

グラニドと清玄が曖昧に入り交じって、自分を罵倒する。

できそこない。その通りだ。自分はできそこないで、どっちつかずで、どうしようもない壊れ物だ。

だから。

剝離城から解き放たれた霊が、雪崩のごとく自分の身体を押し包んでいく。

戦いの趨すう勢せいを、苛立たしげにルヴィアが見上げていた。

「あの子、どうなってますの―!」

「やめておけ」

術式を維持しながら新たな宝石を取り出し、強引に割り込もうとしたルヴィアを、ロード・エルメロイII世が制止した。

とある霊園の名前を、口にした。

「それは……?」

ルヴィアも知っている名だった。ブリテンにも冠たる、最も古く 伝統ある霊園のひとつである。

「本来なら、彼女は対霊体のプロフェッショナルだ。実際私もそれを期待してあの霊園を訪ねたぐらいだからな。──だが、彼女の場合はいささか事情が違っていた」

「事情?」

「怖いんだよ、霊が」

美しい眉をひそめた少女へ、端的に青年は答えた。

あまりにそれはあけすけで、だからこそ信じられない言葉だった。

「……そんなの、ありえるんですか。あの霊園の生まれでしょう?」

「魔術師に生まれついたら、誰もが魔術を好きになると?」

その質問に、ルヴィアが口ごもった。

「素質だけで言えば、あの霊園の墓守たちの中でも傑出していた。 だが、その素質が抜きんでていたゆえに、霊という存在の本質を彼 女の身体は捉えすぎる。たとえ生者であっても、人は他人のことな どそのまま受け容れられないというのに」 語尾は、かすかに淀んだ。

もしも自分にそのような『力』があったなら、と想像してしまったのだ。他人の本質をそのままに視てしまう能力などそれだけでも十分に呪わしい──まして、その相手が死者であったなら。

通常の魔術師でさえ、亡霊との付き合い方は細心を要する。すでに魂を失った魄といえど、むしろだからこそありとあらゆる欲望を剝き出しにする。グレイの場合は一体どれほど幼い頃から、そんな相手を直視していたのだろう。

「だったら、あなた師匠でしょう?! 弟子を救う義務があるのではなくて!」

「違う」

と、ロード・エルメロイII世は断言した。

「一巻き込まれると、言ってるんだ」

*

──たぎりおちる霊の奔流が、自分を押し包む。

恐ろしい。

恐ろしくて恐ろしくてたまらない。

──包み込んだ霊がこちらの肌を這い回る。耳や口や鼻といったありとあらゆる穴から、こちらの身体に潜り込もうとする。

恐ろしくて恐ろしくて恐ろしくて呼吸さえできない。

恐ろしくて恐ろしくて恐ろしくて恐ろしくて停止する。

恐ろしくて恐ろしくて恐ろしくて恐ろしくて恐ろしく て恐ろしく恐ろしくて

「ああああああああああああああああああああああああああああああああ。 ああ!」

恐ろしくて忌まわしくて呪わしくておぞましくて穢れていて渇いていて餓えていて鋭くて夥しくて狂おしくて痛々しくて吐き出しそうで叫んでいて葬られていなくて抉れていて惨むごたらしくて埋葬されるべきで晒されていて苛まれていて滅ぼされるべきで──

ゴキリ。

奇怪な、音がした。

鉄と鉄が擦れあうような、誰もが耳を塞ぎたくなる異音。

霊の喰われる音だと、誰が知ろう。死神の鎌グリム・リーパーに 刻まれたその口が、周囲に集った霊をことごとく喰らっていったの だ。

「イヒヒヒヒ! 美味い! 美味いなこれは! ひさしぶりのご 馳走だな! やっぱりエルメロイのヤツの言ってた通りになった な!」

相棒アッドの声さえ今は遠い。

拙せつの目に入っているのは、夥しいまでの霊の群れ。

ああ、そうだ。

あれは死者よりも死者らしい。

あれは生者よりも生者らしい。

故郷で、自分がいくつもいくつも見てきた光景。

不条理で、不合理で、不自然で、生きても死んでもいないもの。

鼓膜に蘇る、幾度となく聞かされてきた言葉。

──『お前が滅ぼすべきはアレだ。アレだ。アレだ。アレだけだ』

「その通りExactly」

唇が告げた。

自分の意志。自分でない意志。そのようにつくられた拙せつの、 本来の機能が蘇生する。悪霊を喰らう死神の鎌グリム・リーパーす らそのための踏み台に過ぎぬ。

「一だから、滅ぼさずに、いられない」

ぐん、と膝を曲げた。

景色が消えた。

*

純粋な瞬発力で、少女の姿は消え失せた。

尖塔から、主郭キープの屋根までコンマー秒とかからない。そんな速度を消失と言わずしてなんと呼ぶ。

少女が舞う。

死神の鎌グリム・リーパーが躍る。

少女が舞う。

音は断たれ、天使はひび割れる。

彼女の前に立つ者ことごとくが、硝子のごとく砕け散る。

少女が舞う。

怪物へと肉薄し、その鎌が胴体の半ばまで食い入った。

互いの質量の差は、これほどの速度の前には意味をなさぬ。

ふたつの流れ星が何度も激突し合うかのように、夜闇にメビウス の輪を描いた。そのたび激震が生じて、まるで戦闘機同士の空中戦 ドッグファイトのように鮮やかな魔力を炸裂させた。

*

「……なんだよ、ありゃあ」

フリューが低く呻いた。

すでに剝離城から溢れ出た霊は、魔術師たちなど見向きもしてい ない。

主を守るべくそのすべてがグレイへと殺到しているのに、少女を 前にするや朝日を受けた霜のように消滅していくのだ。

「だから言っただろう。専門家だよ」

「あんなの、それだけでは説明できませんわ!」

叫んだルヴィアに対して、ロード・エルメロイII世はなんとも苦

りきった顔で答えた。

「もうひとつ、理由はあるにはあるが、いくら魔術師でもこんな話 を信じるかどうか」

「何を仰ってるんですの?」

ずいとルヴィアが詰め寄る。

こういう態度のとき、彼女がけして諦めないのは短い付き合いで も十分に知れた。

だから、短く呟いた。

「.....サーだよ」

「は?」

と、ルヴィアは訊き返した。

実際のところ、彼の言葉は聞こえていた。

聞こえてはいたが、それが今の状況と何かつながるとは思えなかったのだ。

*

死神と怪物。

まさしく、そんな一幕だった。

何度も激突を繰り返し、主郭キープの屋根の上で怪物の爪を受け 止めたまま、少女は柔らかく尋ねた。

「ハイネ・イスタリを殺したのは、その爪?」

r ! 」

怪物が咆哮する。

咆哮によってかすかに生まれた空間へ、ねじこむように炎が生まれた。

「阿あ毘び羅ら吽うん欠けん蘇そ婆わ訶か!」

修験道。

清玄の、術だった。

今の人格がグラニドと清玄のどちらかは分からないが、少なくと も時任次郎坊清玄の習得した魔術をあの男も使えるということだろ う。剝離城という巨大なバックアップがある限り、長期戦になれば いずれは向こうに天秤が傾く。

だから。

少女は、囁いた。

定められているその言葉を、繙く。

「Gray暗くて……Rave浮かれて……Crave望んで……Deprave堕落 させて……」

突然、変化は生じた。

いや、消し飛んだというべきか。

さきほどの霊と同じく、周囲のありとあらゆる魔力が、大マ源ナが喰らわれたのだ。魔術的な虚無となった空間にひきずられるようにして、アッシュボーンの怪物すらも悲鳴をあげた。

*

「ちょっと待って。今、あなた、なんて言ったの?」

「だから、アーサー王だよ。かつて第四次聖杯戦争に召喚され、そのマスターとともに私の師匠─ケイネス師を殺した英霊だ」

と、男は言った。

ひどく神経質そうな、それでいて苦笑の入り交じった口調では あった。

「彼女の故郷である霊園には、アーサー王の墓がある。聞いたことはないか? まあグラストンベリーの方が有名だし、そんな場所はブリタニーにもコーンウォールにもあるんだがな」

ロード・エルメロイII世は皮肉げに唇を歪めた。

自分だってこんな馬鹿げたことを言いたくはないのだと、そんな 風な歪め方だった。

「あいつの顔は、私が見た剣セのイ英バ霊ー―アーサー王に生き写しだったんだ」

*

「Grave刻んで……me私に……」

囁きは、俯いたままの唇から発せられた。

自分の意識は死に絶えている。

とっくの昔に絶滅してしまっている。

だから、これは自分の声ではない。もっと別の──自分の奥に潜んでいた、もうひとりの自分。

自分の故郷がつくりあげた、もうひとつの怪物だ。

「Grave墓を掘ろう.....for youあなたに.....」

古き神秘ミステルよ、死に絶えよ。

甘き謎よ、ことごとく無と帰せ。

「疑似人格停止。魔力の収集率、規定値を突破。第二段階限定解除を開始」

アッドのそれとは到底思えない、無機質な声音が夜気に響く。

開封の呪文を受けた扉のごとく、少女の手の内で神秘は蓋を開く。

霊や魔力を喰らい、持ち主の身体能力に変換する死神の鎌グリム・リーパーすら、アッドの本来のカタチではない。いやアッドという疑似人格すら、現代において無為に神秘性を失わないための仮初めの封印に過ぎぬ。

この……『槍』のための、封印。

あるいは自分すら、そのひとつなのだろう。

i 7

怪物が吼えた。

もはや何度目かは分からない。

しかし、その咆哮は自分の周りに圧縮された極度の魔力によって、自ずから分解する。神秘はより強い神秘に打ち消されるのが理だ。ならば、いかに魔術の深奥を極めたアッシュボーンの怪物とてこの『槍』に敵かなう道理はなかった。

「お前は……」「グレイさん」「その武器は」「あんさんの武器 は」

清玄とグラニドの交ざり合った声も遠い。

「聖槍、抜錨」

死神の鎌グリム・リーパーが展開する。

三次元的にはありえぬ角度と体積でカタチを変えて、新たなる 『槍』を形成する。

『槍』よ。

『槍』よ。

いいや、あまりにも雄壮たる魔力を溢れさせたそれは、もはや 『槍』などという規格スケールにとどまらない。あたかも世界の最 果てに佇む塔を思わせて、幾多の伝説がすべて真実であったのだと 証言する神秘の結晶だ。

それは、物語の終焉。

かのアーサー王伝承の掉とう尾びを飾る、呪われた神槍。

少女の唇は、ただ静かに真しん名めいを口ずさむ。

「最果てにてロンゴー」

時は来たれり。

神槍が蠕ぜん動どうする。

渦巻く魔力を抑えきれず、剝離城すら怯えるように震え始めた。 本来ある波動にのみ感応するようつくられていた剝離城が、あまり に逸した魔力を受けて無理矢理起動させられつつあったのだ。周囲 からあらゆる大マ源ナを奪い尽くすその顕現は、それ自体が災害と いうほかなかった。

元来成されていた〈十三拘束〉が外れてない以上、本来の『力』の一部が顔を覗かせているだけだ。だが、それですら神霊級の魔術行使に届かんとする暴威の塊。

極度に集中した魔力は、認識的には熱に似ている。

まるで、火山を手にしているようだった。

もはや、獣は間に合わない。

間に合うはずもない。少女の手に顕現したるは、伝説の王の代名詞ともなった〈約束された勝利の剣エクスカリバー〉に次ぐ、もうひとつの宝具。アーサー王が仇きゅう敵てきモードレッドを討ち取った神器。

「──輝ミけニるア槍ド──!」

捻ねじれる光を、誰が見たか。

夜なのに、突然太陽が現れたかのような──突然太陽の欠片が墜落してきたかのごとき美しき紅ぐ蓮れんの螺旋。空気中の魔力も水分も残らず沸騰させて、神代の閃光ひかりはただ暴虐のままに疾駆する。

怪物も清玄も、その光の前に消え失せる。

剝離城の尖塔を抉り、天蓋から城壁までを貫いて、山の斜面を打ち崩しながらその光は途絶えていった。

あまりにも凄絶な、戦いの終しゅう幕まくであった。

「……アーサー王……」

茫然と、ルヴィアはその名前を口にした。

対するロード・エルメロイII世は面倒臭そうに頭を搔いた。

「まあ、おおよそは遠縁の末裔といったところだろうさ。あの霊園 にアーサー王の墓があるのもそういう事情でね」

「じゃあ、今のは英霊の宝具の……」

それきり、ルヴィアは言葉を止めた。

神代から伝わる神秘にはいくつかのパターンがある。フラガの家が伝えている伝承保菌者ゴッズホルダーなどが有名どころだろう。だが、いずれにせよ迂闊に踏みいってはならない領域だと、少女は判断したのである。

ロード・エルメロイII世は自らの従者を回収すべく、剝離城の破壊跡へと足を進めた。

抉られた大地が半ばめくれあがっており、ふと青年の片眉があがった。

「あれは」

いまだしゅうしゅうと蒸気をあげるクレーターの底に、ぽっかりと空洞が覗いていたのである。英霊の宝具の凄まじい破壊力が大地を穿うがち、地下にあったはずの隠し部屋さえ露出させていたのだった。

「オルロック老」

「ああ。……感謝する。若き君主ロードよ」

その方向へ、ロード・エルメロイII世がオルロックを促す。

「ちょっとなんですの! 人をのけものにしてまた秘密事ですか!」

「いろいろあるんだ」

言い訳とともに葉巻を咥えて、ロード・エルメロイII世はオルロックと慎重に破壊孔へ足を踏み入れていった。

幸いにして、宝具によってもたらされた魔術的な破壊のせいか、 はたまた剝離城の防御機構によるものか、すでに熱はあらかたがひ いていた。靴の底が溶けることもなく、ふたりは深奥へと進んでい く。

その前途を、突然破壊孔からの影が塞いだのだ。

「一グラニド・アッシュボーン……」

「あああぁぁあああ.....!」

片腕がちぎれ、髪も法衣も焼け爛ただらせて、男の声帯はもはや その機能を失っていた。

いや、より被害が大きいのは、グラニドの傍らに転がった怪物の方である。おそらくは〈最果てにて輝ける槍ロンゴミニアド〉の直撃を喰らう寸前、怪物が清玄の身体を突き飛ばしたことで命を取り留めたのだろうが、こちらは完全に右半身を蒸発させていた。

いかに魔術によってつくられた生物とはいえ、それを遥かに超える魔力で傷つけられれば並の生物と同じ結果しかありえない。それでもまだ足あ掻がくなど、魔術師の世界じょうしきですらありえない出来事だった。

その奇跡を可能にしたものは─。

「母さん!」

グラニドが叫んだ。

不意に、オルロックが話していた言葉が、ロード・エルメロイII 世の頭をよぎった。

―『魔術師として、という前置きはつくが可愛がっていてな。わしもずいぶんとのろけられたものさ。息子を産んですぐに妻が亡くなったことも大きな理由じゃったろうが』

怪物の顎が、開いた。

オルロック・シザームンドに向けて。

(.....まずい!)

と、ロード・エルメロイII世は直感した。

この隠し通路まではルヴィアによる妨害術式が働いてない。まして、断末魔に振り絞った魔力は凄絶そのものだった。到底魔術刻印の停止ですむとは思えない。

ならば-

Г ! Л

「君主ロード?!」

叫んだのは、オルロックであったか。

かの蝶魔術パピリオ・マギアの魔術師を庇い、呪いの〈歌〉は正面からロード・エルメロイII世に叩きつけられた。

*

瞼を開けたとき、彼は自分がひとりであることを知った。

世界は霧に包まれていて、いくら見回してもそれ以外の存在は見

あたらなかった。

「なるほど、これが〈歌〉の効果か」

と、青年が自らの肩を揉んだ。

魔術刻印を蝕む天使の〈歌〉。だが、魔術刻印を持たないロード・エルメロイII世に対しては、直接精神に働きかける作用をもたらしたらしい。

精神の内側なら肩こりなど持ち込まなくてもよかろうに、と文句を呟きつつ、青年は周囲をもう一度見やった。さきほどルヴィアが閉じ込められていた闇とは違い、今は曖昧模も糊ことした霧がたちこめている。

おそらくは、その霧が呪いの本体なのだろう。

『貴方は、ずっと努力してきたのだろう』

脳に直接、思念が忍び込んだのだ。

いつのまにか、霧の奥に影がわだかまっていた。

『しかし、もう知っているはずだ。いくらあがいても貴方は追いつけない』

影が言う。

影が嗤う。

青年が、胸を押さえる。

彼にとって、それは最も精神こころの柔らかな部分であった。ほかの誰にも明らかにせず、ずっと諦めてきた事柄だった。

『結局のところ、貴方がやっているのは天才が踏み固めたレールの確認に過ぎない。それらの知識をもって他人の才能を発芽させることはできても、貴方自身は永久に二流のままだ。輝くのは貴方のまわりだけ。貴方がスポットライトを浴びる日などやってこない』

それは、まるでひきずりこむような『声』。

呪い。

正しい意味で呪いだった。人の思考に忍び込み、そのあるべき姿を根底から捻ねじ曲げてしまう、最も原始的な呪いだった。魔術師ならずとも、現代の学舎でも企業でもはたまた男女の閨けい房ぼうでも行われてきた最も強大な呪いであった。このような呪いによって、何万何億という人間が苦汁を嘗なめ、命を落とし、はたまた王朝でさえも崩壊してきたのであった。

幾多の魔術師たちの魔術刻印を壊死させるような──どうしようもなく彼の本質を抉り抜く呪い。

やがて、彼は口を開き、

「.....勘違いだ」

と、呟いた。

^с?л

呪いが、揺れた。

ありうべき反応が返らなかったからではない。

もっと本質的な部分で、青年が別の何かに変じたことに気づいた からだった。

「ボクは、もう十分な栄誉を受けたんだよ」

びき、と何かが割れる音が聞こえた。

世界のどこかで、自分を呪縛している〈歌〉が聞こえるような気がした。けしてはっきりとは届かないのだが、とても美しく、儚い 〈歌〉のように思えた。

「その栄誉は後払いでもらったものだ」

青年は囁く。

いや、ロード・エルメロイII世の姿は若返っていた。おそらくは 十年前、第四次聖杯戦争を戦ったそのときの姿。髪はずっと短く、 いつも不機嫌そうな横顔さえ潑剌とした色合いを蘇らせ、霧に向 かって語りかける。 「だから、ボクはその栄誉にふさわしい人物にならねばならない。 順序が逆になってしまったけれど、あなたの見る目は間違えてな かったのだと証明しなければならない」

彼の言葉は今も鼓膜に焼き付いている。

いいや、魂に刻まれている。

あのとき、自分はこう語りかけたのだ。

──『あなたこそ、ボクの王だ。あなたに仕える。あなたに尽く す。どうかボクを導いてほしい。同じ夢を見させてほしい』

なんと未熟な、なんと身勝手な言葉だったことか。

かつて、自分は彼との死を望んだ。この世で最も偉大な覇王。当時の世界の半分を征服し、ひょっとすると人類史上最も世界征服に近づいた相手へ、ほかの部下たちが与えられたような殉死を望んだ。

対する覇王は快活に微笑んだ。

だが、もたらされたのは、名誉ある死ではなかった。

代わりに、彼は使命を与えたのだ。

「……生きろ、だとさ」

また、呟いた。

黄金の光が、青年の内側に宿っていた。

それはけして失われることのない誓いであり、けして消えることのない光であった。

「見届けて、生き存えて、語り継げだと。本当に我が儘で滅茶苦茶だろうが。そもそもあいつのせいで死にかかったってのに、ギリギリでそんなものを押しつけてくるなというんだ。後の私がどれだけ困ったと思っている。それこそ一晩中文句を言っても言い足りない

ぞ、あの馬鹿」

現在のロード・エルメロイII世が言う。

かつてウェイバー・ベルベットと名乗っていた若き頃に決別を告げ、今の姿に戻った青年は誇らしげに顔をあげた。

「私は自分のしたいことも、自分のできることも分かってる」

ああ、もちろん矛盾はしているのだ。自分という存在を受け容れたところで、やはり煌びやかな才は妬ましく、突出した魔術を見れば瞋しん恚いの炎が身を焦がす。ハイネ・イスタリ、ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルト、若き天才たちはなんと軽々と空を舞うことか。華やかなりし夢はこの魂を離れず──しかし、夢は夢のままなのだ。

夢のままでよい、とも今の自分は思っている。

夢のままでよい、とも今の自分は思えている。

「どうだ。幸せな人生だろう。それをお前なんかに指図されてたまるか」

強く言い切る。

そして、

「……まあ、この結論に至るまで十年近くかかったのだから、あまり大きな口はたたけないが」

と、微苦笑とともに付け加えた。

──霧が、砕けた。

*

ゆっくりと、彼は目を開いた。

〈歌〉が終わっていたことを、ロード・エルメロイII世は知った。 ひょっとすると、もう少しだけ聞いていたかったのかもしれない。

足下に、葉巻の灰がこぼれていた。

その香りが、自分と現実をつなぎとめていたのである。

ルヴィアとともに閉じこめられたとき、即座に結界を張ったのもこの葉巻の補助によるものだ。彼の使っている葉巻はそれぞれが簡易な魔術の付与された使い捨ての魔術礼装なのだが、これは内弟子であるグレイさえ知らない事実だった。

「……ほう。案外あっさり戻ってこれたか。てっきり一生自分の精神に引きこもらされるかと思ってたぞ。さすがに庇われてそれでは寝覚めが悪い」

少年の姿のオルロックが、彼の帰還ににんまりと笑った。

おそらく、気を失っていたのは数秒といったところだろう。

悲劇は、そのたった数秒で起こっていた。

オルロックの身体が、のけぞった。

身体ごとぶつかった時任次郎坊清玄の手が、鋭い独どっ鈷こを握り込んでいたのである。もとはインドの武器から生まれた法具が、かつての歴史を思い出したかのように、深々とオルロックの腹に刺さっていたのだ。

「おう、余計なことはせんでいいぞ。──こやつ、もう意識は途絶えておる」

視線は、横に流れた。

アッシュボーンの怪物も、さきほどの咆哮がまさに断末魔であったか、今度こそ息絶えていた。

間に合わなかったのだと知って、ロード・エルメロイII世は苦渋に顔を歪めた。

「今、もうひとつだけ、ホワイダニットが分かりました」

「ほう」

「ゲリュオン・アッシュボーンを殺したのはあなたですね」

「―なんですって!」

ちょうど駆けつけたばかりのルヴィアが、目を剝いた。

かか、と少年は笑った。

その顔がみるみる萎しなび、もとのオルロックのように年老いていった。少年の身体が人造生命ホムンクルスであったのなら、その生命を維持するオルロックの魔力が途絶えたことで、一気に老化が始まったのだろう。主人を守る魔術刻印も、まだ回復しきっていなかったのか。

「グラニド・アッシュボーンは明らかにあなたに執着していました。今回の儀式めいたやり口も、半ばはあなたを怯えさせるためだったのでしょう。そこまでの動機となると、ほかには思い浮かばない」

「復讐」

と、オルロックが答えた。

「……まあ、あやつも自分が殺されることを予期はしておったんじゃろうな。だからこそ、グラニドの魔術刻印をこの山伏めに仕込んでおった。仕込んだ相手はほかにもいたかもしれんが、発芽に至ったのがこやつだったということじゃろう」

腹部を押さえ、訥とつ々とつと語る。

できるかぎりゆっくりと、清玄の身体を横たえた。

その行為を手伝ってから、ロード・エルメロイII世は尋ねる。

「どうして、ゲリュオンを殺したんです?」

「今更昔の話を蒸し返すのもな。その謎かけが礼金というのはどう じゃ。パズルは好きな類じゃろ」

間髪を容れず、青年は問うた。

「あなたが、グラニド・アッシュボーンの父だったからですか」

r——э!л

ルヴィアが硬直する。

金髪の縦ロールを振り乱し、オルロックへと振り返る。

「隠せんのう。若き君主ロード」

その中で──みるみる元の老人の姿へ戻っていったオルロックは、 ため息をついた。

「かか」

と、嗤った。

はたして、誰を嗤ったのだろうか。

はたして、何を嗤ったのだろうか。

「年の差はあったが、ここの細君はわしの古い馴染みでな。ゲリュオンに引き合わされ、十数年ぶりに出会ったのさ。......ああ、年甲斐もなく懸想したわ。白い肌を思い煩ったさ」

髑髏のごとき面相で、魔術師は遠い時代を思い返していた。

「思えば、ゲリュオンは知っておったんじゃろうな。子ができぬのだと細君が嘆くのも、わしがつけいってしまうのも、すべて承知で引き合わせたのだろうさ」

「それで、グラニド・アッシュボーンが……ですか」

「一度だけの過ちよ」

と、老人は口にした。

「その後、細君は例の死病に罹り患かんし、息子を産んですぐに亡くなったと聞いた。当時はどちらの子か分からんかったのでな。一緒に研究している間も、はたして息子にアッシュボーンの魔術刻印が根付くかどうかが不安で、ずっと眠れなかったものさ。くかか、結局悩んでいるうちに、こちらも死病で倒れたんじゃが」

ドルイドから取り寄せた秘薬も役に立たなかった、とオルロックは言っていた。

取り寄せたのは、ゲリュオンと彼のどちらだったのだろう。

「グラニドの葬式の後、しばらく経ってからヤツは言うたのよ。── ご苦労様。いいものを見せよう。かかかか、何を見せられたかな ど、もはや言う必要はあるまい?」

息絶えたアッシュボーンの怪物を、オルロックは見つめた。

その怪物を、グラニドがなんと呼んだか考えれば、正体は明らかだった。

獣となりし人。

すぐ亡くなったと聞かされていた細君。

「どうだ、とヤツは嬉しげに言いおったよ。──彼女の死病をついに克服させた。ろくに孕みもしない石うまず女めだったが、使い魔としての才覚はあった。俺は彼女の身体を魔術刻印の貯蔵庫にするつもりなのだ。君の蝶魔術パピリオ・マギアの薫陶もあって、彼女はあらゆる魔術刻印を保存させられる。君にもぜひ祝福してほしい」

Г......

さしものロード・エルメロイII世が沈黙した。

ルヴィアにしても、ただ老魔術師の告白を聞くことしかできなかった。

「……思えば、ヤツは本気だったのかもしれん。妻を愛していたの も、息子を愛していたのも、すべて本気だったのかもしれん。その 結果として妻を怪物にするのも、魔術師としては自然な発想だった のかもしれん」

「オルロック老」

「わしには耐えられなんだ。ヤツの方こそ魔術師として正しいかも しれないと、そう思ってはいてもな」

魔術師は魔術にこそ殉ずる。

いかなる犠牲を払おうとも、ただ一歩魔術の深奥に踏み込めるならば本道。

誰もが最初に習う事柄を、最も深奥に近づいたひとりであるオルロック・シザームンドはつかのまだけ忘れた。朋ほう友ゆうであったゲリュオン・アッシュボーンを殺害した後、逃げるようにして剝離城を出るまでのことを、彼もろくに覚えてないという。

「それで、この招待状を受けたのですか」

「おうさ。かかか、何がどうなってるのかと思ったが、まさか死ん だ息子をすでに魔術刻印にして切り刻んでいたとはなあ」

風が吹いた。

露わになった隠し通路との隙間で、泣き声みたいな音をたてた。

ルヴィアが、ロード・エルメロイII世へと問いかける。

「──あなたは、どこまで事情を聞いてらしたの?」

「この剝離城に救いたい相手がいる……とだけ」

「それだけ? あなたロマンチストなの? それとも馬鹿なの?」 ささやかな怒りを表明する少女を前に、

「かかかかか」

と、老人はまた笑った。

なぜだか、この事件が始まってからの笑い声で、一番無邪気な声のようにも思われた。

その身体が、そっとのめった。

「我が子よ」

と、横たわった清玄の顔を撫でたのだ。

そこから、ほんの数メートルの歩みは、老人にとって何ヶ月にも 及ぶ長旅だったのではないかと思われた。腹部をしとどに血で濡ら して足をひきずりながら進む顔は、これ以上なく苦痛と煩悶に満ち ながら、しかしようやっと青い鳥を見つけた子供のように微笑して いた。

とうに息絶えたアッシュボーンの怪物へと触れて、

「我が恋よ」

獣と化したかつての恋人を、老人は抱きしめた。

「Perform a dance舞い踊れ」

幾多の黄金の蝶が、世界に舞った。

はたしてそれは、つくりかえられた女を、つかのまでも元に戻す 秘法であったか。

狼と蜘蛛を混ぜ合わせたかのごときアッシュボーンの怪物は、美しい女の姿を取り戻していたのだ。吹き飛ばされた右半身までは元に戻らずとも、抱きしめ合ったふたりは月に祝福されたかのように美しかった。

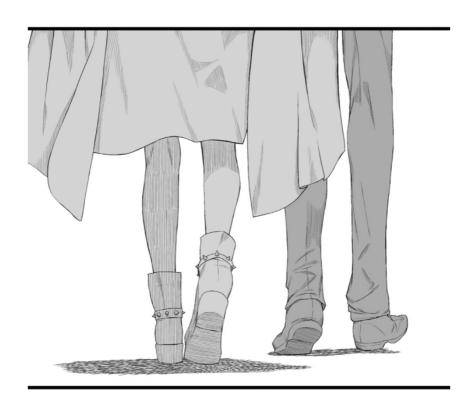
そのまま、老魔術師もまた息を止めた。

やがて、

「一ルヴィア様!」

「一おい、どうすんだよ。お前のとこの弟子!」

気絶したグレイを抱えたクラウンとフリューが、何も知らぬ顔で呼びかけてきた。



秋の日差しに目を細め、自分はひさびさに『時計塔』を訪れていた。

ロンドン中央のそれと異なり、煉瓦と石造りの建物たちが織りなす風景は、故郷のそれを思い起こさせる。十二世紀頃に作られた建物がいまだに残る、中世と近代が絶妙に入り交じった街並み。

四十を超える学生寮(カレッジ)と百を超える学術棟と、そこに住む人々を潤す商業で成り立つ街—この一連の土地および、中心に佇むはじまりの学舎を指して、魔術師たちは畏敬をこめて『時計塔』と呼ぶ。

学部と部門ごとに、この街のつくりは大きく変化する。

師匠の管理下である現代魔術科の場合は、スラーと呼ばれる通りがメインだった。実のところ、つい十年ほど前まで『時計塔』のご近所に過ぎなかったスラーなのだが、現代魔術学科の生徒数が増えるに従って、やはり専用の土地が必要だろうということで、こっそり魔術協会が買い取ったらしい。

もちろん現代魔術科にしてみればごっそりと借金が増えるわけで、『時計塔』の中でも近代的な街といえば聞こえはいいが、どちらかといえば安物っぽい景色になりはててしまっている。まあ、自分としてはその安っぽさがどこか好もしくもあったのだが。

ともあれ、そんな現代魔術科の学術棟で、

「.....あ」

そそくさと、自分は身を隠した。

おおよそ十秒もしないうちに、どたどたと足音がやってきたの だ。

「グレイたーーーーーーーん!」

ぶんぶんと手を振り上げたのは、金髪のカールも麗しい美少年であった。

「あ、あれ、グレイたんは! グレイたんはどこ行ったの! 僕の 愛しのマイフェアレディは?! 確かに入り口のあたりから、二週間 ぶりのグレイたんの匂いがしたのに!」

きょろきょろと周囲を見回し、鼻をひくつかせる犬系美少年。

ばかりか、近くの柱や壁に鼻をすりよせて、くんくんとやり始める。

顔はいいのだから、この奇行さえなければと嘆く同級生多数。いや顔と血統がよければよいのだという、一部女子からの人気も大変に高かった。今のうちにつばをつけておけと嗾けしかけている親も多いらしく、いろいろな意味で魔術師の思想について不安にさせられる。

なお、師匠の弟子の中で言えば、堂々の苦手度一位タイは『天才馬鹿』の名を恣ほしいままにするフラット・エスカルドスである。翌年、鉱石科および師匠が教鞭を執るエルメロイ教室ではあのルヴィアを含むさらに強烈なペアがデビューを飾るのだが、現在の時系列の自分には与あずかり知らないことだ。

やがて、犬系美少年も諦めたのか、とぼとぼと肩を落として玄関から立ち去っていく。

ほっと息をついたところで、

「……隠れる気持ちはよく分かる」

柱の陰から声がして、びくうっと肩を揺らした。

「.....あ、師匠」

「回復したようで何より」

「イッヒヒヒヒ! 〈槍〉まで使わされるとは思ってなかったが、なんせたらふく喰わせてもらったからな!」

右手のあたりで、アッドがまた笑い声をあげた。

それから、自分も口を開いた。

「……なんとか、です。後の顚てん末まつも、ライネスさんから聞かされました」

「ご苦労。……まあ、さすがにあの方法で、彼女の魔術刻印を修復するわけにはいくまいからな」

魔術刻印の修復。

そのことも、ライネスから聞かされていた。

オルロックが看破した通り、師匠が剝離城の遺産話に参加したのは、エルメロイの魔術刻印が破損したためだった。現存している魔術刻印はやっと二割強。そしてその魔術刻印は、本来の後継者であるライネス・エルメロイ・アーチゾルテに移植されているのだ。

かつて、師匠とライネスの間でどのような言葉が交わされたのかは分からない。

ただ、その際の契約が「エルメロイの破損した魔術刻印を復元すること」であり、「エルメロイの負った借金をすべて返済すること」であったらしい。後者はまだしも、前者はまともに考えれば不可能に等しい。調律師によって癒すという一般的スタンダードな方法では、それこそ一生かかっても足りるかどうか。

だが、師匠の側に、契約を違えるつもりはないらしかった。

「一応、私にもアテはある。......頼りになるかというと、怪しいがな」

嫌そうに付け加えたのは、今回の剝離城に負けず劣らず、師匠に とって頼りたくない相手なのだろう。

つくづく、と思う。

「……不器用な人ですね」

「何か言ったか?」

「.....いえ」

言い訳を考えていたところで、自分は硬直した。

師匠もだった。

ただし、復帰は師匠の方が早かった。

ゆっくりと息をつき、学舎の廊下に佇んだ相手へこう切り出し た。

「……眼鏡は、回収してらっしゃったんですか?」

「あら、お気づきでした? 貴重品ですの」

「魔眼殺しは滅多に見かけませんからね」

そう言いつつ、師匠の瞳はまっすぐ相手に向いていた。

大理石の廊下とはミスマッチな、手書き友禅の振り袖。踝まで流れた異様に長い黒髪。その髪と衣装と半ば一体になった、蛇めいた 肢体。

茫然と、自分はその名を呼んだ。

「……化野菱理」

「君主ロードには、あまり驚いていただけませんのね」

眼鏡のつるを押し上げて、艶然と女が微笑した。

師匠は、忌々しそうに口を開く。

「法政科は、必ずしも魔術の神秘を求めない。あなたたちの目的はあくまで時計塔の維持にのみ向けられている……となれば、普通の魔術師と違って、あなたたちは『死なない』ことにこそ、全能力が向けられるでしょう」

しみじみと、ため息をついた。

「方法も、予想がついてるようですけど?」

「これはオルロック老とも話したのですけどね。法政科にせよ剝離 城にせよ、保存している死体はたくさんあったでしょう」

それから、すっと人差し指と中指を自分の眼球に近づけた。

「死体がミス化野に似ている部分は背格好だけで十分だ。眼球を抉り抜くということは、つまるところが顔を失うのとほぼ同義です。 ニュースだって目のところを隠すでしょう。あれはたったそれだけ のことで、人間は他人を見分けられなくなるということです。死に 方がショッキングならなおさらよろしい。その死に方だけに目がいって、死体が本当に化野菱理かどうかなど考えなくなりますから」

「ご明察」

にっこりと女は笑った。

「死体交換はちょっと安易だったかと心配したのですけど、かえって魔術師なら疑われずに通りましたわね。ええ、もちろん、あなたが余計なことを言わないでおいたおかげですけど」

Г......

その笑顔を見ながら、師匠はしばし沈黙した。

ゆっくりと、口の中で嚙み砕くみたいに、言葉を唇から押し出 す。

「清玄殿はかろうじて生き延びましたが、今リハビリを受けています。まず時任次郎坊清玄とグラニド・アッシュボーンとしての記憶を区別させるのが困難で、魔術刻印を剝離してもその状態は続きそうとのことです。工房中枢で発見されたロザリンド・イスタリも兄を失った衝撃からは立ち直っていません。ハイネの魔術刻印も回収されましたが、だからこそ今後イスタリ家の後継者争いに巻き込まれることでしょう」

「お気の毒」

これは本当に沈痛な面持ちで、女が言ったのである。

まるで、小説を読んで登場人物に同情するかのような口ぶりだった。

だが、それを咎とがめることはせず、師匠は別の話題を持ち出した。

「法政科は、この何百年かの間、アッシュボーンの儀式を定期的に 手伝っていたんではありませんか」

「あら、どうして?」

「いくら魔術刻印の破損が不名誉なことではあっても、アッシュボーン家に集まった魔術師がことごとく帰らないとなれば噂が立つのは止められない。もともと狭い業界ですからね。そうした噂を揉み消すとなれば、魔術協会全域に睨みの利くような組織の補佐が必要だ。——たとえば、法政科のような」

あ、と自分は声をあげそうになった。

菱理は笑顔を崩さない。

月のごとき穏やかな笑顔は何ひとつ変化のないままに、師匠を見つめていた。

「くわえて、あのとき剝離城アドラに集まった魔術師は、誰もが時 計塔に影響しうる人材でありつつ、法政科には制御しにくい相手ば かりだった。実は毎回そうだったんじゃないですか? アッシュ ボーンが魔術刻印修復のための材料を集める儀式は、法政科が邪魔 な魔術師を一掃するためのシステムでもあったのでは」

「ロード・エルメロイII世様」

師匠の言葉に、女が口を挟んだ。

「ひとつでも、証拠はありました?」

「何も」

「面白いフィクションをありがとうございます。でも証拠がなくて は探偵向きではありませんね」

「まったくだ」

窓の外を、師匠が仰いだ。

突き抜けた色は何の心の慰めにもならない。もとより魔術師の慰めになることなど、魔術そのもの以外にはありえないのだが、ひどく自分も虚しい想いにかられてしまった。

「では、もうひとつだけ」

師匠が人差し指をあげた。

「〈天使名〉は、あなたがつくらせましたね?」

「あら」

と、菱理は口を押さえた。

それはバレないと思っていたのに、とでも言うようだった。

「省略法ノタリコンや数秘法ゲマトリアはカバラのお家芸といって もよいですが、いささかお遊びの要素が過ぎた。漏れ聞こえるゲ リュオン・アッシュボーンの性質と一致しない。こういう他愛ない パズルをつくるのは、もっと魔術がどうでもよいと思ってるような 相手だ」

「……そうね。そんなことができる魔術師は限られてるわ」

ホワイダニット。

どうしてそうしたのかだけは分かると師匠は言った。どんな魔術を使うのか、どんな魔術がありえるのかは分からなくても、なぜそうしたのかだけは魔術師の性質と一致するからだと。

「たとえば、私」

と、菱理は自分の振り袖の胸元を指さした。

「たとえば、あなた」

と、菱理は師匠のジャケットの胸元を指さした。

「魔術師は欺ぎ瞞まんと神秘とのダンス。誰もが根源など辿り着かないと知っているのに目指している。私たちだけはそんな馬鹿げたダンスから離れていられると思っているんだけど、違ったかしら?」

「あなたは意志がないから目指さない。私は才能がないから目指せない。吐き気がするぐらいには、ずいぶんな違いだよ」

「結果は一緒でも? 過程の方が大事だなんて言うほどセンチメンタリストには思えないけれど」

女の手が伸びた。

どんな王宮の舞踏会でも、その手を断る男はいないだろう。

「あなたは私と踊ってくださるのでしょう?」

「御免被ります。──では、失礼を」

師匠だけは断った。

突然拙せつの手をとって、菱理の横を通り過ぎていく。

思いのほか力強い手に驚きながらたたらを踏んでいると、背中に 声がかかった。

「まだ、諦めてないの?」

「ええ」

振り向かずに、師匠が言った。

「私は、もう一度、彼に会います」

彼。

この事件で聞いた師匠の言葉の中でも、特別な響きがこもっていた。誰かに一度でもこんな風に語られたなら、それだけで一生胸を張って生きていけるぐらいに。

「ライネスとの契約を終わらせれば、私はただのひとりの魔術師に 戻れます。ただのひとりの魔術師として、もう一度あの戦いに──第 万次聖杯戦争に参加するつもりです」

後になって知る。

その誓いは、果たされることはない。師匠が十年も積み重ねてきた祈りは、極東のその戦いには届かない。第五次聖杯戦争と呼ばれる英霊同士の戦いは、彼が指一本触れられぬ彼方で行われ、終幕を迎える。

だけど、それはけして絶望ではなくて--

「……師匠」

化野菱理と十分遠ざかってから、声をかける。

本当は気弱で臆病で、しかしそんなすべてを覆い隠したつもりの 決然としたその背中に、話しかける。

「何だ?」

「……ひとつだけ、決めました」

視線はあげない。引っ張ってくれているその手に向かって、囁く。

自分の人生は後悔ばかりだ。物心ついてから、いや生まれたそのときから、多分神様が何かを間違えたのだろうとずっと思っていた。その確信は強固になる一方で、これからの人生でもけして変わることはないのだと分かってしまっている。

それでも、これだけは。

「……拙せつを、あなたの戦いに連れて行ってください」

きっとこれだけは後悔しないだろうと、初めてそう思えた言葉で あった。

〈完〉

解説

虚淵玄

まさかこのような形でウェイバー・ベルベットと再会することになろうとは。

これまで「Fate/strange Fake」や「Fate/kaleid liner プリズマ☆ イリヤ」にちらっと出てきただけでも充分に私を幸せな気分にして くれたロードエルメロイII世。その彼が、なんとタイトルに堂々と 名を掲げ、主役の座を得ての再来である。こんなに嬉しいことはない。

これが第四次聖杯戦争におけるヘタレ見習い魔術師の頃のウェイバー君であれば心許なくハラハラと見守るところであったであろうが、そこは心配ご無用。10年の歳月を経てたくましく成長しロードの名を冠された彼は一味も二味も違う。若き日の屈折は胸の内に秘めたまま、持ち前の分析眼に年の功たる狡知で磨きをかけて、ダンディな魅力で存分に魅せてくれる!

さて、Fateを巡る派生展開も既に10年を迎えながら、今なお新作発表やアニメ化などのメディア展開は絶賛現在進行形。新規客層の流入も考えれば、本書が活字媒体として触れる初のFate外伝、という読者の方もおられるであろう。なので改めてこの場において、本書の主人公ロードエルメロイII世の系譜について解説させていただきたい。

全ての原点たるビジュアルノベル「Fate/stay night」(以下SNと略称)の発表は2004年1月。(その世界観設定などの起源はさらに「魔法使いの夜」「空の境界」「月姫」などの諸作品にまで遡るがここでは割愛)そして翌年10月に発表されたファンディスク「Fate/hollow ataraxia」と概ね平行する形で企画され執筆が開始されたのが、SNの前日譚として構想された外伝「Fate/Zero」(以下Zeroと略称)であり、ここにロードエルメロイII世の若き日の姿たるウェイバー・ベルベット少年が登場する。ちなみにZeroの公開に先駆けて2006年8月に発表された「Character material」にお

いて、Zeroの登場人物をこっそりと紛れ込ませようという遊び心から登場したのがロードエルメロイII世の初出となり、この時点で付加された「時計塔の名物講師」「和製ゲームオタク」等の設定は、Zero 2 巻以降の内容にフィードバックされていく。またウェイバーのキャラデザインも、先行して描かれたロードを若返らせる形で決定された。以上がグレートビックベン☆ロンドンスターの少々ややこしい来歴である。ここまでの前置きを経てようやく、不肖この虚淵玄が解説を任せていただけることになった本書との「縁」についても補足ができる。実はZeroを書いたのって私です。ウェイバーはワシが育てた。

故にこの解説における私のはしゃぎようも察して頂けようかと思う。言うなれば8年前に嫁に出した愛娘が孫を連れて帰ってきたようなものだ。こういう喜びを得られるまでに長らく創作業を続けてこられたのだと思うと、あらためて自らの幸運を痛感する。

ちなみにZeroのプロット段階においてはウェイバーはただ「生き残る」ことだけが確定していたのみで、後にエルメロイの名を継ぎ時計塔の講師として大成する、という設定はサイドマテリアルにおいて奈須きのこ氏から提案された救済策ともいえる未来像である。こういう思いやりが虚淵玄には足りないのだ。優しい原作者に恵まれて、ウェイバーは本当にラッキーボーイである。

また本作は、Fateシリーズにおける花形キャラの一人、ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトが「初めて笑い処のない活躍をする」という点も注目すべきである。SN本編における出番こそなかったが、付録の設定資料集においてその存在を提示され、以後は数々の派生作品において鮮烈な活躍を見せてきたルヴィア嬢だが、その鮮烈すぎるキャラ性ゆえに毎度コメディリリーフ的な役回りが定番化していた彼女が、このアドラ城では「魔法使いの夜」より連綿と受け継がれる正調の世界観に沿った「血の匂いをまとう外法の者」というシリアスで非情な側面を存分に発揮している。これがどれくらい凄いことかといえば、お笑い芸人アイドルが演技派女優に転身して成功を収めるようなもんである。

その凄さの仕掛け人である三田誠氏の手腕が、つまりは大変なものなのだ。設定上でのみ語られていたロードエルメロイII世の活躍をここまで完璧に描き上げたことも含め、まさに熟練の匠の技。苛烈極まるライトノベル業界を生き抜いてきたベテランの筆は、TYPE-MOON時空に場を移したことでなお一層、抜き身の刀のような凄味でもって読者を魅了してくれる。

この「事件簿」シリーズは今後の続刊も予定されていると聞き、今からもう次の展開が待ち遠しくて仕方ない。時空を超えた英霊たちと、魔法使いを目指す魔術師たちの世界。そこは書き手にとっても胸躍る鉱脈の山であり、読み手にとっても未知の興奮が盛り沢山に待ち受けるフロンティアなのだ。そんな新大陸での冒険行をかつて存分に堪能させてもらった私だからこそ断言できる。今後ますますこのシリーズは三田氏の情熱を加速させ、そしてそれを見守る読者たちを熱狂させつづけるであろう、と。

あとがき

三田 誠

―それは、きっと星に似ている。

ほとんどの人にとっては、ただの憧れだ。

たまさか手が届いた希有なる者を見上げ、時に道みち標しるべと したり、時に勇気をもらったり、時に妬みや嫉みを抱いたり、いず れにせよ縁遠い彼方の対象だ。

星を得ようとは思わない。

星になろうとも思わない。

だけど。

諦められなかったら、どうすればいいのだろう。

誰よりも星に魅せられ、誰よりも星を熱望し、誰よりも星の意味 と美しさを知り尽くし、それゆえにこそ自分の手が届かないことも 分かってしまっているとしたら?

いっそ離れられれば楽だろう。

しかし、星に寄り添って生きることを決めてしまったのならば。

彼は、どんな気持ちで夜空を見上げるのだろうか。

*

初めて、奈須きのこ氏の口からTYPE-MOON BOOKSの構想を聞かされたのは、もう七年も前のことになるでしょうか。

新宿の帰り道だったはずです。アルタ前の信号で、すでに発売されていた『Fate/Zero』と同じようにTYPE-MOONの世界観を広げる小説を出していきたいのだと、熱っぽい語り口で話してくれました。

そのときは必ず手伝うから言ってくれと約束しつつ、こちらもいくつかアイディアを出したまま数年が過ぎていきました。

それが再燃したのは、忘れもしない「TYPE-MOON Fes. -10TH ANNIVERSARY」のときのこと。あまりにも豪華で煌びやかな十周年記念イベントの最中、招待してくれた奈須きのこ氏の隣の席で、僕は叫び出したいほどの衝撃を受けていました。

原作もアニメも十二分に堪能したと思っていた『Fate/Zero』。 しかし、イベントの大スクリーンと音響で改めて鑑賞した場面は、 致命傷といってよい衝動を刻みつけたのです。

どうしても、この男の後年は語られねばならない、と。

誰のことかはもうお分かりでしょう。

─ウェイバー・ベルベット。

後年の名を、ロード・エルメロイII世。

数日後、「誰かロード・エルメロイII世の物語を書く予定はあるのか」と尋ねたところ、「その予定はないのだけどユーやるかい」と狙い澄ましたようなカウンターを喰らったこともまた、忘れがたい思い出です。

何度も企画が紆余曲折して、そのたびに時間をかけてプロットをつくりなおす作業も、まったく苦になりませんでした。既存作品を読み返し、『時計塔』や各キャラクターの設定を氏に再確認するのがなんと楽しかったことか。

とりわけ複数作品に出てはいるものの、ほとんどがパロディ的な扱いだったルヴィアゼリッタは、呪文や仕草のひとつひとつまで、注意深く芯になる設定を再構築することとなりました。氏と話せば話すほど新しい設定が出てくるため、実のところ半分も活かせてないのが残念です。

さて、今回採用した物語形式は広義のミステリ。

題材には、現実とTYPE-MOON双方の魔術を使いました。

この現実の歴史でも、魔術はありとあらゆる部分に食い込んでます。それは文化であり民族であり民俗であり信仰であり芸術であり血統であるのです。ロード・エルメロイII世という人物を浮き彫りにするため、僕はその可能な限りの面を掬い上げました。

生涯星を得ることはなくとも、誰よりも星を知る人間として、彼を描いたつもりです。

彼の助手ワトソンとして創造したグレイやアッド、剝離城アドラ に登場する魔術師たちもどうか気に入っていただけますように。

また、表紙に「1」と打ってあることから、すでに推察されてるかたもいるかと思いますが、現在の構想としては一年に一冊。

シリーズとして、毎年冬にお会いできればと思っています。

最後になりましたが、魔術考証全般を担当してくださった三輪清宗氏(あなたとの出会いがなければこうした作品は想像もできなかったでしょう)、美麗極まるイラストを提供してくれた坂本みねぢ氏、ウェイバーの生みの親であり解説も引き受けてくださった虚淵玄氏、執筆中いろいろアドバイスしてくださった成田良悟氏、また奈須きのこ氏や武内崇氏、OKSG氏をはじめとするTYPE-MOONの方々にお礼を申し上げます。

そして、もちろんこの本を手に取ってくださった読者の皆様に も。

どうかこの一冊との出会いが、あなたにとって良き魔術とならんことを。

二〇一四年十一月

新川直司の『四月は君の嘑』を読みながら

三田 誠

MAKOTO SANDA

-代表作-

「レンタルマギカ」

「レッドドラゴン」

坂本 みねぢ

MINEJI SAKAMOTO

-代表作-

「ドレスの武器商人と戦華の国」(著:和智正喜/富士見書房)

「Lord of Knights」 (Aming)

イラスト/坂本みねぢ 装丁/WINFANWORKS

ロード・エルメロイII世の事件簿

1 「case.剥離城アドラ」

著者:三田誠

イラスト:坂本みねぢ

文章校正: 鴎来堂

角川文庫

2017年10月4日 発行

ver.006

©TYPE-MOON

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

『ロード・エルメロイII世の事件簿 1 「case.剥離城アドラ」』

2014年12月28日 初版発行

2017年8月10日 第十五版発行

発行者 郡司 聡

発行 株式会社KADOKAWA

●お問い合わせ

https://www.kadokawa.co.jp/

(「お問い合わせ」へお進みください)

- ※内容によっては、お答えできない場合があります。
- ※サポートは日本国内のみとさせていただきます。
- **%Japanese** text only

